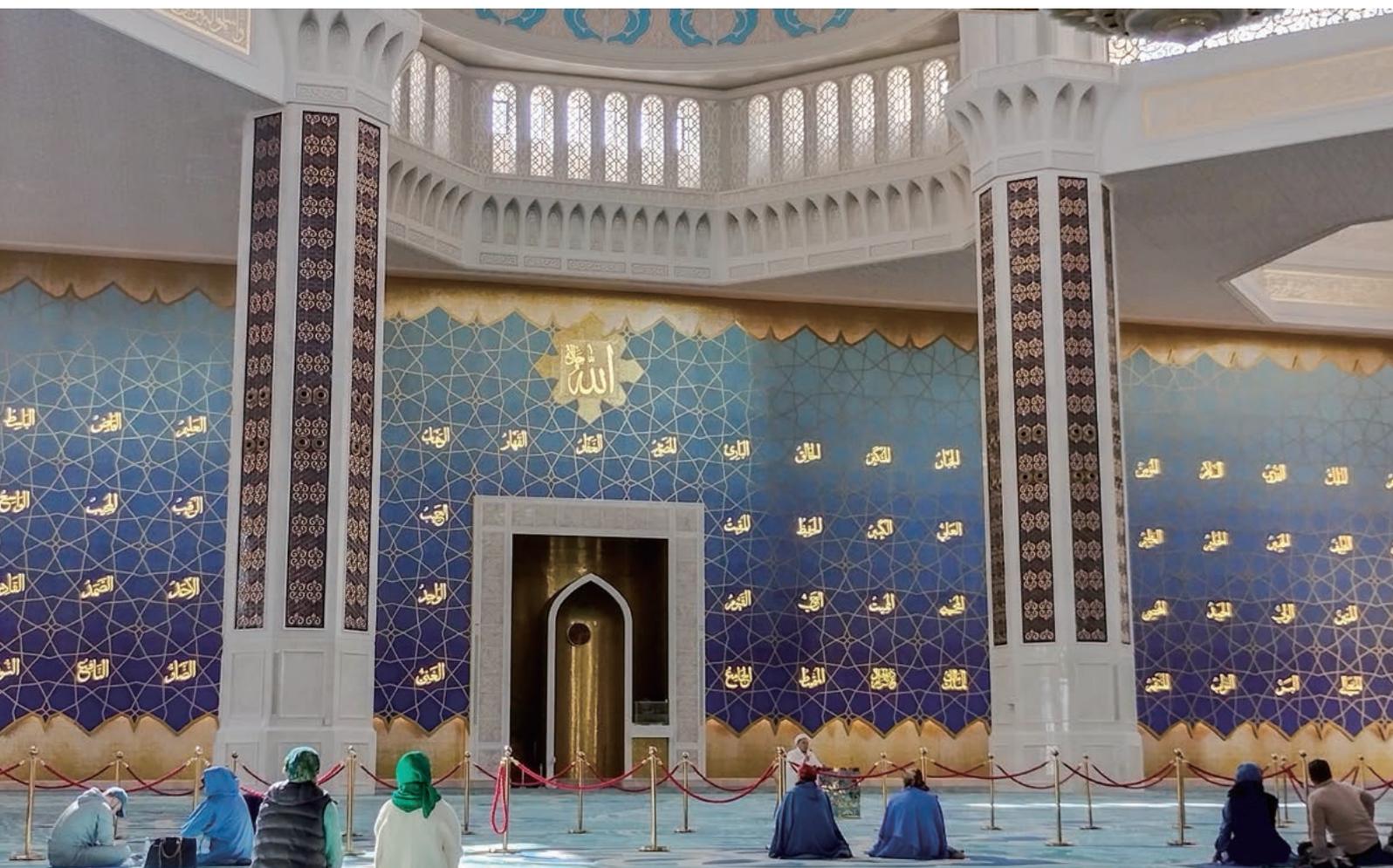


イスラーム信頼学

News Letter No.05

2025

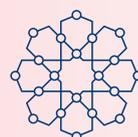


巻頭特集1：

5年間の活動を振り返る

巻頭特集2：

「イスラームからつなぐ」新刊紹介



イスラーム信頼学

Islamic Trust Studies

- 04……………**巻頭言**
 新たな跳躍台に
 ——黒木英充

- 05……………**巻頭特集**
 特集1：5年間の活動を振り返る
 特集2：『イスラームからつなぐ』
 新刊紹介



- 12……………**イスラーム信頼学エッセー1**
 お金を集めたその後で
 前近代イスラーム世界でのお金の行方
 ——亀谷 学

- 14……………**イスラーム信頼学エッセー2**
 本の探索を通じた信頼関係
 ハドラマウト地方での出会い
 ——新井和広

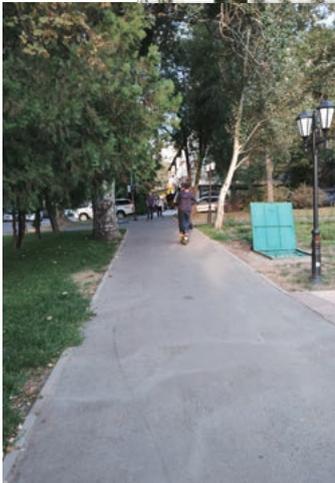
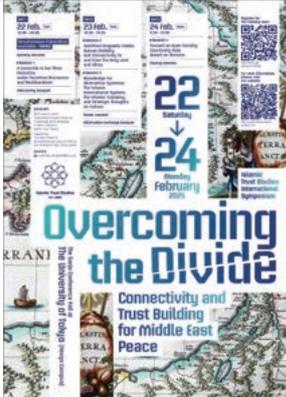
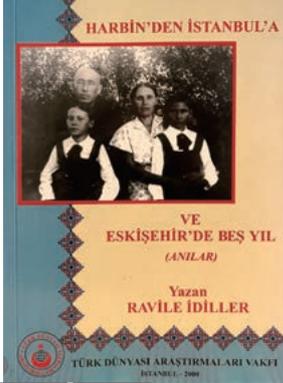
- 16……………**〇〇に埋め込まれた信頼1**
 歴史の狭間に埋め込まれた信頼
 ムスリムとの邂逅の歴史を掘り起こす
 ——黒田賢治

- 18……………**〇〇に埋め込まれた信頼2**
 ミンダナオとバンテンを結ぶ写本
 ——菅原由美

- 20……………**シビルダイアログ**
 在日クルド人の歴史的背景と現状：
 多文化共生の視点から
 ——Sohrab AHMADIAN／小野亮介

- 22……………**シビルダイアログ・キャラバン**
 世界のつながりから未来を紡ぐ：
 こどもたちとの対話から考える
 “学知の共創”
 ——太田（塚田）絵里奈

- 25……………**シビルダイアログ**
 「かわいい」からつながる——
 「クロスステッチとおしゃべり：
 刺繍でつながるパレスチナ」報告記
 ——村瀬智子



- 28 **研究の最前線1**
ムスリムへの偏見は誰が作っているのだろうか？
——佐原徹哉
- 30 **研究の最前線2**
記憶をどう受け継ぐか
満洲・朝鮮半島・日本で暮らしたタタール移民
——沼田彩誉子
- 32 **研究の最前線3**
「腐敗」を歴史的に研究する
——秋葉 淳
- 34 **研究の最前線4**
オルタナティブ
もう一つの「文明」論と考古学
——小茄子川 歩
- 36 **第3回イスラーム信頼学国際会議**
“Exploring the Tacit Knowledge of Trust Building and Connectivity amidst Predicaments” (Mar. 1-3, 2024)
——石井正子／黒木英充／昔農英明／熊倉 潤／見市 建
- 40 **2024年度国際会議紹介**
第4回イスラーム信頼学国際会議
——山本沙希
- 41 **2024年度イスラーム信頼学全体集会報告**
——荒井悠太
- 42 **各班の概要と活動／**
イスラーム信頼学科研を通して見えたもの、見えなかったもの
(A01, A02, A03, B01, B02, B03, C01)
- 56 **教えて！藻谷さん**
イエズス会シリア宣教団のコンネクティビティ
——藻谷悠介
- 57 **2024年度の活動報告**
- 62 **執筆者プロフィール**

新たな跳躍台に



領域代表

黒木英充

東京外国語大学
アジア・アフリカ言語文化研究所

早いものです。2020年12月から(年度としては5年度にわたりますが)実質4年3ヶ月間の研究期間が終わろうとしています。プロジェクト開始時はCOVID-19流行期の只中で、最初の2年間は対面形式の研究会や海外調査が計画通りに実施できませんでした。移動が妨げられたことで、人や地域・社会を相手にする学問は大きな試練にさらされました。

それでも、新たなオンラインの回路を通じて異次元のコンネクティビティが開かれ、数多くのワークショップやシンポジウムが開催され、多彩なシビルダイアログが企画されました。その過程で若手研究者を中心に斬新なアイデアが提案され、新たな取組がなされました。『シリーズ イスラームからつなぐ』全8巻(本稿執筆時点で第5巻まで刊行、残る3巻も年度内刊行予定)をはじめ、成果も多様な形で発表されています。研究分担者・協力者をはじめ公募研究代表者や研究員、折々の機会にプロジェクト外からご協力くださった皆様に、領域代表として厚く御礼申し上げる次第です。

さて問題はこの先です。

みなさまのコンネクティビティが拡大し、活性化したと思いますが、それは本領域終了後の研究においても新たな化学反応を引き起こすための基盤とすべきものでしょう。今後もさらに分野を超えて、殻を破ってのつながりづくりが求められます。

「世界の分断をのりこえる戦略知の創造」の副題を掲げて参りましたが、本研究期間中、ウクライナ戦争やパレスチナでのジェノサイドという巨大な問題が顕在化しました。19世紀的「文明vs野蛮」の概念が国際政治の舞台でおどろおどろしく復活し、この分断的思考は学知の世界にまで影響を及ぼし始めています。一歩誤れば人類規模の破局に直面しかねない危うさが世界に満ちてきました。皮肉なことに、コンネクティビティと信頼構築というテーマは、本領域終了時にますます重要性を増しているのです。

本プロジェクトを跳躍台として、新たな研究が力強く広がっていくことを願ってやみません。



2025年2月22-24日の国際会議 Overcoming the Divide のポスターのデザインに使われた古地図“Palaestina Terra Sancta 1699”。個人蔵。
作者は17世紀にミュンヘンなどで数学・地理学を教えたイエズス会の地図製作家Heinrich Scherer (1628-1704)。

巻頭特集

特集1：5年間の活動を振り返る

特集2：『イスラームからつなぐ』新刊紹介

2024年度ニュースレターの巻頭特集は「5年間の活動を振り返る」と『イスラームからつなぐ』新刊紹介です。

イスラーム信頼学が始まったのはコロナ禍1年目の2020年12月のことでした。社会全体が重苦しい雰囲気だった中でも、私たちはオンラインでシンポジウムや研究会を続けてきました。2022年より対面でのイベント開催や国外調査も実施できるようになり、全体集会、国際会議、研究会、シビルダイアログなど幅広い活動に取り組んできました。また、研究期間中に勃発あるいは緊迫化したアフガニスタンでの政変、スーダンでの軍事衝突、ウクライナ戦争、パレスチナ情勢を巡ってシンポジウムなどを緊急的に開催することにもなりました。

巻頭特集1「5年間の活動を振り返る」では、こうしたイスラーム信頼学の歩みを画像と共に振り返ります。ここで紹介する活動はイスラーム信頼学全体のごく一部にすぎませんが、5年間の活動を通してイスラーム信頼学がイスラーム的コネクティビティを考える場として機能し、国内外の多くの研究者や市民を結びつけてきた様子が少しでも伝わればと願います。

またイスラーム信頼学は、こうした一連の研究の成果をシリーズ『イスラームからつなぐ』全8巻として発信しています。巻頭特集2『イスラームからつなぐ』新刊紹介では2024年春に刊行されたシリーズ第2-4巻の内容を各担当班の研究員が紹介します。第5巻以降も順次刊行されていますので、ぜひ手に取ってください。

(小野亮介)



イスラーム信頼学ウェブサイト・トップページ

5年間の活動を振り返る

対面での打ち合わせや研究会開催が困難な状況にあったコロナ禍の2020年度に開始したイスラーム信頼学プロジェクトは、研究計画班同士で有機的に連携しつつ様々な研究会やイベントを開催してきました。本特集では記録写真を振り返りながら、これまでの5年間の活動を辿ります。

2020年度

2021年1月 全体集会

各班の代表者・分担者が初めて一堂に会し、領域代表の黒木英充さんより改めてプロジェクトの趣旨説明がおこなわれました。

1. 本領域の変革性と強み

1-1 コネクティビティ——つながりづくり

人と人、集団と集団の関係づくり
移動による異文化との接触の場における関係づくり

関係づくり、連絡、コネクティビティ 関係

اتصال *ittisāl* صلة *sila*

移動して到達する وصل *wasala*

「ネットワーク」は「コネクティビティの網」

1-2 信頼構築

جوَار *jiwār*

隣人保護の規範

「お隣さん・ご近所さん・おたがいますま」

信頼構築の技術を発達させてきた
イスラーム文明

送金の仕組み ハワラー

信頼・トラスト—「本物だと確信する」—契約・文書

2021年3月 キックオフ シンポジウム

最初の一一般向けイベントで、100人以上の参加登録がみられました。会では、各班の代表者が今後の計画について説明しました。

2021年度

7月 A02班研究会

B01班との共催によるワークショップ「イスラームの知の展開とコネクティビティ」。矢島洋一さん・坪井祐司さんの報告内容はそれぞれ、「イスラームからつなぐ」第3巻『翻訳される信頼』での論文につながりました。



7月 B01班研究会 「権力との信頼の構築と破綻」

長縄宣博さんは、多民族都市アストラハンに焦点をあて、帝政末期ロシアにおける権力とムスリム社会の信頼構築・破綻の諸相を考察しました。

8月 B02班研究会 (アフガン緊急集会)

8月15日のターリバーンによるアフガニスタンの政権掌握を受け、慶應義塾大学の田中浩一郎さんを招き、現状分析と展望を示す緊急集会を開催しました。500人以上の参加がみられました。

2021年7月18日
ワークショップ「イスラームの知の展開とコネクティビティ」

イギリス領マラヤにおける
マレー・ムスリムのコネクティビティ
～マレー語定期刊行物の分析から

坪井 祐司
(名城大学)

新たな「グレートゲーム」

ロシア 中国
アフガニスタン
イラン パキスタン
日本

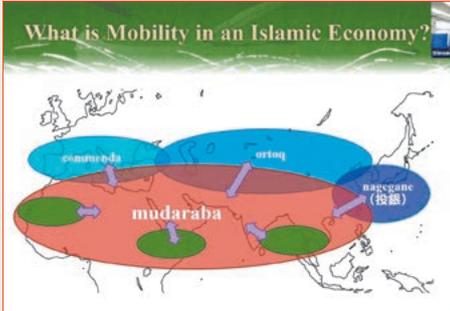
**11月 B01班研究会
「オスマン対外関係の諸相」**

写真左：黛秋津さんは、オスマン帝国とワラキア・モルドヴァ両公国との宗主付庸関係を中心に、地中海地域をめぐる外交関係を考察しました。

写真右：松井真子さんは、オスマン帝国が諸外国に与えた「アフドナーメ(条約の書)」が18世紀後半以降に近代条約化する過程を明らかにしました。



長岡慎介さん報告



Ammar Hashanさん報告

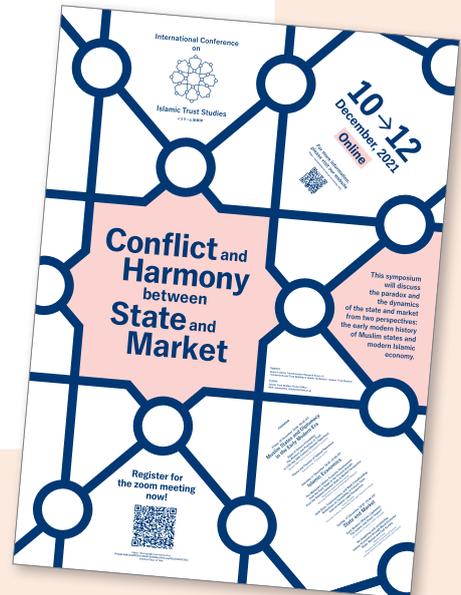


Muhammad Hakimiさん報告



12月 国際会議

B01班・A01班の共催。イスラームのコンネクティビティに接近するためのアプローチとして国家と市場とのかわりに焦点が当てられました。



**2022年3月
全体集会**

プロジェクトを段階的に発展させていくための第1回の催しとして、「信頼学のレシピ 材料編～素材と方法～」というテーマが付けられました。また各班代表者と研究員、事務局の面々が初めて対面で集う機会となりました。

Multiple terms are used in global, national, and local discussions of gender equality and equity. **Equity** provides for complementary but unequal gender roles and rights. While it claims to take into account differences, in practice it promotes discrimination by using assumptions based on sex and gender as the basis for laws, policies, and programmes.

Formal equality is the basis for constitutional provisions and laws that treat women and men the same regardless of their backgrounds. However, it fails to recognize existing and historical structural inequalities and how they intersect with other forms of discrimination, which can place certain women at a disadvantage in certain contexts.

Substantive equality and transformative equality advocates for gender-sensitive laws, policies, and programmes that correct women's social and historical disadvantages, with the goal of long-term transformation of institutions, systems, and power relations. These approaches acknowledge differences, combat discrimination, and guarantee equality of all citizens.

Munawar, "Knowledge Building Brief #3: Islam and the Question of Gender Equality" p.9
<https://www.assara.ah.org/resources/knowledge-building-brief-3-islam-and-the-question-of-gender-equality-en>

6月 B02班研究会

研究分担者の飯塚正人さんおよび後藤絵美さんが、現代のイスラームにまつわる文明間・男女間の分断に焦点を当て、その克服のための取り組みについて分析するワークショップを開催しました。

7月 B03班研究会

B03班としては初の対面開催を試みた研究会（オンライン併用）。同志社大学の富樫耕介さん（中央）にご発表いただきました。

8月 B03班合同調査@フィリピン

コロナによる入国規制が緩和され始めた時機をみて、ミンダナオ島での合同調査を実施。研究休暇（サバティカル）中で現地滞在していた代表の石井正子さんをはじめ、分担者の熊倉潤さん、佐原徹哉さん、飛内悠子さんが参加しました。



11月 国際会議

第2回国際会議はオンライン併用の対面開催となり（A02・B02班共催）、国外研究者の招へいが実現しました。“Translation and Transformation in Muslim's Connectivity”というテーマで開催された同会議では、法や翻訳が信頼構築に果たす役割について議論が交わされました。



12月 C01班カイロ街区調査

代表の熊倉和歌子さん及び佐藤将さん（元研究員）が、カイロ旧市街において街路ネットワークの現地調査を行いました。写真は、現地案内役を引き受けてくださった深見奈緒子さん（日本学術振興会カイロ研究連絡センター）およびモハメド・ソリマンさん（国立天文・地球物理研究所）との一枚。

2023年2月 企画展「学知の共創を考える：イスラーム信頼学・シビルダイアログキャラバン」の試み

2021～2022年度にシビルダイアログ企画として実施したイベント及びパネル展示の一部を再現し、その成果と課題を振り返る企画展を開催しました。



2023年2月 A02班研究会

B01班及び立命館大学中東・イスラーム研究センターとの共催でワークショップ「近世の海洋空間をめぐる異文化接触と信頼」を開催しました。



2023年 3月全体集会

「対立と紛争のなかで、つなぐ」というテーマのもと、対立関係にあってもその「あいだ」にスペースを作り出し、つないで交渉する媒介者の働きをコネクティビティという観点から検討しました。コメンテーターとして、明治学院大学の辻一さん（中央）をお招きしました。

4月
MIRAI生
ワークショップ

認可保育園で実施したシビルダイアログ企画の成果を東京外国語大学AA研にて展示し、企画展ツアーを兼ねた博士課程院生向けワークショップを開催。学生7人の参加がみられました。



イスラーム信頼学
Islamic Trust Studies

緊急講演会
「スーダンの軍事衝突
—現状、背景、見通し」

マイク機能をミュート、カメラ機能をオフに設定の上、ご参加ください。参加者による録画・録音及びスクリーンショット等は固く禁じます。

本講演会の後半に、フロアからの質問をお受けいたします（本時半を予定）。ご質問のある方は、お名前・ご所属とあわせて、チャット欄にご入力くださいませう。宜しくお願い申し上げます。

本日の講演会に関する参考資料を、下記URLよりご確認ください。

<https://www.hufs.ac.jp/asec/seminar/news/post/215.html>

4月 A03・B03班スーダン緊急集会

スーダンで突如発生した武力衝突を受けて、B03班分担者の飛内悠子さんに加え、アブディン・モハメドさん（東洋大学国際共生社会研究センター）を講師にお招きし問題背景と情勢について解説いただきました。オンラインで約200人が参加しました。



7月 ブックトーク

紀伊國屋書店新宿本店で、シリーズ第1巻『イスラーム信頼学へのいざない』刊行記念トークイベント「つながりと信頼から世界を見つめなおす～「イスラームからつながり」シリーズを読む～」を開催しました。



9月 C01班研究会@金沢

佐藤将さんの本務校である金沢星稜大学において、『イスラームからつながり8 デジタル人文学が照らしたすコネクティビティ』（東京大学出版会）の執筆に向けて研究打ち合わせを実施しました。



11月 全体集会

地域研究コンソーシアム及び東京外国語大学AA研との共催により、一般公開シンポジウム「いま、地域から『豊かな食』と『つながり』を考える」を開催。参加型企画として「食」に関するエピソードを募集し、会場入り口の世界地図に掲示しました（写真左）

2024年2月 緊急企画「パレスチナは今」

立教大学異文化コミュニケーション学部との共催で、2日間にわたり『占領の囚人たち』上映・講演会（協力：名取事務所）及び『ガザ・モノログ』朗読（協力：理性的な変人たち）を開催しました。



2024年3月 国際会議

“Exploring the Tacit Knowledge of Trust Building and Connectivity amidst Predicaments”というテーマの下、ほぼ完全対面式での開催が実現（A03・B03班共催）。花崎流地唄舞名取の花崎由季乃さん（事務局の村瀬智子さん）が地唄舞を披露してくださいました。



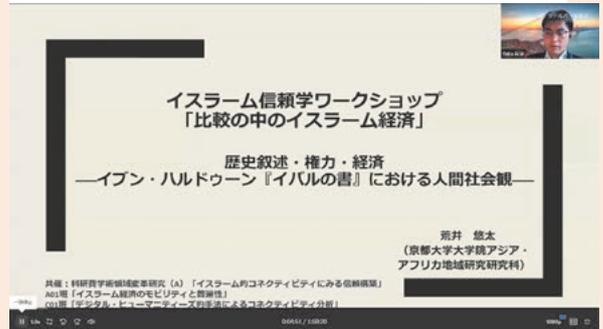
5月 総括班シンポ

学問の自由についての緊急シンポジウム。会場にはGhassan Hageさんからメッセージが届きました。



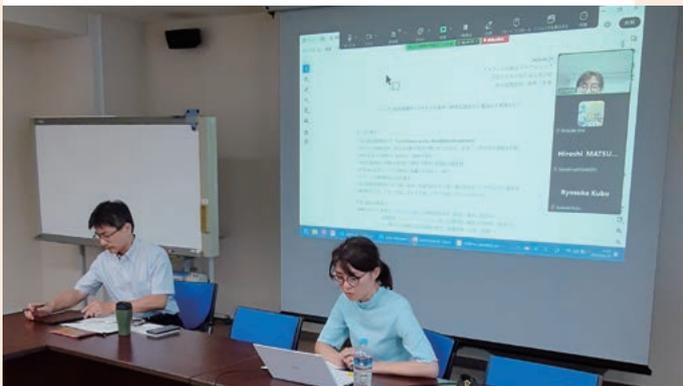
7月 A01班研究会

荒井悠太さんによる報告(ワークショップ「比較の中のイスラーム経済」)



8月 A02班研究会

総括班との共催により、ワークショップ「エジプト混合裁判所における法の適用」を開催。事務局にてイスラーム信託学を支えてきた出川英里さんにご報告いただきました。



7月 B03班研究会@盛岡

叢書刊行に向けた読み合わせ会を盛岡で開催し、ほぼ全員の顔合わせが叶いました。



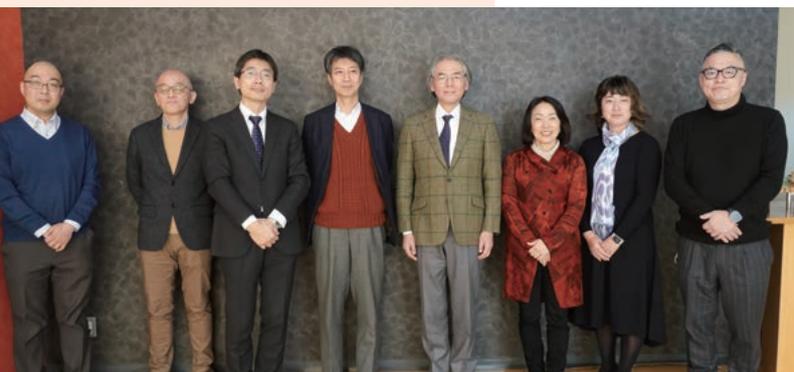
11月 シビルダイアログ講演会

「講演と音楽の集い『ガザの子どものために』」

B03班及び国際NGO「パレスチナ子どものキャンペーン」との共催により、パレスチナ問題及びガザ戦争の現状を知っていただくための講演会を開きました。アラブ楽器ウードの奏者である常味裕司さん中心の音楽ユニット「ラビィサリ」による演奏会も同時開催し、3つの宗教の聖地でもあるパレスチナに想い馳せ、多様な人々の平和的な共存を考える機会となりました。



総括班メンバー



総括班特任助教及び各班研究員



活動を支えて下さった事務局の村瀬智子さんと細田和江さん

イスラーム信託学科研プロジェクトは総括班、事務局、各班研究員が協力のうえ運営してきました。太田(塚田)絵里奈さん(元特任助教)、嘉藤慎作さん(元A02班研究員)、佐藤将さん(元C01班研究員)、水澤純人さん(元A01班研究員)、臼杵悠さんと出川絵里さん(事務局)にも多大なご支援を賜りました。

「イスラームからつなぐ」新刊紹介

A01-03班の研究成果として「イスラームからつなぐ」第2-4巻が2024年春に刊行されました(いずれも東京大学出版会)。各班の研究員・特任助教がそれぞれの書籍の内容や特徴を紹介いたします。



A01班：長岡慎介(編)『貨幣・所有・市場のモビリティ』(2024年4月刊)

シリーズの第2巻として刊行された本書では、現在急速に発展しているイスラーム諸国における経済実践、通称イスラーム経済と呼ばれる現象に焦点が当てられます。

編者の長岡氏は、弊害が顕在化する金融資本主義に対するオルタナティブとしてのイスラーム経済の可能性を提唱し、その特徴としてコネクティビティ(他文化・他地域の制度との動態的なつながり)、フレキシビリティ(多様なルーツをもつ諸制度をイスラームのロジックにより正当化し取り込む性質)、ユニヴァーサルリティ(アイデンティティの積極的放棄、非ムスリムにも受容される普遍化への志向)を挙げ、コネクティビティとフレキシビリティをまとめてモビリティと称しています。

本書は、このようなモビリティを座標軸として前近代から現代に至るイスラーム経済の諸相を俯瞰するのに加え、アフリカやインドという別地域の社会や制度におけるモビリティの可能性をも同時に探求しています。また執筆陣のディシプリンも幅広く、経済学、人類学、歴史学、考古学といった多様な視点から経済活動の諸相に迫る構成となっています。イスラーム経済研究の最新動向に触れる上でも、資本主義に代わるオルタナティブ構築の可能性を考える第一歩としても、本書の意義は大きいといえます。

(荒井悠太)

A02班：野田仁(編)『翻訳される信頼』(2024年3月刊)

A02班メンバーによるシリーズ第3巻は、人と人を結びつける翻訳という行為、そしてそれを担う翻訳者・通訳者の役割に焦点を充てています。

第I部は、イスラームにおいて不可欠な言語であるアラビア語の作品からそれ以外の言葉への翻訳によって、イスラームに関連する知識がユーラシアのイスラーム圏各地に広がる意義を考察しています。国際商業という場に着目する第II部では、立場の弱い通訳者が保身のために正確な翻訳を避けていたこと、取引されるモノがあえて翻訳されずにそのイメージが共有されたことが論じられます。第III部はロシア帝国とマレー語を共通語とする東南アジアのムスリム社会を扱います。このような多元的帝国での通訳者は、行政や外交の場で様々な集団をつなぎ、また近代的な概念を現地化させる役割を果たしました。第IV部はオスマン帝国憲法、ロシア帝国におけるカザフ遊牧民の裁判制度、現代インドネシアの法体系を取り上げ、翻訳を通じた法の多元性、マイノリティーの参加、さらには法理念のズレに迫ります。

多様な人々を結びつけ、関係を築くためには、翻訳が必ずしも正確になされるとは限らないという点も、本書の重要な特徴といえるでしょう。

(小野亮介)



A03班：黒木英充(編)『移民・難民のコネクティビティ』(2024年3月刊)

シリーズ第4巻『移民・難民のコネクティビティ』は、A03メンバーによって執筆されました。本書は、移民や難民がつくる人と人のつながりや信頼関係の大切さを探る一冊です。

パレスチナやシリアをはじめとして、中東・イスラームの難民問題は昨今大きく取り上げられています。本書では移民・難民の自主的な活動に注目し、それがグローバルな空間の中でどのように広がり、ホスト社会との信頼を築いているのかを描いています。

本書は4つのパートに分かれています。第I部では、日本で暮らすムスリムと地域社会の関係を、モスクやお墓を切り口に取り上げます。第II部では、タイやトルコ、フランス、ドイツなど世界各地の移民たちのネットワークとアイデンティティを描いています。第III部では、過去のオスマン帝国の難民支援や、現代レバノンにおけるシリアへの帰還を望まない「半定住型」難民について考察しています。第IV部では、移民や難民と出身国と政治活動との関係を論じます。

2024年10月4日、筑波大学人文社会系教授の鈴木伸隆氏を評者に迎えた本書の書評会を開催し、執筆者を交えて活発な議論が交わされました。

(須永恵美子)



お金を集めたその後で 前近代イスラーム世界でのお金の行方

亀谷 学
弘前大学

高度に貨幣化された前近代のイスラーム社会においては、誰かの手元に集められたお金がさまざまな形で動いてゆく道があった。お金が動いてゆくさまざまな道のりを見ることで、イスラーム社会における人々間の関係構築のあり方を多面的に理解することも可能となる。

イスラームは商売でお金を稼ぐことを否定しない宗教である。そのためもあってか、前近代イスラーム社会においては、専業の商人だけでなく、カリフやスルターンといった権力者や、イスラームの知識とその運用で大きな社会的影響力を持ったウラマーと呼ばれる人たちも、時に商売に参画し、儲けたり、損をしたりした。

お金を稼ぐことに成功した人々はそれをどのように扱ったのであろうか。もしお金をずっと持っていれば、いずれその人は死亡し、遺産として配偶者や子供などの血縁者に相続されることになる。遺産分配はイスラーム法に定められた計算法に則って行われ、原則として均分的に受け継がれる。その結果、財産は各人に分散し、ひとつにまとめられたまま「家」で相続されるということとはなかったようである。生前にお金を使ってなにか善いことをしようと思えば、サダカとして宗教的な寄付を行う、とりわけワクフとして大小の都市インフラを充実させることで、宗教的善行をなした上で、その管理運営を自分の望む人物に委ねることもできた。その境地に至る前であれば、さらにお金を増やすか、そのお金を守ることが目下の課題となったであろう（そのお金を使って自分の欲望を満たす他には）。

現代において、多額のお金を持つ人の課題に応える機能を持つもののひとつは銀行であろう。銀行は原則として預けら

れたお金を保全し、随時引き出して利用できるようにするほか、預けられたお金を貸し出して、新たな商売の資本として使うことができるようにする。中世イスラーム社会に我々の想像するような「銀行」が存在したかについては、筆者はやや懐疑的であるが、上記のようなことは実現可能であった。

前者については、一定の額のお金を信頼できる人物に預けた上で、本人は手形を発行し、現金支払いは預け先にて期限付きで行うというのが一般的だったようだ。多額の支払いをしばしば行う人にとってはその管理の手間を省くために有用な手段だっただろう。特に国家において高い地位を持つ者にとっては、集めたお金を分散して預けておくことで、自分の地位が失われ、財産没収に見舞われたときに、財産を保全できる可能性を高める手段でもあった。国家もまた信用取引を大いに利用した。行政機構から払い出されるお金が多額になると、しばしば手形によって支払われた。また、地方から中央への税収も、手形を用いて送金された。現代的な銀行が存在せずとも、同様の機能は果たされたのである。

信用取引は比較的小規模な取引でも普及していたと思われる。例えば、ヒジュラ暦173年／西暦789年に作成されたアラビア語パピルス文書は、アキーラという女性が購入した小麦に対する1ディーナール（金貨1枚）の支払いが終わっておらず、この文書を持つものがその請求権を持つことを記したもので

写真1: ウマイヤ朝アブド・アルマリク時代のディルハム銀貨 (バスラ、ヒジュラ暦80年／西暦699-700年)



American Numismatic Society, 1971.316.1428
<http://numismatics.org/collection/1971.316.1428>

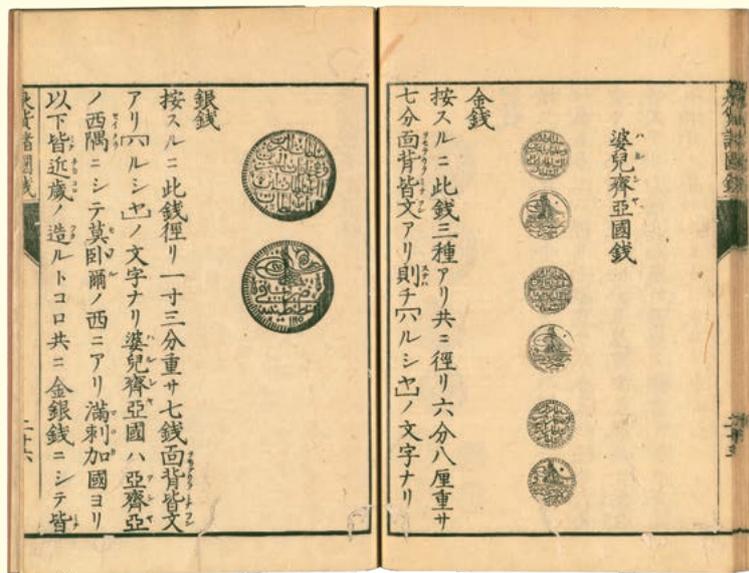


写真2：朽木昌綱が所有していたイスラーム貨幣（オスマン朝のイスタンブルおよびエジプトで作られたもの）
 朽木昌綱『和漢古今泉貨鑑』第5巻、25葉裏・26葉表、
 国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/2563834> (参照 2024-12-06)

ある。この文書が他の者の手に渡っても、彼女に対して請求が可能であることも記されている、いわゆる約束手形である。

借金をすることについては、イスラーム法では金を貸して利子（あるいは高利）で儲けることは禁じられていたが、キラード（ムダーラバ）のような合法となるような取引の形をとることもできたし、ムスリム以外の人たち、特にユダヤ教徒がこのような業務に従事していた例も散見される。ともあれ、中世イスラーム世界でも、借金をして手持ちの資本を増やすことで、利益を最大化しようとする事例が見られる。

10世紀のイラクで書かれたタヌーヒー『イスラム帝国夜話』には以下のような話が収められている。バグダードの資産家が、通りがかった飛脚を歓待しながら彼の運んでいた書状の内容を盗み見て、オリーブ油の価格が高騰しつつあることを知った。資産家は飛脚を引き止めておき、代理人に「両替商の某と某から、彼らの手元にあるありったけの金貨や銀貨を直ちに集め、今日のうちにオリーブ油を可能な限り買い取れ」という指示を出した。借金をして買い増しを重ね、最終的に1万ディーナール分のオリーブ油を買い占めた。飛脚が情報を伝えたのちにオリーブ油が高騰したため、それらは2万ディーナールで売却されて、彼は1万ディーナールの儲けをせしめたという。このような投機もしばしば行われ、上記のように大勝ちすることもあれば、大失敗に終わって借金だけが残る場合ももちろんあった。

そうしてできた借金を返済できなくなってしまった場合はどうなったであろう。イスラーム法においてはムスリムを奴隷とすることはできないという原則があり、債務奴隷として売られるという例はほとんど見当たらず、基本的には投獄されるだけであったようだ。だけであったといっても、牢屋で死亡してしまう人も少なくなかっただろう。

自分のお金を守るために、集めたお金を物理的に隠す場合もある。『イスラム帝国夜話』には、ある人が手元に置いてあるお金のことが心配になり、現金3千ディーナールを壺の中に入れ、屋敷の壁を掘って、その壺が入るだけの壁龕を作って

その中に壺を設置したという話がある。このように、なんらかの危機に際してまとまったお金を隠す、埋蔵することも行われたようだ。こうして隠されたお金が、現代になって土木工事などの際に発見されることもあるという。ちなみに上記の逸話のオチは、壺を隠した壁が通りに面した壁であったため、壁に穴を開けて屋敷に侵入しようとした盗賊に壺を発見され、屋敷に入ることなく奪い去られた、というものである。

中世・近世のイスラーム世界はユーラシアの経済の中心の一つであり、イスラーム貨幣は発行地から遠く離れた場所でも発見されている。特に大量の埋蔵貨が発見されているのは北欧であり、数十万枚のディルハム銀貨が発見されている。これらの銀貨は主に、イスラーム世界において当時求められていた、軍人とするための奴隷を購入する代金として北方の人々に支払われたものだと考えられている。

さて、「お金を集める」が、富の集積を意味しない場合もある。コインそのものにコレクションとしての価値を見出す場合である。前近代イスラーム世界でのこうしたコイン収集の例は見当たらないが、中国ではすでに南宋の時代に『泉志』が著され、日本でも江戸時代には貨幣コレクションに基づいた貨幣カタログを発行するということが行われた。

江戸時代、丹波福知山藩第8代藩主・朽木昌綱は、藩主になる前、江戸藩邸にいた頃にコイン収集家として活動していた。彼は日本や中国の貨幣にとどまらず、海外の貨幣も熱心に収集していたが、その中にイスラーム地域の貨幣も含まれていたことはそれほど知られていないだろう。彼の出版したカタログには、東南アジアや、インド、イラン、そしてオスマン朝の領域で発行された貨幣の図像が掲載されている。朽木昌綱にこれらの貨幣を贈ったのは、オランダ人の長崎商館長ティツィングであった。彼は日本の情報や物品と交換に昌綱にコインを送り、日本を離れた後も彼との友誼を忘れず、手紙を交わし続けた。イスラーム貨幣がこんな形で信頼構築に資する場合もあったのである。

本の探索を通じた信頼関係

ハドラマウト地方での出会い

新井和広
慶應義塾大学

フィールドでの出会いがその後の研究のあり方を決めることがある。

同時に会った人の行動に影響を与えることもある。

研究者がひとたびフィールドに入れば単なる傍観者・観察者ではあり得ない。

海外で調査を行う場合、大切なのはいかにして信頼できる協力者と出会うかである。私は南アラビアのハドラマウト地方出身移民の歴史を研究しているが、アラビア語の史資料は未刊行のものも多く、刊行されているものでも図書館に所蔵されているものはそんなに多くない。要するに文字資(史)料を利用して研究するにしても現地(これはハドラマウトだけではなく移民の子孫が多く住んでいるインドネシアやアブダビも含む)に行き書店を回ったり個人蔵の写本やそのコピーを見せてもらったりする必要がある。私は1996年に初めてハドラマウトを訪れた。同地方はインド洋沿岸地域に親戚が住んでいる人が結構いるため開放的な側面があると同時に閉鎖的な地域でもある。域外からの客人に対しては一通り歓迎の言葉を述べるものの、外国人がこんなところまで何をしに来たのかと警戒していることもすぐに分かった。

そんな時に会ったのがタリームという町で一番大きな書店を営んでいる一家のひとり、アブドゥルラフマーン・バルファキーフ氏であった。初めて彼の書店を訪れた時は内戦の影響で一日に何度も計画停電していて、自家発電の薄暗い明かりの中で本を探したことを思い出す。そこに現れたバルファキーフ氏にこちらがハドラマウトの歴史を研究している

こと、関連するアラビア語書籍を購入したいことを告げるといくつか書籍を紹介してくれた。それは書店の店員としては当たり前の話だが、どうも他の人びとと違ってこちらの意図を理解して対応してくれていることが分かった。肌感覚で分かる警戒心も見られない。言葉にするのは難しいが、このプロジェクトの趣旨に従って、見えない形での信頼関係が生まれた瞬間だったと言っておこう。

その後大学院での試験に合格して博士候補になり、2001年にハドラマウトを再訪した時にもバルファキーフ氏は私のことを覚えてくれていた。その時には件の書店も改装して大きくなり、扱っている冊数も格段に増えていた。その後、ハドラマウトを訪れる度にまとまった冊数の書籍を購入したり、各地の聖者廟を周ったりして親交を深めていった。

私が2013年に在外研究でジャカルタに滞在していた時にはバルファキーフ氏がハドラマウトから来て、一緒にジャワを見て回った。ハドラマウトの人びとは過去に東南アジアに大規模な移住を行ったせいで、ジャワには今でもハドラマウト起源の人びとが大勢住んでいる。バルファキーフ氏の家系にも東南アジアでの結婚により華人の血が入っていて、氏にとって東南アジアは全くの異国というわけではない。彼はイ



バルファキーフ氏(預言者フードの廟近くで)
(2006年1月、筆者撮影)



タリームの書店(2006年2月、筆者撮影)



スラバヤの書店にて(2013年5月、筆者撮影)

インドネシア訪問に際して、友人や親戚から現地で連絡を取るべき人のリストを持ってきた。私もインドネシア在住のハドラーミーの知り合いがいる。だから二人の連絡先を合わせ、ジャカルタ、チレボン、プカロンガン、スラバヤ、バンカラシ(マドゥラ島)で多くのハドラーミーと会うことができた。ジャカルタでは大小の書店巡りをした。バルファキーフ氏はインドネシア語が分からないが、書籍の出版・販売に関わっているため彼にとって書店は最もエキサイティングな場所である。特にクウィタン地区にある古ぼけた書店を気に入っていた。スラバヤではジョホール在住のハドラーミーでバルファキーフ氏の長年の友人であるヤフヤー・ハティープ氏も合流して人のつながりが更に広がった。

面白いのはスラバヤでのごと、我々が泊まったのはアンペル地区という、ジャワのイスラーム化に貢献した聖者スナン・アンペルの廟がある場所だが、ハドラーミーが集中して住んでいるところでもある。そして最も重要なのは、たくさんの書店がササク通りに並んでいて、その多くはハドラーミーが経営していることである。そういった書店はアラビア語の書籍も扱っているし、ハドラーマウトから来た客人は歓迎される。ササク通りのすぐ近くには、インドネシアでアラビア語書籍を出版しているダール・クトゥブ・イスラミヤの書店もある。この出版社・書店もハドラーミー経営である。バルファキーフ氏はここが出版している書籍をハドラーマウトに輸入して販売することを思いついたようで、早速ビジネスの話を始めていた。ハドラーマウトには東南アジア島嶼部から留学生を迎えてイスラーム諸学の教育を行っている学校が3つある。そういった留学生にもそれらの書籍が売れるだろうとの目論

見だったようである。早い話、日本人が知り合いのハドラーミーを連れてスラバヤの書店を案内したら、そこで新たなハドラーミー同士の関係が結ばれたのである。

現在、私は家庭の事情で海外調査に出ることができない。またハドラーマウトを含むイエメン共和国は日本の外務省から退避勧告が出ている状態なので、たとえ海外調査が可能であったとしても訪れることは難しい。しかしバルファキーフ氏との交流はSNSを介して現在まで続いている。特に用事がなくてもハドラーマウトで開催された宗教行事の写真や動画を送ってくれたり、近況を報告してくれたりする。またハドラーマウト内外で出版された書籍も数年に一度、まとめて日本に送ってもらっている。現在のイエメン共和国の状況を考えると有難いことである。おそらくバルファキーフ氏の助けなしには私の博士号取得は不可能だったし、彼が新刊書を日本に送り続けてくれたおかげで私は現在でも研究が続けられている。私と彼の間にあるのは商売相手としての関係でもないし、純然たる友人の関係でもない。やはり書籍のやり取りを通じた特別な関係なのであろう。

バルファキーフ氏のほかにもフィールド(ハドラーマウト、ジャワ、シンガポール、クアラランプルなど)でお世話になった人は数知れない。しかし定期的に連絡をとっていない人の多くは自然と疎遠になる。また何気ない出来事がきっかけで連絡が途絶えた人もいる(この点については忸怩たる思いを抱えている)。ハドラーマウトのバルファキーフ氏は現在までやりとりが続いている数少ない知人だが、書籍に対する特別な想いを共有しているからだと考えている。

歴史の狭間に埋め込まれた信頼

ムスリムとの邂逅の歴史を掘り起こす

黒田賢治

国立民族学博物館グローバル現象研究部

日本とイスラームの関係史を考えるうえで初歩的な疑問が浮かぶ。
いつ頃からムスリムが今日の日本の領域に到来していたのだろうか？
実はそれほど問われることもなかったこの問題を考えてみよう。

日本で最初に宗教としてのイスラームを「発見」したのは、江戸時代中期の朱子学者であり幕臣であった新井白石であったことは、すでに一般に知られて久しい。それまでも回回や回教の存在については漢籍を通じて知られていた。白石は潜伏宣教師への尋問を通じて西洋世界で「マアゴメタン」と呼ばれている信仰体系と回回が同じであることを同定した。とはいえ、それ以前にも日本とイスラーム圏との間にはいくつかの接触の機会があった。それはいわば日本とイスラーム圏との間にあった忘れ去られた接触の歴史である。

ここでは、日本におけるイスラーム圏との接触の歴史、とりわけ今日の日本の国土となっている領域へのムスリムの往来の歴史について目を向けてみたい。それは日本という場でイスラームの社会に埋め込まれた知を掘り起こす以前に、日本という場とイスラーム圏の関係という前提知識を掘り起こすことを意味している。

白石以前に日本にムスリムが到来していたかを知るには、イスラームについて認識される以前であるので和書を通じては知りがたい。そこでムスリムを知る立場から記された記録、つまりは日本を訪れていた当事者であるムスリムあるいはヨーロッパ人による記録が手掛かりとなる。たとえば、後者について言えば、江戸時代初期に平戸や長崎に滞在していたオランダやイギリスの商館長の日記に、イスラームやイスラーム圏に関する情報が含まれている。彼らは東インド会社の交易を通じて、トルコ産の毛織物やペルシア産の絨毯や衣類、また徳川家光に献上して喜ばれた雉やペルシア馬などを日本にもたらしていた。

彼らの記録のなかには、モノだけでなく、ムスリムが日本に到来していたことを示す記述が残さ

れている。たとえば、平戸のオランダ商館長であったニコラス・クーケバッケルが以下のような記述を残している。なお〔〕は筆者による補足である。

〔1635年9月8日〕シャムのジャンク船（中略）には54人のシナ人、9人のイスラーム商人が乗っていた、この中にはラディア・エブラヘムの弟と日本人13人がいた。（中略）

〔1636年9月23日〕昨年シャムから公趾シナを経由して長崎に来たイスラーム商人も、今季節風期に再び彼等の商品を売った〔岩波書店篇『平戸オランダ商館の日記第三輯 自1633年9月至1637年10月』永積洋子訳、岩波書店、1969年、257頁、398頁。〕

〔1639年7月31日。中国の福建の漳州から来た〕このジャンク船で同地からヘッシング・コレイというイスラーム商人（ラディア・エブラハム Radia Ebrahim の義弟）が出発した。コレイは1637年に、長崎奉行の命令により、ヤハト船アッケルスロート号で同地に送られた人である。（中略）エブラハムはしっかりした商人で、会社の信頼できる友人であった。〔岩波書店篇『平戸オランダ商館の日記第四輯 自1637年11月至1641年6月』永積洋子訳、岩波書店、1970年、260頁。〕

上の2つの記述からも明らかなように、シャム（今日のタイ）からジャンク船に乗って江戸前期にもムスリムの商人が訪れていた。ただし彼らの立場はオランダ商館長らと異なって定かなものではなく、長崎奉行によって追い返されることもあったことが窺える。

こうしたオランダ商館長の記録だけでなく、ペルシア人による記録でもシャムから日本に来航していたペルシア人の記録が残されている。たとえば、1685年にサファヴィー朝ペルシアからアユタヤ朝に送られた使節団が記した旅行記（Muhammad Rabī ibn Muhammad Ibrāhīm, 1977. *Safīna-yi Sulaymānī (Safarnāma-yi Safīr-i Īrān bi*



17世紀にシャムで没したペルシア人シャイフ・アフマド・クンミーの墓標 (2018年8月22日、筆者撮影、アユタヤ)



Mohamed Salayの墓標 (2024年2月12日、筆者撮影、長崎)

Sayām), 1094-1098 H.Q. ‘Abbās Fārūqī ed. Tehrān: Enteshārāt-e Dāneshgāh-e Tehrān.). 旅行記にはシャムから日本を訪れたペルシア人の記録が記されている。そのなかには、日本刀に関する記述をはじめ誇張された描写も少なくなく、正確な記述とは言い難い。

とはいえ、このペルシア語の旅行記の記述は、日本側で記録されていたモウル人の解釈をめぐる手がかりとなる。江戸初期にはモウル人と呼ばれる人々が来訪していた。モウル人がムガル/モゴルの転訛という説やムスリムを意味するムーアの転訛である可能性が指摘されてきた。またいわゆる語学書『訳詞長短話』の研究を手掛かりにすれば、モウル人が使うモウル語にはムガル帝国の宮廷語であったペルシア語に若干のヒンディー語語彙が混ざっていたことが指摘されてきた。それゆえモウル人がムガルからの来訪者を指していた可能性が高い一方で、上記のペルシア語史料に従えば、彼らにまざってペルシア商人も来訪していたことが窺えるのだ。

同時代に日本で作成された文字資料については、上記の通り、日本へのムスリムの到来は知ることができない。しかしモノ資料となれば話は変わってくる。たとえば、長崎のオランダ商館を描いた絵巻などに描かれるオランダ商館の召使として従事したオランダ領東インドの人々などの資料がそ

うである。渡辺秀石 (1639~1707年) が描いたと言われている『長崎唐蘭館図巻』(神戸市立博物館所蔵)には出身地域こそはっきりしないものの、オランダ領東インドの人々が描かれている。やや時代が下ると、石崎融思 (1768~1846年) が描いた『蘭館図絵巻』(長崎歴史文化博物館所蔵)には、ブランコン(ジャワ男性の頭巾)を被った人物が描かれている。

時代がさらに下り幕末となってしまふものの、はっきりとムスリムが訪れていた足跡もある。長崎の稲佐山の悟真寺の国際墓地には、1859年に没した「Mohamed Salay」なる人物が埋葬されている。同人物の出身については詳しく知る手がかりはないが、多くは水夫が埋葬されていることからすれば、明治以前にも外国から日本を訪れる人のなかにムスリムがいたことを窺い知ることができるのである。

こうした日本へのムスリムの到来の歴史は、かすかな足跡をたどることに過ぎないのかもしれない。しかしその背景にあった世界を想像したとき、それらはイスラームに由来する信頼のシステムが内在化された社会から伸びた線としても捉えることができる。イスラームの信頼について日本という場で研究するならば、そうしたかすかな足跡をたどることに歴史的な意味があるのではないだろうか。

ミンダナオとバンテンを結ぶ写本

菅原由美

大阪大学

「東南アジア島嶼部各地で今も保管されている
イスラーム写本からは宗教的・精神的な地域の
つながりの痕跡が見つかる。この痕跡はオランダ語史料からは
見つけられることができなかった歴史である。

14世紀後半から17世紀前半までの約300年間は、
海域アジア史では「商業の時代」と呼ばれている。
この時代、東南アジアでは海洋交易が盛んになり、
新しい諸国家が次々に誕生した。明の永楽帝の時
代には、雲南ムスリムの鄭和が率いる大船団が15
世紀初頭に7回にわたる遠征を行い、中国からア
フリカ東海岸にまで及ぶ交易圏を築いた。その影
響で15世紀半ばには、マレー半島のマラッカがこ
の貿易ルートにおける東西交通の要衝として台頭
し、東南アジアの海洋世界の中心地となり、イス
ラーム商人との関係が深まるにつれ、東南アジア
におけるイスラームの中心地となった。

しかし、1511年にマラッカはその重要性を認識
していたポルトガルに占領された。ポルトガルの
独占を嫌うアジアの商人たちは、マラッカ海峡に
代わる貿易ルートとして、スマトラ島とジャワ島
の間のスンダ海峡を利用
し始めた。そして、

ミンダナオ島のイスラーム
写本 (筆者撮影)



北スマトラのアチェ、西ジャワのバンテン、東ジャ
ワの北部沿岸(スラバヤとグレシクなど)、南スラ
ウェシのマカッサルなどの港市国家がマラッカに
代わって繁栄した。

マラッカが東南アジアのイスラーム知の中心で
あったように、これらの港市国家でもウラマーな
どの知識人たちによってイスラーム文学の伝統が
生まれた。アラビア語やペルシア語の文学の影響
を受け、マレー語やジャワ語などの現地語で書か
れた文書の内容は、法学や神学に関する宗教書、
歴史書、統治理論、英雄譚、神秘主義的な詩や神
秘主義、占いや暦など多岐にわたる。これらの文
書は、海域東南アジアにおけるイスラーム化の歴
史を研究する上で重要な資料である。

17世紀になると、オランダ人がジャワに到達し、
1619年には西ジャワのスダ・クラパ港(後のバ
タビア)にオランダ東インド会社の拠点を置き、武
力によってイギリスとポルトガルを追い出し、香
辛料貿易の独占を企てた。1640年には、オランダ
はポルトガルからマラッカを奪い、インドへの海
上ルートを遮断した。その後、16世紀後半にス
ンダ海峡を支配し交易で栄えていた西ジャワのバン
テン王国は、17世紀末にはオランダの傀儡となり、
続いて中東部ジャワを支配したマタラム王国も18
世紀半ばに解体され、ジャワ島のオランダ植民地
化は進んだと、一般的な歴史書では叙述される。

しかし、そうした政治関係の変化に関わらず、
バンテンにおけるムスリム知識人の執筆活動は続
けられており、18世紀以降もイスラーム
知の系譜が東南アジア・イスラーム世界
に引き継がれ、バンテンは東南アジアの
イスラーム先進地としての影響力は持ち続け
ていたことが、近年の東南アジア各地のイスラ
ーム写本研究から明らかになりつつある。たとえ
ば、フィリピンのミンダナオ島に残されたイスラ
ーム写本にはアチェ及びバンテンのスーフィーの師か
らの系譜が記されている。

筆者は2011年より東京外国語大学アジア・ア
フリカ言語文化研究所で、ジャワ語・マレー語写

本の分析を中心としたプロジェクトを進めており、2015年よりジャワ研究シリーズを刊行している。そのシリーズ第4巻のオマン・ファトゥルマン著『アチェ、ジャワ、ミンダナオ島ラナオ地域におけるシャッターヤ教団の系譜 (SHAṬṬĀRIYAH SILSILAH in Aceh, Java, and the Lanao area of Mindanao)』では、フィリピン、ミンダナオ島マラウィ市で所蔵されているマレー語やアラビア語の写本群から、17世紀から19世紀にかけての上述地域におけるスーフィー教団のネットワークの事例を紹介している。

例えば、ンチ・シリーン・アワル・ブン・シリーン・アブドゥルガニー (Encik Sirin Awal b. Sirin 'Abd al-Ghani) による写本。彼の写本に記されたタリーカの系譜は、ハティーブ・ダウード・ブン・シャムスディン (Khatib Dāwūd b. Shams al-Dīn) という師を通して、まずバンテンのアブドゥッラー・ブン・アブドゥルカハール ('Abd Allāh b. 'Abd al-Qahhār) につながる。そして、アブドゥッラーから、彼の師であり、メッカのイマーム、ムハンマド・ブン・アリー・フサイニー・タバリー (Muḥammad b. 'Alī al-Ḥusaynī (or al-Ḥasani) al-Ṭabarī) につながり、さらに世界の宗教者の系譜を遡っていく。アブドゥッラーはバンテンで18世紀中頃に活躍した著名なウラマーであり、彼がミンダナオの写本の執筆者と直接の師弟関係にあったと証明することはかなり難しい。オマン氏も書いている通り、チルボンなど他地域でも似たような系譜が書かれた写本が存在する。ここで強調しておきたいことは、直接関係があったか否かではなく、ミンダナオのタリーカの系譜がバンテンにまずつながり、そこからイスラームの中心に向かっていくことである。つまり、ミンダナオのこの写本所持者の社会において、バンテンは東南アジア・イスラームの中心(またはその一つ)になっていることである。

バンテンではアラブ人ウラマーが宮廷に仕え、新しいアラビア語のテキストの作成や写本の書き写しが奨励されていた。アブドゥッラーの正確な生没年は不明であるが、彼が執筆した現存する写本は、1741年(ヒジュラ暦1154年)から1782年(ヒ



15~18世紀東南アジアの主要な港市国家

ジュラ暦1196年)の間に作成されたものであるため[Peacock 2024: 232]、彼の活躍していた時期がわかる。17世紀以前のイスラーム文学はペルシア文学の影響を強く受けていたが、18世紀から19世紀にかけてはアラビア語イスラーム文書が主流となった。前述の通りバンテンは18世紀に政治的には衰退しているが、このアラビア語宗教文書の普及に貢献したのがバンテン(とパレンバン)であった。先に述べたバンテンとミンダナオ島を結ぶ写本の存在は、この歴史を裏付けている。

19世紀末からオランダで発展したインドネシア学では、写本研究が伝統的に蓄積されてきた。しかし、内容の信憑性の問題から、写本は文学作品として扱われ、歴史分析に用いられることはほとんどなかった。2000年以降、イスラーム関係の写本が歴史研究の素材として見直され、国内の国立イスラーム大学の研究者らによって写本の研究が始まった。写本コレクションのデジタル化も進んでいる。大英図書館のEndangered Archives Programme (<https://eap.bl.uk/>) やハンブルク大学が支援するDreamseaプログラム (<https://dreamsea.co/collection/>) などが写本のデジタルコレクションを共有しており、研究を促進している。インドネシア各地に民間で保管されているイスラーム写本研究の進展は、これまで明らかにされてこなかった東南アジア諸島におけるイスラームの歴史を徐々に明らかにしていくであろう。この歴史はジャカルタやハーグの文書館に保管されているオランダ語文書からは見つけることができない。各地で残る写本の整備が遅れ、それらが失われてしまうことは、その地域の歴史が失われることを意味するということ意識しておかなければならないと思う。

参考文献

Oman Fathurahman. 2016. *Shaṭṭāriyah silsilah in Aceh, Java, and the Lanao area of Mindanao*. Javanese studies: Contributions to the Study of Javanese Literature, Culture and History v. 4. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.

Peacock, A.C.S. 2024. *Arabic Literary Culture in Southeast Asia in the Seventeenth and Eighteenth Centuries*. Handbuch der Orientalistik = Handbook of Oriental studies, section 1. The Near and Middle East v. 175. Leiden: Brill.

在日クルド人の歴史的背景と現状： 多文化共生の視点から

近年、在日クルド人コミュニティは日本の多文化共生で重要な役割を担っている。2024年11月開催のシビルダイアログ（A02班・B02班・総括班・東京外国語大学TUFiSCo共催）での議論をもとに、在日クルド人問題の背景、多文化共生への取り組みを考えてみたい。

1. 歴史と移住背景

インタビューや歴史的資料によると、日本にいるクルド人の一部は、クルマンジ方言を話すアトマ族に由来するようだ。この部族はイランの北ホラーサーン地方を起源とし、オスマン帝国時代にアナトリアや現在のイラン・トルコ国境地域からホラーサーンに移住したとされている。その後ホラーサーン出身のクルド人の一部はトルコ東部のデルスィム地方や現在の故郷である南東部アドウヤマンー帯に到来したとも言われている。彼らはヴァンやカルスなどにも定住し、現在ではトルコ全土に広がっている。アトマ族はシャーマニズムやゾロアスター教の影響を受けたアレヴィー派やスンニ派の信仰を實踐し、クルマンジ方言や伝統舞踊を通じて文化的つながりを維持してきた。

近年では、アトマ族の一部が日本に移住し、主に埼玉県川口市・蕨市に定住している。クルド人の移住背景には、1970年代から1990年代にかけてのトルコ南東部の政情不安や経済的困難がある。特に、“Kevirê reş”（黒い岩海）と呼ばれる岩塊地帯の厳しい自然環境は農業や経済活動を阻害し、多くの人々が移住を余儀なくされた。



図1 岩塊地帯に囲まれたトルコの調査地A村での筆者（2022年2月、Ahmadian撮影）

また、トルコ政府による同化政策や宗教的迫害も移住の要因であり、極右勢力と地元住民の衝突を背景とした1978年のマラシュ事件では、多くのクルド人とアレヴィー派住民が暴力の標的となり、数百人が殺害され、さらに多くの人々が負傷した。この事件は、トルコ国内における少数派に対する深刻な脅威を浮き彫りにし、多くのクルド人やアレヴィー派が国外脱出を余儀なくされるきっかけとなった。さらに、1958年に日本とトルコの間で締結された短期滞在査証（ビザ）免除措置が日本への入国を容易にし、1980年代後半のバブル経済による労働力需要が移住を促進した。当時、多くのクルド人がより良い生活を求めて日本に渡った。

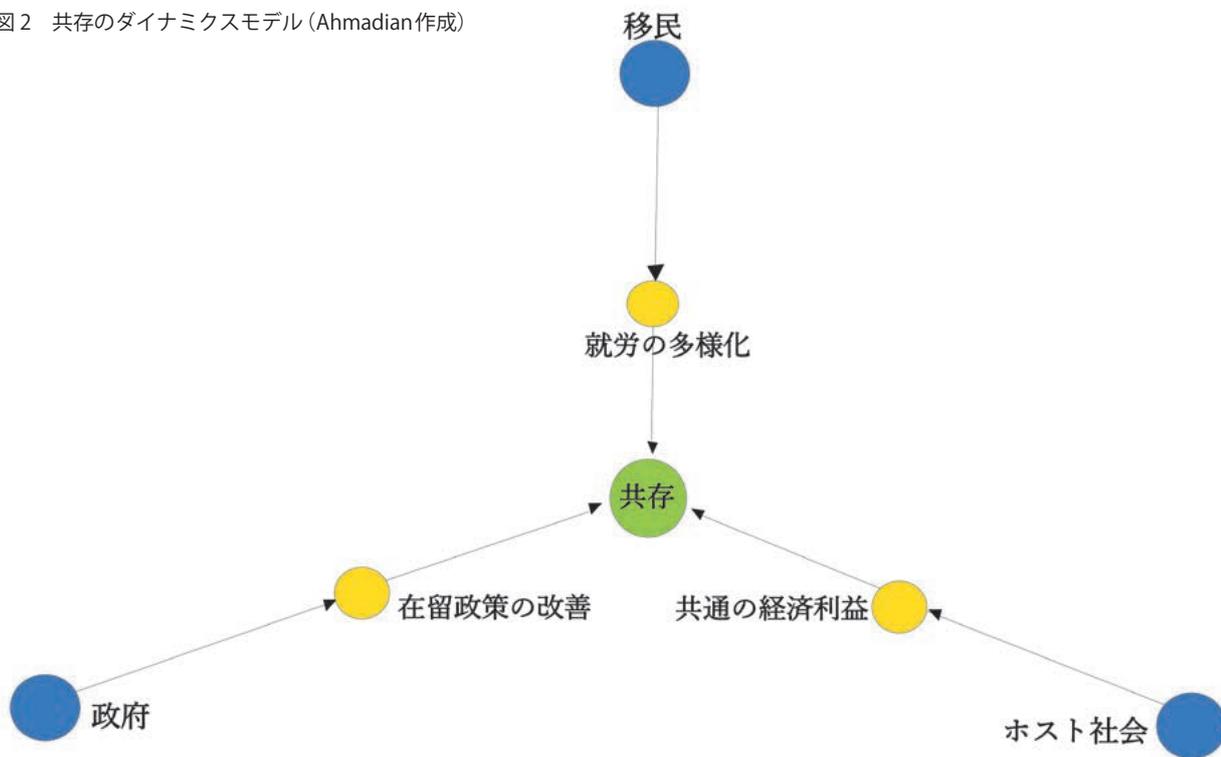
2. 在日クルド人コミュニティの現状

クルド人コミュニティが川口市や蕨市に集中する背景には、仕事や職場でのつながり、家族的な支え合いが挙げられる。この社会的関係はクルド人同士の結束を強める一方、地域社会との交流や理解を進める上での課題にもなる。在日クルド人はノウルーズ（春分の日に相当するイラン暦の新年）やクルド料理店を通じて自文化を表現しており、日本人との接点も増えている。しかし、法的地位の不安定さや難民認定の厳格さは大きな課題である。仮放免中の移動や就労制限は経済的困難を招き、子どもの教育機会も限られる。また、言語の壁や法的支援の不足はクルド人の社会参加を妨げ、孤立感の深まりに繋がる。多くのクルド人は建設業やサービス業に従事しているが、在留資格の制約により、より多様な職種への転職や経済的な向上を伴う昇進が困難な状況にある。

3. ホスト社会との関係性と共存モデル

イギリスの社会学者ギデンズの構築理論によれば、社会構造と人間の行動は相互に影響し合い、社会は固定されず、人々の日々の行動や選択によって再構築される。在日クルド人への差別やSNS上でのヘイトスピーチとその増加も、社会構造と行動の結果として理解できる。これらの構造は選択と相互作用により形成・変化する。在日クルド人とホスト社会の関係は多文化共生の進展を測る重要な指標であるため、以下に紹介する「共存のダイナミクスモデル」を通じて、移民、ホスト社会、政府の相互関係を考えてみよう。ギデンズの構築理論に基づいたこのモデルは、在日クルド人、ホスト社会、政府という三者がどのように相互に関係し合うかを示し、そして、法律や制度、経済的枠組み、社会的受け入れ態勢など

図2 共存のダイナミクスモデル (Ahmadian作成)



の仕組みの改善を示唆するものである。

●ホスト社会と共存の関係：共通の経済利益

クルド人労働者の職種は限られ、彼らの多くが建設業や飲食業に従事している。共通の経済利益を拡大することで、ホスト社会と移民の関係を深めることができる。その実現には、異文化理解の促進や移民が多様な産業で活躍できる環境整備が必要となる。

●移民と共存の関係：就労の多様化

難民認定制度の厳しさや在留資格の不安定さが、移民の社会貢献を妨げている。特定職種への集中を改善し、雇用機会を多様化することが重要だ。これにより移民は安定した生活を送り、社会全体への貢献が可能になる。

●政府と共存の関係：在留政策の改善

難民認定や在留資格の見直しは、多文化共生の実現に不可欠である。現行制度は特定の国籍への偏りが見られ、2023年に導入された「補完的保護」は、ほぼウクライナ人の避難者に限定されている。この偏りを是正し、クルド人の在留資格を改善することが必要である。また、日本語教育や文化交流イベントを通じ、移民受け入れ体制を整えることも重要といえる。これらの政策改善は移民の生活安定に直結し、社会への貢献を促進する。

このモデルが示すように、在日クルド人コミュニティが適応の努力を続ける一方、ホスト社会と政府は包括的な支援と構造改善を進める責任を担っている。共存の実現には、経済

的利益の拡大、雇用機会の多様化、政策の改善による持続可能な基盤の構築が求められるといえるだろう。

シビルダイアログでは、明戸隆浩氏（大阪公立大学）が在日クルド人に対するヘイトスピーチが高まった要因として、入管法改定（2023年）反対運動の多様な参加者の中にクルド人コミュニティも含まれていたこと、日本第一党によるヘイトデモ、X（旧Twitter）上での差別扇動を挙げたほか、不特定多数の対象に対する差別扇動の特徴を解説した。馬場裕子氏（大阪大学）は外国ルーツの子どもへの日本語教育施策の変遷と現状を踏まえた上で、氏が枠組み作りに携わった大阪市の公教育における取り組み事例（教員の加配、教育センター校の設置、日本語指導協力者の派遣など）を紹介した。

4. 結論と展望

以上、このモデルでは、在日クルド人コミュニティが社会に適応する一方、ホスト社会と政府が支援を通じて、法律や制度、雇用機会、教育、社会的受け入れ体制などの仕組みを改善する責任を示した。共存の実現には、経済的利益の拡大、雇用機会の多様化、政策の改善を通じた基盤構築が必要である。また、クルド人コミュニティ、ホスト社会、政府の間の対話は、多様な視点を共有し、相互理解を深め、解決策を模索する貴重なプラットフォームとして機能する。最終的に、政府が支援政策を強化し、市民がクルド人の文化と歴史を理解することで、偏見を減らし、多文化共生の意識を高めることが求められるだろう。これこそが多文化共生社会の第一歩であり、在日クルド人と日本社会が協力し、未来に向けてより良い共存を築くことを願っている。

シビルダイアログ・キャラバン 世界のつながりから未来を紡ぐ： こどもたちとの対話から考える“学知の共創”

太田(塚田) 絵里奈

東京大学附属図書館アジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門 (U-PARL)

保育園を舞台にした総括班のシビルダイアログ企画。

「イスラーム信頼学ニュースレター」最終号に掲載される本稿では、4年間にわたる試行錯誤の歩みを振り返るとともに、こどもたちとの対話を通じて考えた「学知の共創」の在り方を見つめ直す。

「対話」に終わりがないように、「シビルダイアログ」の試みも常に未完成——今年度で4年目を迎えた保育園でのシビルダイアログ企画は、グローバルヒストリーの視座から世界のつながりを考えることを目的とした、双方向的なアウトリーチイベントとして始まった。企画段階で最も留意していたのは、どうしたら「世界の分断を乗り越える」というプロジェクトのテーマに相応しい

ものになるか、ということであった。そのためには、イスラームやイスラーム地域のみならずフォーカスしないこと、また世界のつながりのなかでイスラームが梃子のように介在している事実を「強調」するのではなく、「匂わせる」ことが重要であるように思った。特に筆者のフィールドである「イスラーム史」を全面に出しては、地理的、時代的にもかけ離れた世界として受け取られてしま

う可能性がある。そこで展示やワークショップでは、イスラーム地域からつながるヨーロッパや日本の事例も紹介することで、「世界のつながり史」のなかに「自分」を位置付けられる内容を目指したいと考えた。

だが、この一見「なんでもあり」の題材に、どのようなストーリーを付したら企画としての一貫性を保つことができるのだろうか。ダイアログの舞台を提供してくださったのはコミュニティスペースを併設した認可保育園であり、やはりこどもや地域の方々にとって身近に感じられる切り口が相応しい。そこで初年度となる2021年度は「動物がつながる世界」と題してこどもたちとのワーク



企画展「学知の共創を考える」に寄せられたメッセージ

ショップを行ない、その成果物を含めた展示として、動物の移動史を扱うこととした。このイベントは4日間の一般公開で、1,300名近い来場者を集め、盛況に終わったため、続く2022年度は天文学、地理学の東西伝播史をテーマとし、同様の枠組みで開催した（「空と海がつながる世界」）。

保育園のコミュニティスペースを利用したこれら2回のイベントにおいて、大学キャンパス内で行なわれてきたアウトリーチ型イベントとは異なる、多様な来場者の関心を集められたことは、社会還元という点では大きな成果だったと思われる。他方で、このようにキャンパスを出て、イスラームに対する関心の高くない人々にも信頼学の射程を届けるには、時間、労力、モチベーションなど、有形無形の大きなコストを必要としたことも事実であった。そこで、「学術変革」の時代におけるアウトリーチを考え、実現するための意見交換の場となるよう、企画展「学知の共創を考える」を開催し、シビルダイアログを構想段階から振り返る展示のほか、2年間の成果と課題をめぐるディスカッション型の関連イベントを行なった。そこで中心となった論点とは、「伝える」という従来型の成果還元を超え、学知を社会と「共に創る」ためには何ができるか、そしてそれにはどのような体制や態度、すなわち「構え」が必要なのか、ということであった。

＊

この展示をもとに、京都大学学際融合教育研究推進センター、こども環境学会の年次大会など、プロジェクト外でも本企画の狙いや成果について報告する機会をいただいた。そしてディスカッションを通じて生まれたアイデアから、カフェにおけるアウトリーチという新たな試みも行なった（2023年度「シームルグのたまご」）。

これらのイベントを通じて実感したのは、研究者の数だけアウトリーチに対する考え方が存在すること、そしてそれを実行に移すための枠組みが十分に整

2024年度シビルダイアログ「ボードゲームの世界へようこそ」おはなし会



すごろくはこどもたちの「好き」の縮図

備されていないという現状だった。「走りながら考える」方式でイベントを重ねるなか、直面した様々な課題を突き詰めていくと、ある一つの問題に行き着くことに気づかされた。それは、アウトリーチを単に「成果還元」として捉えるだけでは、本当の意味での「ダイアログ」にはならないという点だった。このアプローチでは、対話によって研究者側も新たな学びを得るという本企画の趣旨を十分に達成することができない。言い換えれば、新しい時代における学知の在り方を社会と共に創り上げるムーブメントとして位置づける必要がある、ということだ。

準備段階を含めた保育園でのシビルダイアログは、「教える」という姿勢とは真逆で、自分がいかに物事を知らないかを痛感させられる経験であった。こどもたちの関心や発せられる「問い」は、縦横無尽、自由自在だ。そこには分野も地域も時代もなく、「おもしろい」という好奇心のもと、すべてが有機的かつシームレスに「つながっている」一



ワークショップの様子

——つまり「問い」がグローバルヒストリー的な発想なのだ。研究者にとってのアウトリーチの意義とは、研究の成果や魅力を幅広く知ってもらおうと同時に、専門性という枠に捉われてしまいがちな自身の研究を、多様な文脈や時空間の中に位置付けることで、その根源にある「問い」とは何かを見定めていくプロセスなのだと思身は考えている。

今年度は古今東西の「ボードゲームの世界史」をテーマに、国内外のデジタル・アーカイブから関連する写本やボードゲームの画像を集め、ワークショップを通じてこどもたちとすごろくを制作した。古今東西で制作されたボードゲームには、宗教、物語、戦争、広告など、その時代の世相や価値観を映すテーマが描かれており、すごろく型のボードゲームに描かれたコマは、「あがり」までの「仮想の旅」と考えることができる。こどもたちのイマジネーションから生まれた「令和版すごろく」をこどもたちの「好き」の縮図と捉えるならば、100年後には立派な歴史資

料になっているかもしれない。

＊

4年間を通じ、史料からみえる様々な「つながり」を、園生活という「つながりづくり」を通じて多様性に満ちた世界を知り始めた子どもたちと一緒に考えてきた。初期段階では何が出るか想像もできない、チャレンジングな企画にゴーサインを出してくださった黒木英充領域代表と、実現に向けて支えてくださった信頼学及びU-PARL関係者の皆様、ともに終わらない試行錯誤を重ねてくださっている世田谷代田 仁慈保幼園の先生方、そして何よりも子どもたちに、最大限の御礼を申し上げる。

デジタルアーカイブ・シンポジウムにおける展示(東京大学福武ラーニングシアター・ホワイエ)



2024年度シビルダイアログ企画

「ボードゲームの世界へようこそ：遊びに映された時代と社会」

【ワークショップ】

2024年10月29日、30日、31日
於 世田谷代田 仁慈保幼園

【展示】

- ・「遊びと表現展」
2024年12月16日～2025年1月10日
於 世田谷代田 仁慈保幼園
- ・「U-PARLシンポジウム・ボトルネックを乗り越える新時代のアーカイブ」
2025年1月26日 於 東京大学本郷キャンパス 福武ラーニングシアター

【共催】

東京大学附属図書館アジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門 (U-PARL)
世田谷代田 仁慈保幼園
「イスラーム信頼学」総括班

【企画・運営】

太田(塚田) 絵里奈(東京大学附属図書館アジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門)
菊地みぎわ・根本京子(世田谷代田 仁慈保幼園)

保育園における総括班シビルダイアログ・4年間の歩み

2021年度

- 「動物がなくなぐ世界」：おはなし会、ワークショップ、展示 (世田谷代田 仁慈保幼園)

2022年度

- 「空と海がなくなぐ世界」：おはなし会、ワークショップ、展示 (世田谷代田 仁慈保幼園)
- 企画展「学知の共創を考える」：展示、講演会 (東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)
- 報告「グローバルヒストリーをめぐる人文知の共創」(「分野横断プラットフォーム構築事業大総会」、京都大学学際融合教育研究推進センター)

2023年度

- 報告「保育園から地域へと広がる学び空間の創出：イスラーム信頼学シビルダイアログの試み」(子ども環境学会2023年大会、佐藤将(C01班)、本田直美(AA研)との共同報告)
- 「シームルグのたまご：ペルシアの叙事詩からつながる物語」：ワークショップ、展示 (世田谷代田 仁慈保幼園、Tully's Coffee 下北沢店)
- 報告「越境する知の共創シリーズ “伝える”を超えた知の共創を目指して」(「越境する知の共創シリーズ」、東京外国語大学学際研究共創センター)

2024年度

- 「ボードゲームの世界へようこそ」：ワークショップ (世田谷代田 仁慈保幼園)
- 展示「遊びと表現展」(世田谷代田 仁慈保幼園)
- 展示「U-PARLシンポジウム・ボトルネックを乗り越える新時代のアーカイブ」(東京大学本郷キャンパス)



今年度ワークショップの様子は、U-PARL学術専門職員の菅崎千秋さんによるレポートをご覧ください。

<https://u-parl.lib.u-tokyo.ac.jp/japanese/column98>

シビルダイアログ 「かわいい」からつながる—— 「クロスステッチとおしゃべり： 刺繍でつながるパレスチナ」報告記

村瀬智子

東京外国語大学AA研 教務補佐

混迷の一途をたどるパレスチナ。それでも刺繍を続ける女性たち。
現地的女性たちのように雑談と刺繍を楽しみながら、
今のパレスチナに思いをはせるシビルダイアログ。
見出されたのは「かわいい」からつながる希望。

刺繍を通した シビルダイアログをやりたい！

糸を斜めに交差させて×点（ばってん）を作り、月や花などの模様を描くクロスステッチ。単純ゆえに慎重さと根気が必要なこの技法を使ったパレスチナ刺繍は、パレスチナの象徴であり、母から娘へと、ずっと受け継がれてきた。

その刺繍を扱うシビルダイアログをやりたいと相談したのは、2024年の7月だった。専門家のトークに加えて刺繍小物を作るという形であれば、難しい話題でも一般の人にアプローチしやすく、女性の手仕事という側面からの対話もできる。現地の女性たちが世間話をしながら刺繍をするように、和やかな雰囲気の中で誰かと交流し知識や思いを共有するやり方は、シビルダイ

アログの趣旨にも合いそうだった。今回のシビルダイアログは、「高校生・大学1年生が理解できるレベル」のトークセッションと刺繍セッションの2本立てにし、山本真希さん（パレスチナ刺繍帯プロジェクト主宰／東京農工大学大学院博士後期課程）、並木麻衣さん（元日本国際ボランティアセンター職員）、山本沙希さん（B03班研究員）に、登壇をお願いした。また、AA研に拠点を置くTUFScフィールドサイエンスコモンズ（TUFScCo）のメンバーである東京外国語大学の大石高典准教授が、学内学生団体と展示「ガザ・フェイス～私たちは数じゃない！～」を企画していることを知り、シビルダイアログと連携できないか打診したところ、快諾のお返事をいただけた。広報では、開始から3日で定員の半数以上の



申し込みがあり、締め切り前に満員御礼という、うれしい悲鳴を上げることになった。

トーク、黙々、そしてトーク

迎えた2024年10月12日、AA研には約40名の参加者が集まり、シビルダイアログはトークセッションで幕をあげた。まず並木さんが自身の刺繍やパレスチナとの出会いについて紹介したのち、現地社会における刺繍の役割を中心に説明した。その中で、手に職を付けるために刺繍をしに行くと家族に説明することで、女性たちが外出し、自身について語る機会を得ていることへの言及があった。山本真希さんからは、パレスチナ刺繍で日本の帯を作るようになった経緯や、今もヨルダン川西岸やエジプトのカイロで刺繍を続けるガザの女性たちの現況を解説していただき、「すべての文化に敬意を」という力強いメッセージが伝えられた。今回の紛争勃発後にガザの女性たちが

当日展示したドレス、刺繍、糸、インティファード帯（2024年10月、筆者撮影）





昨年10月以降、ガザの女性たちが作ったクッションカバー（2024年10月、筆者撮影）



最後にコメントする登壇者一同（2024年10月、筆者撮影）

作った、黒地に赤い糸という伝統的なパレスチナ刺繍の色使いで「バラとはさみ」のモチーフが刺繍された作品、カラフルな幾何学模様が布の全面に刺繍された作品は、終始参加者の目を引いていた。最後は山本沙希さんが、アルジェリア研究を専門とする立場から、同国の内戦中に生じた女性運動を経て今日まで継続されている、手仕事の商品化支援の取り組みを取り上げた。手工芸活動にみられる男女の違いや、作り手のぬくもりを好む「手仕事幻想」への言及を通じて、パレスチナ刺繍を取り巻く環境が、必ずしもパレスチナ特有のものではないことが、示された。

休憩後の刺繍セッションでは、並木さんより、クロスステッチのやり方や図案について、レクチャーがあった。クロスステッチは単純な技法だが、それゆえ、きちんと「目」を数えたり、模様はずれがないかを逐一確認したりといった、根気や慎重さが求められる。初めて刺繍をする参加者からは、

「え、どうすればいいの？」や「簡単にできるモチーフは？」などの、戸惑いの声もあがった。それでも刺繍に取り掛かると、皆、黙々と作業に向き合っていた。デザインが決まり模様ができるにつれ、登壇者も参加者も、追加の模様のアイデアを話したり、互いの色やデザインをほめあったり、仕事や勉強、趣味などについて話したりと、会話が盛り上がっていった。刺繍を仕上げる段階になってくると、随所で「かわいい」や「きれい」という声が上がっていた。

最後のコメントシェアの時間、並木さんは「『かわいい』がきっかけでいい。ぜひ、今日知ったことを、色々ところで広めてほしい」、山本沙希さんは「パレスチナの女性たちは、国家間だけでなく、男女間の対立など多層的な対立・差別の中に置かれているというお話があったが、その中で、刺繍が女性たちの救いになっているのではないかなと思った」、山本真希さんは、「芸

術や工芸は生命維持に直接は関係しない。だけど、紛争の中で、詩や小説などの文芸作品や刺繍などの工芸品は人々の心の支えになっている」と、それぞれ述べた。

「かわいい」からつながる希望

今回のシビルダイアログ主催の意図は、「『かわいい』からつながる世界」だった。刺繍のようなかわいいもの、きれいなものを見たり作ったりする中で、心が弾み、会話が弾み、情報や感情が共有され、新たなつながりが生み出されるのは、特定の場所に限ったことではない。

事後のアンケートでは、「みなさんの中で自分も刺繍をしながら、現地の女性の方々の集まりも同じようにおしゃべりしたりしながらなのだ、と思いをはせることもできて、とてもよかった」（同席した初対面の3人と）イベントタイトルにあるように刺繍を通しておしゃべりの交流ができたのも楽しい体験でした」「手芸が好きということもあり、正にやりたかった事にやっと出会えた様」といった声をいただき、刺繍を通じて見知らぬ人や遠い場所とつながる機会が生まれたようで、安堵した。

加えて、参加者・登壇者双方から評価をいただいた点の一つに、パレスチナ刺繍について研究機関が一般向けに無料で取り上げたことがある。今回のシビルダイアログでは、パレスチナ刺



刺繍する参加者（2024年10月、筆者撮影）



参加者の声（アンケートより）：

- パレスチナの現状を目にするたびに、何かしたいのに何もできない自分をもどかしく感じていました。ご自身の経験をもとにお話ししてくださったお三方の報告は、どれも大変興味深かったです。また、もともと手芸が好きだったため、パレスチナ刺繍もとても楽しめました。今回参加していなかったら、この楽しさには気づけなかったと思います。
- いろいろな普段知れない、リアルな現地での生活、背景などを知れて本当によかったです。みなさんの中で自分も刺繍をしながら、現地の女性の方々の集まりも同じようにおしゃべりしたりしながらなのだ、と思いをはせることもできて、とてもよかったです。
- 私としましては、手芸が好きということもあり、正にやりたかった事にやっと出会えた様な感覚になりました。また、お三方のお話も非常に興味深く、勉強になりました。私が大学生だった頃、文化を通して世界平和に貢献する事が将来の夢でした。現在は教員として中学校で働いていますが、この日に学んだパレスチナ刺繍もどうにか生徒や大人達にも存在を知らせたいと思っております。今後このようなイスラーム文化圏内のものづくりワークショップがありましたら、是非参加したいです。
- ネットや本などの情報だけではわからない、現地とも繋がりながら活動されているからこそのお話が聞けたのがとてもよかったです。同席した3人のみなさんは初めてお会いする方でしたが、イベントタイトルにあるように刺繍を通しておしゃべりの交流ができたのも楽しい体験でした。

刺繍の魅力に注目しつつ、現地を良く知るNGO関係者や、女性の手仕事を多角的・批判的に観察してきた研究者の視点から、作り手を取り巻く環境や問題点が、取り上げられた。それにより、「かわいい」刺繍の背後にある実際の人の営みや現状が可視化され、自分と同じく血が通う人間が困難に直面していることへの理解と、困難を乗り越えてよりよく生きるために人々が築いてきた文化に対する敬意が、参加者にも実感を持って共有されたように思う。

昨年以來、研究におけるパレスチナの話は暗いものになりがちで、文化や芸術の話は背後に隠れてしまう。

悲惨な状況もかわいい刺繍も、どちらもパレスチナの今であることを、クロスステッチの実践と「おしゃべり」を通して伝えられたのは、イスラーム信頼学の「シビルダイアログ」ゆえにできたことなのだと、つくづく思う。

パレスチナ刺繍のこれからにも、課題はある。アルジェリアの事例のように、紛争後、人々が平穏を取り戻していく中で、仲間同士の対立・競争がパレスチナでも表面化することは、大いにありうるだろうし、「女性の手仕事」としてパレスチナ刺繍を評価する見方が、伝統を重視する人々と、職業選択の自由ないし女性の社会進出を重視す

る人々の間に、分断を生み出し、パレスチナ刺繍の継承にも影響するかもしれない。そこには、パレスチナ刺繍に芸術的・経済的な価値を見出す、世界の目も絡んでくるだろう。しかし、今は、パレスチナ刺繍の「かわいい」の力や、多層的な困難の中で刺繍を続ける女性たちの姿勢を、平和な未来につながる希望としてとらえたい。

貴重なお話をしてくださった3名の登壇者、この企画を快諾し応援してくださったイスラーム信頼学やAA研、TUFISCOの皆さまを始め、企画を通じてつながったすべての皆さまに、心からお礼を申し上げる。



参加者が作った刺繍作品（2024年10月、筆者撮影）

佐原徹哉
明治大学

ムスリムへの偏見は誰が作っているのだろうか？

欧米ではムスリムの移民とイスラムに対する偏見が強まっているが、その原因の一つはサラフ主義者の特異なイスラム思想を「平和の宗教」として紹介したリベラルなメディアにある。

ここ数年、カウンター・ジハード主義と呼ばれるテロリズムに関心を持っている。「カウンター」とは「反対の」という意味であるから、本来なら「ジハード」に対処するはずのものだが、テロリストが襲うのはムスリムの過激派ではなく、ヨーロッパに暮らすキリスト教徒や世俗主義的なムスリムの市民たちである。例えば、2011年7月に「欧州templ騎士団の司令官」を名乗るアンネシュ・ブレイヴィックという男がノルウェーで起こした連続テロ事件では77人が殺されているが、いずれもキリスト教徒のノルウェー人の若者たちだった。

テロリストたちが「ジハード」とは無関係の人々を殺す理由は、彼らが持つイスラムへの偏見にある。ブレイヴィックの考えるイスラムとは次のようなものだった。

イスラムは、アラーが人類に下した法典であるシャリーアに盲目的に従う宗教で、シャリーアは、あらゆるレベルで社会を統制する包括的な律法なので、宗教と政治を分けるという発想がなく、シャリーアに基づかないあらゆる形態の政府と対立する。シャリーアの権威を受け入れないことは、神に対する反逆であるから、ムスリムはそれと戦わねばならないし、神は全人類にシャリーアに従うことを命じたので、イスラムの目標は世界征服である。ジハードとはアラーの名において世界を征服する戦闘行為を意味し、ムスリムにとって最も重要な義務である。

つまり、彼は、イスラムは世界征服を目指す危険な宗教なので、欧米にいるムスリムは誰もが侵略者であり、ムスリムに寛容なキリスト教徒はその共犯なので成敗すると考えたのである。こうした偏見はヨーロッパに古くからあるイスラムの誤解が元になっていると考えられてきたが、最近、新たな事実が判明した。それは、ボスニアのムスリム勢力の指導者だったアリヤ・イゼトベゴヴィチという人物のイスラム観が影響していたということである。

ボスニアでは1990年代にボスニア政府とセルビア人勢力の間で内戦が起こったが、アメリカと西欧諸国はボスニア政府を支援し、その根拠を、多文化が共存してきたボスニアを民族主義者のセルビア人の攻撃から守るのは民主主義の理

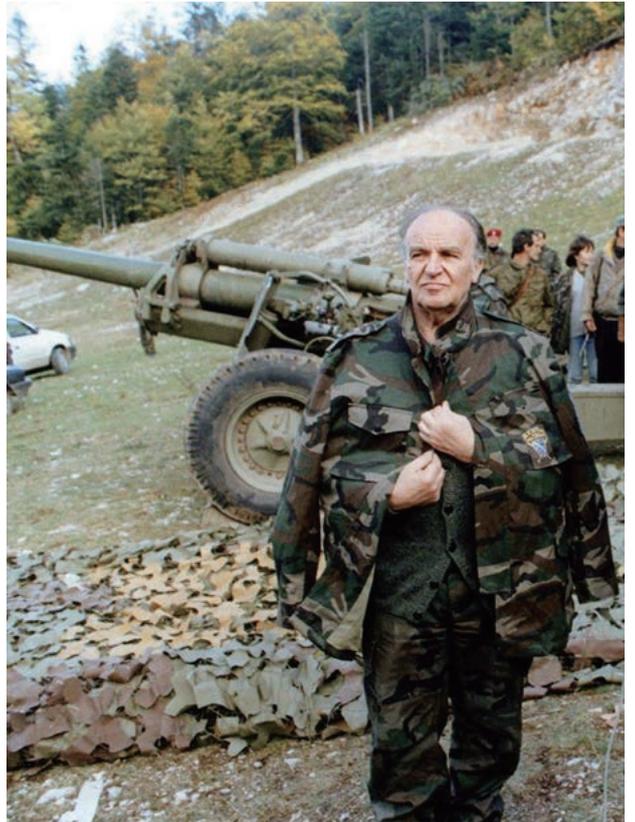


図1：アリヤ・イゼトベゴヴィチ
(出典：<https://muzejalijazetbegovic.ba/galerija/>)
(2024年11月13日閲覧)

念を守ることに繋がるからだと説明した。イゼトベゴヴィチは当時のボスニア大統領だったので、彼は「宗教と民族の多様性を尊重する民主的指導者」ということにされ、イスラムは民主主義と共存できる平和の宗教だという説明が、西側のメディアによって流布された。戦後もこうした評価が変わることはなく、国連総会では「人権と根本的な自由と民主主義を擁護しつつ、専制的な勢力から民主的で多民族の自由で独立したボスニア・ヘルツェゴヴィナを守るために戦った英雄」と讃えられ、2003年に彼が死んだ時に、英国のリベラル系世論を代表する新聞『ガーディアン』のコラムニストは、「民族浄化の波の中でただ一人道徳的な高みを維持したリーダー」で、彼がイスラム国家樹立を目指すイスラム主義者だというのはセルビアとクロアチアの誹謗中傷であって、彼の信奉するイスラムは「誰よりも命を大切にし、共存を求める」

図2：プレイヴィクの
マニフェストの表紙



思想だったという献辞を書いている。

しかし、彼の思想と経歴を詳しく調べてみると、こうした評価が極めて疑わしいことが分かってきた。イゼトベゴヴィチのイスラム観は『イスラム宣言』という彼の著書に纏った形で説明されているが、その概要は次のようなものである。

イスラムは他のどんな宗教や哲学とも異なり、人間の内面と外部世界を統合するシステムであるから、日常生活も社会も政治も一切切を信仰のために捧げることがムスリムの生存理由であり、宗教的義務である。イスラムでは国家と宗教は常に一体なので、イスラム的でない制度とは共存できないし、ムスリムは個人としては存在できず、正しく生きたいと思うならイスラム的制度を備えた社会、つまりイスラム国家を樹立するしかない。それが信者の最も重要な義務である。それを遂行するには、まずはイスラムの定める宗教的・道徳的な規範を厳格かつ純粋に守ることから始め、次いで大衆的支持を広げるために教育の分野で革命を達成し、十分な力を手にしたら、迷うことなく暴力によって権力を奪取しなければならない。

これを見ると、彼のイスラム観は一般的な解釈とは全く異なり、アルカイダやISのようなジハード主義者のそれに近いことが分かる。それが偶然でないことが、2014年にボスニアのムスリム系の新聞に掲載されたスーダンのムスリム同胞団系組織の幹部、ファティフ・ハサネインのインタビューによって明らかになった。イゼトベゴヴィチは、若い頃、ムスリム同胞団系の「青年ムスリム」という組織に属していたが、第二次世界大戦後に共産党によって組織が解散させられた後も密かに地下活動を続け、1960年代に留学生としてやってきたハサネインと協力するようになった。その際、サイイド・クトゥブの『道標』という著作を紹介され、その内容に感銘して翻訳版の出版を計画したのだが、検閲に通らなかったため、自分で書いたかのように装って『道標』の抄訳を『イスラム宣言』として出版したのだそうだ。クトゥブの思想はジハード主義の源流であるため、これが事実なら、イゼトベゴヴィチのイスラム観がジハード主義と酷似しているのは当然と言える。

イゼトベゴヴィチがクトゥブ主義者だったことは、他の資料からも確認できる。彼は、トルコのイスラム主義系の新聞『イエニ・シャファク』によって行われた生前最後のインタビューの中で、若い頃の「青年ムスリム」の活動を通して、ジハード主義の元になった近代サラフ主義の思想に惹かれたことを認めているし、イゼトベゴヴィチが1975年に執筆した『東洋と西洋の間のイスラム』という著作でも「アラーは偉大なり、アラーの他に神はなし」という二つの根本的な教義はイスラムの最も革命的な計画である。サイイド・クトゥブはそれが神の本質的な特権を篡奪した現世の権威に対する革命であると正しく理解している」と書いており、クトゥブに心酔していたことが分かる。

イゼトベゴヴィチのイスラム観が「ごく普通のイスラム思想」で「共存を求める平和の思想」だという、西側メディアの説明は完全にミスリードだった。彼のイスラム観が「ごく普通」であるならば、ジハード主義こそがイスラムだということになってしまう。イスラムは危険な宗教だというカウンター・ジハード主義者のイスラム観は間違っただけで、それは彼らが偏見に基づいて勝手に空想したのではなく、欧米のメディアがボスニア内戦中に広めたものだった。

メディアの情報には常に嘘が潜んでいるが、特に戦争中はそれが甚だしくなる。私たちがウクライナやパレスチナの戦争に関するニュースを読む際にも、このことを肝に銘じておくことが必要だろう。

沼田彩誉子

日本学術振興会
東京外国語大学AA研

記憶をどう受け継ぐか

満洲・朝鮮半島・日本で暮らしたタタール移民

日々、目にする戦争のニュース。

圧倒的な暴力と喪失を前に、できることよりできないことに囚われる。

でも、過去から学び、今を生きていくことはできるはず。

記憶を受け継ぐことが、ひとつのよすがとなる。

20世紀前半、日本や日本の支配下にあった満洲・朝鮮半島には、タタール移民が暮らしていた。彼らは、ロシアのヴォルガ・ウラル地域を出身とするテュルク系ムスリムのうち、1917年のロシア革命後東アジア各地に渡り、タタールという民族名のもとに集った人びととその子どもたちであった。第二次世界大戦という困難を難民として生きたタタール移民は、日本に残った一部の人びとを除いて、1960年代頃までに

はその多くがトルコやアメリカへと再移住していった。

タタール移民研究においては、近年、文書資料や写真資料の発掘と整理が進められている。例えば、早稲田大学図書館には「大日本回教協会旧蔵写真資料」として、タタール移民が数多く登場する約1,300枚の写真が収蔵されており、さらなる活用に向けて三沢伸生教授（東洋大学）によるアーカイブ構築のためのプロジェクトが実施されてきた。

史資料調査と並んでタタール移民の生きる／生きた世界を知るために欠かせないのが、当事者の語りを集めることである。筆者はオーラルヒストリーを用いて、後者に力を入れてきた。オーラルヒストリーとは、唯一の定義があるわけではないが、ここではインタビューによって人びとの経験を聞き、その声や記憶を保存し、解釈する研究や手法とする。ロシア、東アジア、トルコ、アメリカという世界規模の移動の記憶をもつタタール移民は、自らの人生をどのように語るのだろうか。この問いを出発点に、筆者は2010年より、タタール移民の主な居住先であるイスタンブル、アンカラ、ニューヨーク、サンフランシスコ、東京等でインタビューを行ってきた。ごく一部であるがその様子を紹介しつつ、彼らの記憶をどう受け継ぐことができるか、考えてみたい。

【語り①】

O.M. [ご本人の希望によりイニシャル表記]：あとは本屋さんがたくさんありましたね。新しい本とか古い本とか。

沼田：ええ。O.M.さんはその本をたくさん読まれたんですよね。

O.M.：ああ、講談社の本とかさ。[略] 岩波文庫。ずいぶん厄介になりました。いつもさ、カネがないから立ち読みね、やると、向こうの番頭さんが来てさ。こういう読んでる本をね、こっからパッと取りましたよ。

沼田：ええ！ [驚き]

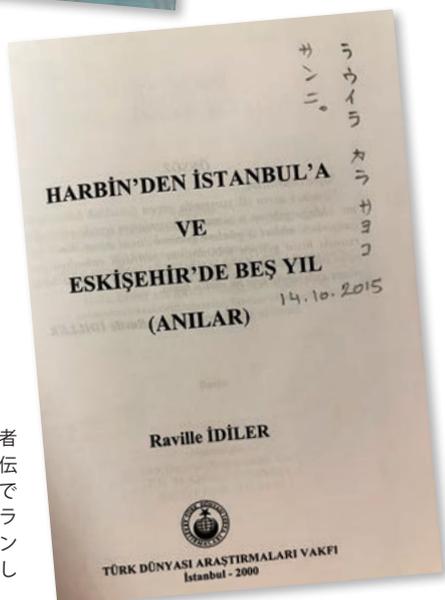
O.M.：それでフィニッシュ。[略] だから無性に本が好きでね。
(日本語の原文。2012年5月、イスタンブルのO.M.氏自宅にて)

【語り②】

ラヴィレ・イディル：あっ、それから、オジサンとオチ



イディルレル氏がトルコ語で出版した自伝『ハルビンからイスタンブルへ、そしてエスキシェヒルで5年(回想)』(2000年、初版は1989年)。



イディルレル氏は、筆者が所有する彼女の自伝にカタカナでサインができるよう、前もって「ラウイラカラ サヨコサニ。」とメモの準備をしてくださった。

1940年張家口にて、日本人女性の「宮崎さん」より個人授業を受けるイディルレル氏と妹（イディルレル氏提供）。



サン。オジサンかオチサンのどちらかがおじ、どちらかが祖父？

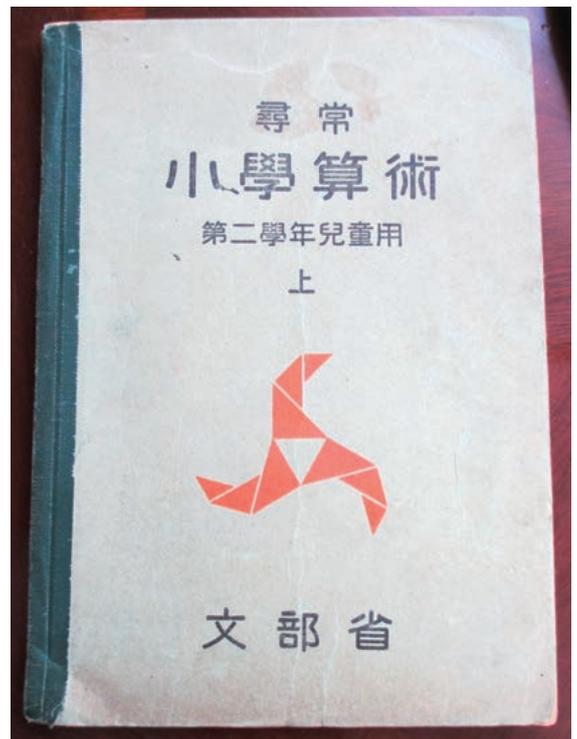
沼田：オジサンがおじ、オジイサンが祖父です。

（トルコ語からの訳文、下線部は日本語。2015年10月、イスタンブールのイディルレル氏自宅にて）

オーラルヒストリーによって新たな歴史的事実が掘り起こされることもあるが、オーラルヒストリーがもつ魅力や可能性はそれだけにとどまらない。オーラルヒストリーの強みは、ある出来事や社会のあり方、時代の空気などについて、それらを実際に経験した人びとから、「いま・ここ」というインタビューの場で直接知ることができる点に宿っている。このとき重要なのは、一連の語りはひとりだけで生まれるのではなく、彼らの言葉を聞こうとする相手、すなわち聞き手の存在が欠かせないことである。したがって、語られた内容を解釈しようと試みる際には、聞き手の立場や質問の仕方、反応なども踏まえる必要がある。

【語り①】も【語り②】も、日本語の本や日本語の単語が話題に挙げられている。聞き手の立場の問題を考えれば、聞き手である筆者が、日本語を第一言語とする日本人として彼らの前に現れたことが、このような話題を呼び起こし、そこに起因する懐かしさの感情を促した可能性を指摘できるだろう。それは例えば、インタビュー終了後にイディルレル氏が筆者にかけた「今日は楽しかった。歴史の一日。日頃の嫌なことを忘れられた。子どもの頃のように。子どもの頃から日本人が好きなの」という言葉に現れている。

さて、ここまで読んでくださった方は、ふたりの語り手は日本で生まれ育ち、日本を離れてイスタンブールに移り住んだのちも懐かしく感じていると、推測されたのではないだろうか。実際には1927年生まれのO.M.氏は「京城」（現ソウル、以下括弧略）で、同じく1927年生まれのイディルレル氏はハルビンと張家口で育っている。【語り①】はO.M.氏が京城の本町の賑わいを筆者に説明し、【語り②】は張家口で日本人



「宮崎さん」の授業で使った教科書を、インタビュー当時も大切に保管していた。

女性から日本語や算数の個人授業を受けたイディルレル氏が、1939～40年発行の「講談社の絵本」を眺めながら、おじと祖父を表す日本語の単語を筆者に確認した一場面である。

日本で生まれ育ったわけではないふたりから、なぜこのような日本語にまつわる語りが紡がれたのか。彼らの記憶を受け継ぐことに関して、筆者が立場という言葉を使いながら考えたいのが、この点である。タタール移民の東アジアの暮らしと、日本の帝国主義の影響を切り離すことはできない。20世紀前半にタタール移民が暮らした地域が日本の支配下にあったことは、朝鮮語や中国語等ではなく日本語が存在感を発揮する、O.M.氏やイディルレル氏の子ども時代の思い出と分かちがたく結びついている。

本稿のもとにあるのは、生きている時代や社会のなかで、研究のあり方を振り返ることもまた、研究の最前線にある営みではないかという考えである。筆者は十数年にわたってタタール移民の語りを聞いてきた。「あなたの人生を教えてください」というぶしつけともいえるお願いに応え、信頼して託してもらったひとりひとりの記憶を、日本社会のマジョリティである日本人として生きる筆者は、そして筆者と立場を同じくする読者の方は、どのように受け継ぐことができるのか。彼らの懐かしさの感情を受け止めるとともに、その背後にある日本による支配という歴史まで、もう一步想像をめぐらせる。それが、戦争を決して望まないはずが、止められずにいるわたしたちにとって、あるべき記憶の受け継ぎ方ではないだろうか。

秋葉 淳

東京大学

「腐敗」を歴史的に研究する

賄賂、利益供与、公金横領など、現代の日本でも政治家、公務員、企業の腐敗（汚職）の話題は絶えない。では、これを歴史学の研究対象にするとどうなるのか。誘われるままに腐敗研究に足を踏み入れてみました。

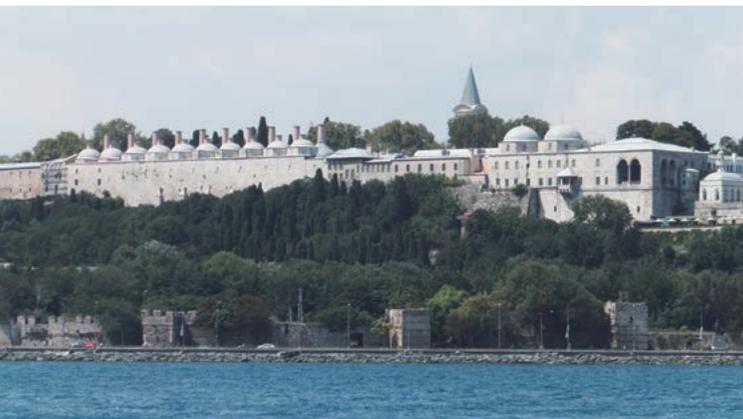
最近の私の研究テーマの一つは、オスマン帝国における「腐敗」(corruption)である。2020年夏に米国のボアチ・エルゲネ氏とトルコのジェンギズ・クルル氏から、「腐敗」研究に誘われたことがきっかけである。2021年11月には3回にわたってオンラインのワークショップが開催され、米国、ヨーロッパ、トルコそして日本から、オスマン帝国史以外にもマムルーク朝、ムガル朝、清朝中国の専門家も含む20名ほどの研究者が参加した。現在は論集刊行に向けて準備が進められている。

腐敗（あるいは汚職）とは何だろうか。一般的に「私的利益のための職権濫用」とされ、贈収賄、公金の着服や横領、縁故採用や情実人事、口利き、キックバック、不当な金品の徴収、強要なども含まれる広い概念である。腐敗はとりわけ発展途上国で期待通りに近代化が進まない原因の一つとして注目され始めた。他方で文化人類学や社会学は、腐敗を是正すべき問題というよりは、解釈すべき文化的、社会的事象と捉えて研究対象としてきた（岡奈津子『〈賄賂〉のある暮らし：市場経済化後のカザフスタン』（白水社、2019年）をぜひ参照）。歴史学ではどうかというと、英語圏では近年、対象をアジアやラテンアメリカにも広げてグローバルな研究が展開している。オスマン帝国史でも、研究グループの中心であるクルル氏には『腐敗の創造：1840年刑法・権力・官僚制』（2015年）というトルコ語の著書があり、エルゲネ氏は今年『オスマン帝国の腐敗を定義する』という著書（英語）を刊行した。

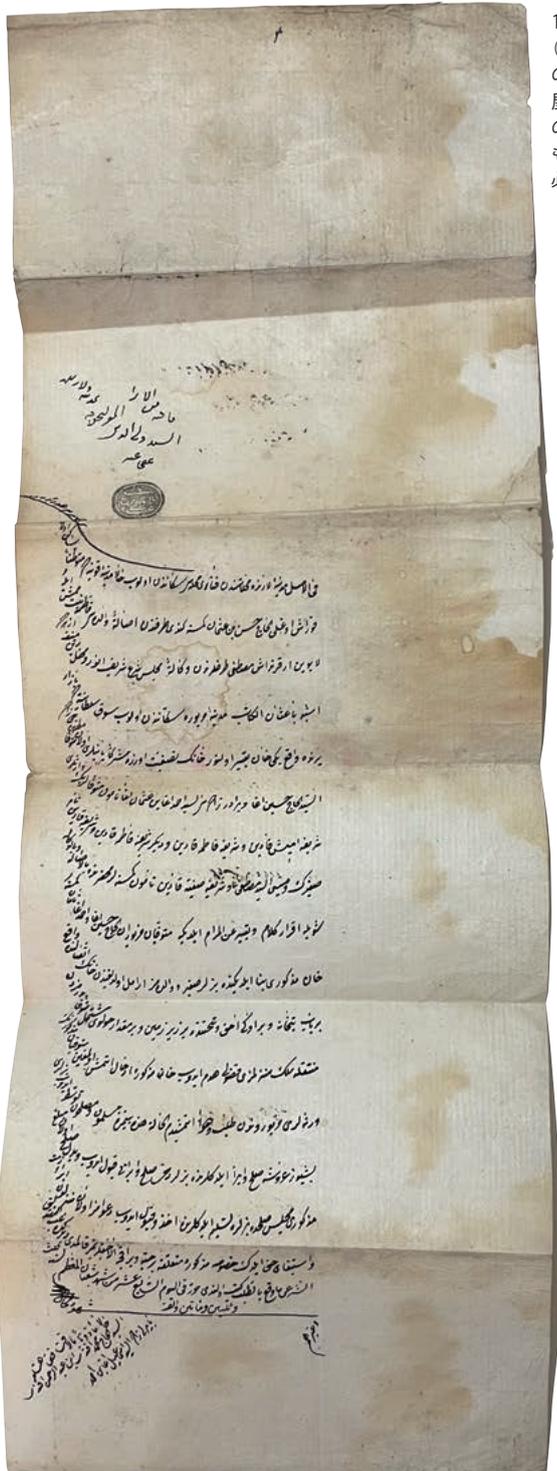
そもそも腐敗が歴史学の対象になるのか。第一に、腐敗という現代の概念を前近代の社会に適用できるのかという問題がある。オスマン帝国の場合、例えば官職の任命を受ける際に金品を上納するのは贈賄や売官なのか、それとも慣習的・制度的なやりとりなのか。研究者の間では、私的な財産と国庫の区別が存在しなかったオスマン帝国について腐敗を論ずることはできないという議論が存在し、論集参加者の中でも見解が分かれている。そこには、賄賂や情実の横行がオスマン帝国を衰退に導いたという、「衰退史観」への批判的な見方がある。

それに対してエルゲネ氏は、オスマン時代に corruption に一対一で対応する言葉が存在しないとしても、賄賂は同時代のオスマン人によって批判されていたし、役人による略奪的な金品の徴収を禁ずる命令もたびたび出されていたことを指摘する。為政者は人民の繁栄と福利を図ることで支配の正当性を得ていたのであり、それに反して私的利益のための権力の濫用とみなされる諸行為は存在したのだ、と。それゆえ腐敗を分析概念として使用して研究することは可能なのである。

こうした問題提起を受けて、私も自分のこれまでの研究対象（オスマン帝国のウラマーとくに裁判官）から、腐敗について考えてみた。論集で私が取り上げたのは、裁判官の手数料の問題である。オスマン帝国の裁判官は日々の業務の手数料が給与の代わりだったので、手数料をめぐる不正は絶えなかった。実際、不正な手数料徴収を訴える嘆願やそれを禁ずる命令は多数存在する。裁判官の手数料はオスマン帝国の法令（カーヌーンナーメ）で規定されていたが、問題は、1600年前後に定められた手数料の額が200年間不変だったため、インフレによって18世紀には非現実的になっていたことである。史料を調べてみると、法令とは異なるレートや、そもそも法令に規定のない種類の手数料の徴収が慣習化されていたことがわかる。政府はそれを暗に認め、人々もまた、それを受け入れていたようである。しかし、慣習と化していても、それが限度を超えると人々は政府に苦情を訴え、政府もまた、過去に同種の手数料を禁ずる勅令があれば、その前例をもとに人々の不満に応じて禁令を出した。非ムスリムの死者の埋葬ごとに取り立てられた手数料は、人々の不満がしばしば爆発する手数料の一つだったが、この手数料は「古来の法」により



オスマン帝国のトプカプ宮殿（現在は博物館）。中央右に先端が見える塔は「正義の塔」と呼ばれ、その下で「御前会議」が開かれて重要事項の決定が下された。その決定にもとづいて勅令が出された。



19世紀初めにラーレンデ（トルコ中部のカラマン）の法廷で作成された、家屋をめぐる和解文書。このような文書を発給してもらうには手数料を払う必要があった。



イスタンブル・ムフティー局附属文書館の内部。大工が趣味だったスルタン・アブデュルハミト2世（在位1876-1909）が自ら作ったと伝えられる棚が据え付けられている。その中にはイスタンブルの法廷台帳が収められていた。

得ることも可能だった。また、彼らにはしばしば名目的な裁判官職が与えられ、そうした職を得た者は、代理を派遣してその代理を介して手数料収入を得ることができた。

腐敗という観点から見てみると、これはいかにも典型的な身内びいき（ネポティズム）であるが、高位のウラマーの子弟に対する優遇は許容されていた。むしろ正当な権利と捉えられていたふしがある。その一方で、ウラマー家系ではない新規参入者がコネやカネを使って官職を得ることは厳しく非難された。地位のあるウラマーが自分の庇護下にある者に官職をあてがうことも、批判の対象となった。結局この制度は、「よそ者」に対して厳格なふるいをかけるシステムだったのである。

また、裁判官職に代理が任命される際には、代理は前払金を支払い、その後毎月、予め定められた金額を送金した。前払金はたいてい6カ月で更新されたので、半年の任期制だったと言えるが、手数料収入を折半するのではなく前払いで官職を「買う」行為は官職売買に限りなく近く、政府もこの方法を禁ずる命令を何度も出した。しかし、19世紀初めにはこれも容認される。さらに、収入源としての名目的な裁判官職ではなく、通常の裁判官職に任じられた者がそれを代理に委任することも18世紀には広まった。これも禁止令が出されたが、代理委任の流れを押しとどめることはできなかった。厳格な官職階層制は柔軟さに欠け、任地で裁判官をやる者に委託する方が合理的だったからである。結局、代理裁判官委任は合法化され、腐敗とは認識されなくなった。

このように、オスマン帝国において「腐敗」に着目することは、その国家や社会の仕組みを理解するうえでも有益であるように思える。論集ではさまざまな「腐敗」が扱われるはずである。乞うご期待。

禁止されていたはずが、なぜか1840年に合法化されてしまう。このように、法と慣習と不正（腐敗）の境界はゆらぎのあるものだったのである。

ところでオスマン帝国のウラマーについては、裁判官職とマドラサ教授職が階層的に組織され、中央集権的な制度ができあがっていたことが知られる。これは「イスラームからつなぐ」叢書第5巻で私が扱ったテーマである。この制度は、官職の厳格なヒエラルヒーではあっても、コネや親の地位がものをいう仕組みでもあった。高位のウラマーの子弟は任官において優遇され、出世コースの入口となる教授職を試験なしに

もう一つの「文明」論と考古学

小茄子川 歩

京都大学

文明は衝突する（サミュエル・P・ハンチントン『文明の衝突』

鈴木主税訳、集英社、1998年）。たしかにこの現実世界で文明は衝突しあっている。

しかし人類史の中にはもう一つの「文明」が存在する。

(1) 衝突する文明

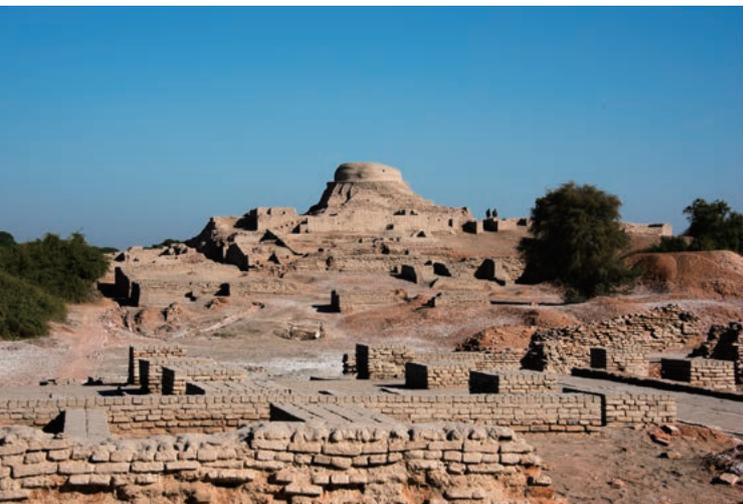
文明とは、進歩したさまざまな技術を備えた、わたしたちが「高度な政治システム」と関連づけている恣意的な権力や支配、暴力の形態、すなわち固定化した包括的権威としての都市や国家に特徴づけられる社会的複雑性のシステムであり、それは人類史の地平である。「文明とは都市や文字である」「文明とは広範に共通して認め得る高度に発展した文化である」などの決まり文句もあるくらいで、わたしたちの文明に対するだいたいのイメージはこうだ。

文明：ヒエラルキー、(シリアス)王、官僚制、シリアス農耕、階級、搾取、奴隷制、家父長制（+トップダウン型組織、商業経済、国家、帝国、都市、文字、数学、天文学、記念碑的な芸術や建築、精巧な冶金、鋤、帆などの技術的な成果のリストなど）。

わたしたちのよく知るこうしたイメージは、18～19世紀にかけて初期のヨーロッパにおいて確立された西洋的一系列文明史観にもとづく。社会的な不平等を内包しつつも、技術の進歩によりそれを乗り越えようとする人類（ホモ・サピエン

写真1：モヘンジョダロの「城塞」区域（筆者撮影）

注：「城塞」というのはただの呼称であり、じっさいに「城塞」であったかどうかは不明。写真中央の仏塔はクシャーナ朝時代のもの。



ス）が創りあげた、合理的で科学的とされる社会的複雑性のシステム。現実世界で個別化し衝突しあっているのは、この系譜上に鎮座する文明である。

(2) 考古学で語られてきた文明

考古学の目的の一つは、およそ30万年にわたる人類史の中から、人類がある時点・地点で出会った偶発性を多分に内包した「(歴史的・文化的・社会学的・生態学的)状況」のもとで自由に想像し自由に創りあげてきた、さまざまな社会のアレンジメント方法／自己意識的な政治的行為（以下、社会を心的現象を含めた具体的な総体性としてとらえるマルセル・モースの用語である「形態」を参照し、「社会編成の形態」と呼称しておく）の多様な痕跡を掘りだし、それらを精査しつつ「大きな物語」として編集したうえで、現代を生きる人びとに向けて分かりやすく提示することである。現在進行形の現実世界のあり方を相対化し、より正しく理解するために。

人類と「状況」が織りなす現実世界のあり方はじつに多様なものであったはずであり、その世界にはさまざまな「社会編成の形態」が存在したことは容易に想像がつく。しかし考古学による古代文明社会の研究成果は、以下のような内容に着地することが暗黙の了解になっているかのようだ。

人びとは生産力の拡大にともない小さな農村を大きな農村に変貌させ、集約的な大規模灌漑事業を成功させることで農業生産力・人口扶養力をさらに高めた（ムギ類などの特定作物の大量生産を志向）。同時に土地の私有化もすすみ、家父長制が浸透する。やがて人びとは集住をすすめて都市をつくり、専門的な知識・技術にもとづいて便利な道具、文字や度量衡を発明し、体系的な宗教や軍隊を整えた（商業経済にもとづく交易活動も活発化）。そしていよいよその複雑かつ大規模なスケールをもつ社会をトップダウン式に管理運営するために、専制的王権（王）を頂点にすえたヒエラルキーをとともなう中央集権的な社会構造、つまり官僚制にもとづく国家をもつに至った（たくさんの豪華な副葬品をとともなう王墓も建設）。その国家はより広大な地理的範囲に影響をもつ帝国に至ることもある。こうした技術

進歩の結実としての複雑な社会こそが、たとえ社会的不平等を引き受けざるを得ないとしても、文明である。

これは、人類社会は右肩上がりに進歩・発展するもの、といういわゆる新進化主義あるいは目的論的な進化論にもとづいた理解だ。西洋的一系列文明史観の系譜上にあつて文明を社会的複雑性のシステムとしてみるこうした史観はとうに乗り越えられた、という雰囲気もある。しかしそれは「ポストモダニズム+ネオリベラリズム」にどっぷりと浸かった人たちによる上から目線の頑で一方通行な主張にすぎない。現実として、まったく乗り越えられてはいないのだから。

(3) 衝突しない「文明」

世界四大文明(この用語もすでに古いものであるが)の一つとしてあげられるインダス文明(紀元前2600~1900年頃に現在のパキスタンと北西インドを中心とする地域に展開)の特徴を、最新の研究成果にもとづきまとめると以下になる。

都市(写真1・写真2)や文字(未解読/平均2~5文字)、凍石製スタンプ型印章、チャート製立方体型おもり、外部社会との限定的交流などの痕跡は存在するが、中央集権的な社会構造、王や王墓、神殿、労働集約的な灌漑事業(土地の私有化傾向)、ムギ類の偏重大量生産、極端な集住、富の集中、武器・軍隊・戦争、社会全体にいきわたるような強力な宗教などの痕跡は不在である。

インダス文明社会のあり方から生じるのは、文明を社会的複雑性のシステムとしてみるだけでは不十分なのではないか、という既存の文明史観への違和感だ。じっさいに近年の考古学研究の成果が科学的に立証しているように、人類と「状況」が織りなす現実世界の歴史には、例外なく例外が存在するかのごとく、さまざまな「社会編成の形態」を認め得る。例えばアンデス文明のように、都市や国家の誕生以前におよそ3000年間にわたりモニュメント(神殿)を建設しつづけた社会もある(北條芳隆・小茄子川歩・有松唯編著『社会進化の比較考古学』雄山閣、2021年)。

ここで注目すべきはマルセル・モースの「文明」論(『国民論他二編』森山工編訳、岩波文庫、2018年)を発展的に継承したデイヴィッド・グレーバーとデイヴィッド・ウエングロウの「文明」の見方だ(『万物の黎明』酒井隆史訳、光文社、2023年)。紙幅の都合もあるので思い切って要約すると、以下になる。

各地・時代に生きた人びとをつなぐ、一つひとつの社会が



写真2:モヘンジョダロの「市街」区域(筆者撮影)

注:「市街」と呼称されるエリアには商館や宿舎、一般的な家屋などが混在している。各建物の帰属時期の特定は今後の課題。

蓄積した多様な財や知、価値の広域の流動システムを「文明現象」とよぶ。そして各地・時代の「状況」を生きた政治的アクターとしての人類が、文明現象の借用ではなく、むしろ借用の拒絶をおこなうことで創造された「社会編成の形態」こそが、歴史的にも、語源的にも「文明」である。

文明:相互扶助、自発的連合、遊戯農耕、^{ホスピタリティ}歓待、協働、民衆集会、平等主義(+ボトムアップ型組織、人間の経済、モラル共同体、交流と相互作用の拡大された場を形成する社会の能力=偉大な^{ホスピタリティ・ゾーン}歓待地帯など)

この「文明」理解は、西洋的一系列文明史観や新進化主義にとられることもなければ、「文明」を社会的複雑性のシステムとして限定することもない。そこにあるのは、個別化し衝突する文明という理解だけではなく、交流しあう多様な衝突しない「文明」のあり方なのではないか。上述のインダス文明社会のあり方も、「文明」の一例としてこそ理解できる。

言うまでもなく、^{オルタナティブ}もう一つの「文明」論に関する「語り」はまだ始まったばかりだ。例えば既存の文明史観にもとづき、恣意的な権力や支配、暴力の形態と結びつけられてきたモニュメント(神殿や古墳など)や都市、貨幣は、「文明」史観によって脱権力化され、人類史にあらたに再定置されるかもしれない。また固定化した包括的権威としての国家に抗するようなさまざまな「社会編成の形態」^{フォーラム}が、人類史の中に次々に再発見されるかもしれない。

衝突する文明を前にしてわたしたちに必要なのは、文明を相対化し得る「文明」観ひいてはそれにもとづくあたらしい人間観である。

“Exploring the Tacit Knowledge of Trust Building and Connectivity amidst Predicaments”

(Mar. 1-3, 2024)

2024年3月1日～3日に東京大学駒場キャンパスを会場として、第3回イスラーム信頼学国際会議“Exploring the Tacit Knowledge of Trust Building and Connectivity amidst Predicaments”をA03班とB03班の合同企画で行いました。ここではそのハイライトを報告します。

趣旨・総括

この国際会議では「信頼」と「コネクティビティ」をキーワードにして、武力紛争や移民・難民現象の深刻な側面をも十分に考慮したうえで、あえて分断をつなぐ人びとに注目し、その知恵をあぶりだそうと試みました。プログラムはオープニングセッションと3つのセッションで構成され、16人が発表とコメンテーターを務めました。セッション2と3のあいだに設けられた若手研究者によるショートプレゼンテーションとポスター発表では、海外からの参加者との意見交換を行いました。

信頼はそもそも多義的ですが、各地域の文脈において実証的に検証されることとなると、それが

際立ちます。しかしだからこそ、自分たちの思考の枠を超えた創意工夫が色々あるものだと目を見開かれました。なかでも個人的に印象に残っているのは、Nurcan Özgür Baklacioğluさん（イスタンブール大学）が紹介した“Komşi Kapıcık”というスペースの創り方です。これは、家の裏庭のようなところに設けられた他者に開かれた空間で、バルカン地方の諸民族集団に広く見られるそうです。この空間を通じて、民族を横断して個人がつながる諸相があると紹介されました。全く違ってお叱りを受けるかもしれませんが、この話を聞いて「縁側」というスペースのことを思い出しました。縁側も、家の一部であっても外部に張り出して作られており、内と外の境界をあいまいにするスペースだと言われています。

しかし、なんととってもハイライトは、初日のオープニングセッション後に演じられた「地唄舞」でした。「袖香炉」と「パレスチナの四季」という2つの唄と三絃を小原直さん、舞を信頼学の事務局メンバーの花崎由季乃さん(村瀬智子さん)が披露してくださったのですが、ミニマムな表現だからこそその普遍性があり、海外からの参加者の心をいやし、緊張をほぐし、参加者をつなぐ場を作ってくれました。

(石井正子)

基調講演



基調講演

Ussama Makdisi, “Connections and Coexistence in an Age of Genocide.”

Ussama Makdisiさん（カリフォルニア大学バークレー校）は、レバノン宗派主義の19世紀の起源に関する研究をはじめ、近現代の米国と中東の相互的關係や、東アラブ地域（歴史的シリア）における多様な集団の共存枠組みの問題を魅力的

に論じてきた歴史学者です。パレスチナの現状に鑑みて現在を「ジェノサイドの時代」ととらえ、その共存を阻むものの根源は何か、そこで「つながり」をいかに考えるべきかを、第一次世界大戦からの問題として論じました。

最初に、英仏による歴史的シリアの分割・国際連盟委任統治が、世界史上最も遅い、しかも「民族自決」の時代の植民地支配であったことが確認されました。これは意外と見落とされてきたポイントです。そのうえで今日、世界人口の圧倒的多数がイスラエルによるジェノサイドを即座に止めるべきと考えているのに米欧がそれを阻んでいることと、第一次世界大戦後に、民族自決の思想が世界各地で歓呼をもって迎えられたにもかかわらず、それがアジア・アフリカの地域で実現されなかったこととの連環を問い直しました。パレスチナ問題の起源もまさにそこにあり、国際連盟の西洋中心主義とそれを支えていた文明観が指摘され、その典型としてキング・クレーン調査団（米国人キングとクレーンとによる、大戦後シリア地域の政体に関する民意聴取活動）の報告書に対する、米欧の無視と隠蔽という対応が説明されました。シオニズムという排他的な入植型植民地主義への支援がその対応の根幹にあったわけですが、これが以後、この地域に本来存在したコネクティビティを「強制された」ものenforced connectivityに変質させたのです。

討論者の鈴木啓之さん（東京大学）からは、米ウィルソン大統領とキング・クレーン調査団の関係、シオニズムをめぐる英国から米国への「保護者」の立場の移行と植民地主義の関連、さらに広くアラブの歴史をいかに書くかという問題が提起され、以後フロアも含めた活発な議論がなされました。

（黒木英充）

第1セッション

“With whom do you connect? Intermediaries in (forced-) migratory and settlement processes”

（誰とつながるのか？（強制）移住と定住プロセスにおける仲介者）



本セッションでは、工藤正子さん（桜美林大学）の司会のもとで、移民・難民の権利保護の実態や人々の信頼関係の構築過程が示されました。いずれの報告においても、ローカルレベルにおける地域社会の固有性／歴史性に根差した人々のつながりの実態が明らかにされました。

第1のKhatchig Mouradianさん（コロンビア大学）の報告では、オスマン帝国末期の追放政策に翻弄された難民の保護をめぐる、従来の研究ではあまり注目されてこなかった、アレppoのアルメニア人自身による難民保護の実態が明らかにされました。第2の佐原徹哉さん（明治大学）の報告では、ギリシア・トルコの境界領域に居住する住民たちが、EUへの移動を希望する移民の移動を手助けし、そうした援助を行う論理として、普遍的な人権意識の問題というよりも、ギリシア・トルコの住民交換という歴史的な出来事に対する住民感情のあることが明らかにされました。第3の子島進さん（東洋大学）の報告では、東京都豊島区の大塚モスクのケースをもとに、日本社会のムスリムの能動的で主体的な活動の実態が明らかにされ、移民を「リスク」や「コスト」とみなす日本社会の見方を相対化させる可能性を有する視点が指摘されました。

これに続く討議においては、昔農英明（明治大学）のコメントを交えて活発な議論が展開されました。第1報告では、保護に関わったアクター間における連帯、調整、利害対立のさらなる実態について議論されました。第2報告では、トルコ・ギリシア境界領域における難民への共感と反感の関係について、第3報告では、ローカルレベルにおけるムスリム団体と行政組織との信頼関係の形成の有する今後の可能性について、それぞれ活発な議論が行われました。（昔農英明）

第2セッション

“Ending impasses? Connectivity amidst conflicts”

（行き詰まりに終止符を打つ？紛争のなかのコネクティビティ）

このセッションでは、対立のなかでのコネクティビティをテーマに、中溝和弥さん（京都大学）の司会で3つの研究報告が行われました。3報告は、期せずして、あるいはこのテーマを掲げたからには必然であったかもしれませんが、いずれも国民国家とローカル・コミュニティについて論じるものが揃いました。

第1報告では、Nurcan Özgür Baklacioğluさん（イスタンブール大学）が、バルカン地域を取り上げ、Komşi Kapticikという多民族共生の空間が、歴史的に形成された経緯とその役割について論じました。様々な民族が混じり合って暮らすバルカン地域にあって、Komşi Kapticikは広範に見られる居住様式であり、人々の日常的コミュニケーションを支えるインフラの役割を持っていました。

第2報告では、Taberez Ahmad Neyaziさん（シンガポール国立大学）が、インドのムスリムを取り上げ、ムスリムに対するヘイトスピーチを監視してきたHindutva Watchというサイトの役割と、それがインドで閲覧できなくなった後の動向を論じました。インターネット空間を通じた社会運動の可能性と危険性を指摘し、インターネット空間と非インターネット空間における運動が協働する重要性を強調しました。

第3報告では、熊倉潤（法政大学）が、2017

年に新疆ウイグル自治区において中国共産党によって「両面人」と見なされたムスリムの幹部が逮捕された事例を取り上げました。党への忠誠に疑問がある少数民族幹部は排除されるが、同時に別の少数民族幹部の起用が行われていることが、歴史的、長期的視座から指摘されました。

討論者には武内進一さん（東京外国語大学）を迎え、活発な議論が行われました。第1報告については、バルカン地域における多民族共生の可能性について質問が提起されました。第2報告に対しては、ヒンドゥー至上主義思想を根底に持つモディ政権下で、ムスリムに対する差別・抑圧の高まりに抗するために、どのような運動が効果的なのか考えを尋ねる質問が出されました。第3報告については、文化大革命後、現在に至る過程で、ナショナリズムの高まりのような新しい要素が入ってきているなかで、中国の民族政策は持続可能なのか、という問いが出されました。

（熊倉潤）

第3セッション

“Returning to normal? (Mis-) trust building in post-conflict societies”

（日常への回帰？紛争後社会における（不）信頼構築）

まずMatuan Moctarさん（MARADECA）、Abdullah Tirmizyさん（ミンダナオ国立大学）両氏は、2017年のイスラーム国（IS）支持勢力によるフィリピン南部ミンダナオ島マラウィ市での籠城事件における、国内避難民の経験とその帰結について検討しました。避難生活において家族やこれまでの共同体の関係性が失われ、他者への信頼を維持することが困難になる状況を活写しました。そして、信頼の再構築における政府の役割の重要性を指摘しました。

続いて、見市建（早稲田大学）は、1998年のインドネシア民主化直後に起こった地域紛争が終結したあとにおいても、なぜテロリズムという形で現在まで暴力が継続するのか、その信頼欠如の構造を解明しようとしてきました。暴力の継続を望む人々を駆り立てる、集団内の心理的なメカニズムの重要性を主張しました。続くDima de

ショートプレゼン・ポスターセッション

2023年度の国際会議では、登壇者以外にも研究報告の場を提供し、活発な学術交流を促すため、初の試みとしてショートプレゼンテーションとポスターセッションの2つの参加型企画を用意しました。国内外の若手研究者を主な報告者として想定し、信頼学のコンセプトに沿った報告を広く募りました。選考の結果、国際会議の2日目に5つのショートプレゼンテーションと10個のポスター発表が行なわれることとなりました。2つの企画が同じ時間帯に別会場で並行して行なわれる方式となったため、会議の参加者は各々の関心に合わせて会場を行き来し、報告に耳を傾け、活発な議論を行なっていました。

ショートプレゼンテーション

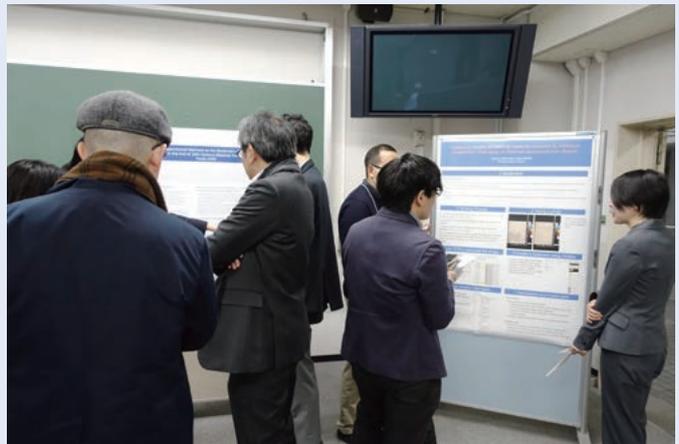
国外からアリゾナ州立大学のリューさんとケント大学のグッドさんの2名、国内から九州大学のアブシャムラーさんと東京外国語大学の沼田さんおよび大津谷さんの3名にご報告いただきました。報告者にはそれぞれ15分の報告時間（報告10分と質疑応答5分）を用意し、会場全体に向けて自身の研究のエッセンスを簡潔に報告してもらいました。報告者のディシプリンは政治学や経済史、文献学やオーラル・ヒストリーなど多岐にわたっていたものの、いずれの報告も中東・イスラーム地域におけるヒトやモノの移動と、その過程で発生する新たなネットワークや人的交流が主題となっていました。

ポスターセッション

セッションの冒頭では5分ずつアピール・タイムを設け、各発表者は会場全体に向けてポスター内容をよく簡潔に説明した後、各々のポスターの前で観覧者と議論や質疑応答を行ないました。発表内容は多種多様でしたが、デジタル・ヒューマニティーズに関わる萌芽的な発表が多く見られました。また、10枚のポスターは国際会議の期間中、会場内に展示しており、セッション外の時間にも参加者がポスターを観覧し、発表者と議論する場面が見られました。発表者の中には初めてポスター発表に挑戦した若手研究者が多く、苦戦したものの貴重な発表経験になったという声を多くいただきました。（藻谷悠介）



ショートプレゼン会場



ポスター発表の様子

Clerck さん（パリ第1大学／ベイルート・アメリカン大学）は、1990年に終結したレバノン内戦後の、レバノン政府による和解の試みを歴史的に検討したうえで、シリア戦争による難民の流入といった国際的な要因による信頼構築の困難さを指摘しました。

最後に長有紀枝さん（立教大学）は、1990年代前半のボスニア紛争によって故郷を離れた人々による政治活動に注目しました。彼らの政治的な同盟や活動の方向性は、戦時における虐殺の被害者であったという共通のアイデンティティによって規定されていることを指摘しました。

以上に対して、討論者の酒井啓子さん（千葉大学）は、各発表における国家や宗教の役割、人々の紐帯と記憶の機能を図式化し、個別の事例を架橋する理論的検討の可能性を示しました。例えば、制度的な差異やアクター間の関係性を共通の概念を用いて整理することで、信頼構築の成功や失敗の条件を見出すことも可能でしょう。討論者の投げかけは、各地の事例を寄せ集めるだけに終わりがちな「共同研究」の問題点を暗示するだけでなく、その成果を取込させる建設的な指摘でした。

（見市建）

第4回イスラーム信頼学国際会議

“Overcoming the Divide: Connectivity and Trust Building for Middle East Peace”

(分断を乗り越える—中東和平のコネクティビティと信頼構築)

山本沙希

立教大学

2023年10月から続くパレスチナとイスラエルの武力衝突は、中東和平の実現を一層困難なものとしている。世界の分断が深刻化しつつあるこの状況に対して、第4回国際会議では横断的な地域及び学問領域を専門とする国内外の研究者をお招きし、分断を乗り越えるためのコネクティビティと信頼構築の可能性を検討する。

趣旨・内容説明：

イスラーム文明にみられる人と人との水平的なつながりと信頼構築の解明を掲げてきたイスラーム信頼学プロジェクトは、そのつながり形成のための暗黙知を可視化し、今日の世界において深刻化する分極化・分断化の解決に有効な視座を提供することを目指してきた。とりわけイスラエルによるパレスチナへの、またロシアによるウクライナへの暴力に対してダブル・スタンダードを貫く西側欧米諸国の姿勢には、世界中の人の不信を表明している状況にある。

このような今日の複雑な課題に接近するための試みとして、第4回国際会議は“Overcoming the Divide: Connectivity and Trust Building for Middle East Peace” (分断を乗り越える—中東和平のコネクティビティと信頼構築) をテーマに開催する運びとなった。第1セッションとなる基調講演では、多文化主義やディアスポラに関する研究で知られる Ghassan Hage 氏 (メルボルン大学) と、イスラモフォビア、反ユダヤ主義といったレイシズムの歴史を専門とする James Renton 氏 (エッジヒル大学) の二人をお招きする。

第2セッション“Multifold Magnetic Fields:

Human Mobility and Connectivity to and from the Holy Land and Cities” (多様な磁場的領域—聖地と都市を往来する人の移動とコネクティビティ)、

第3セッション“Knowledge for Alternative Systems: The Islamic International System, the Islamic Economy, and Strategic Thoughts on Culture” (オルタナティブなシステムのための知—イスラーム的な国際システム、イスラーム経済そして文化に関する戦略的思考)、第4セッション“Toward an Open Society: Countering Rule Based on Division” (開かれた社会へ—分断に

3. Program (provisional)

DAY 1 (22 Feb) 15:00-20:00

15:00-15:20 Opening remarks

15:20-17:40

-Session 1. A Genocide in Our Time: Palestine under Terrorism Discourse and Neoliberalism

Keynote Speeches

Ghassan Hage (The University of Melbourne)

On post-Genocidal futures: The bearable and the unbearable, the forgivable and the unforgivable

James Renton (Edge Hill University)

The Liberal Democratic State and the Sovereignty of Antisemitism

Discussants:

Hiroyuki Suzuki (The University of Tokyo)

Mouin Rabbani (Jadaliyya)

Discussion

18:00-20:00

Welcoming banquet at the restaurant at Kadoya Sanjo-tei, B1 Sanjo Conference Hall

DAY2 (23 Feb) 10:30-19:30

10:30-12:30

-Session 2. Multifold Magnetic Fields: Human Mobility and Connectivity to and from the Holy Land and Cities

Eileen Kane (Connecticut College)

Itham Khuri-Makdisi (Northeastern University)

David Brophy (University of Sydney)

Discussant: Jin Noda (ILCAA)

Discussion

12:30-14:00

-Lunch

14:00-16:00

-Session 3. Knowledge for Alternative Systems: The Islamic International System, the Islamic Economy, and Strategic Thoughts on Culture

Layla Saleh (Demos-Tunisia Democratic Sustainability Forum)

Shinsuke Nagaoka (Kyoto University)

Maya Mikdashi (Rutgers University)

Discussant: Tetsuya Sahara (Meiji University)

Discussion

16:15-17:00

-Poster session

17:30-19:30

-Information exchange banquet at Capo Pellicano, School of Medicine Building

DAY3 (24 Feb) 9:30-12:00

9:30-11:30

-Session 4. Toward an Open Society: Countering Rule Based on Division

Sumanto Al Qurtuby (Satya Wacana Christian University)

Kumiko Makino (IDE-JETRO)

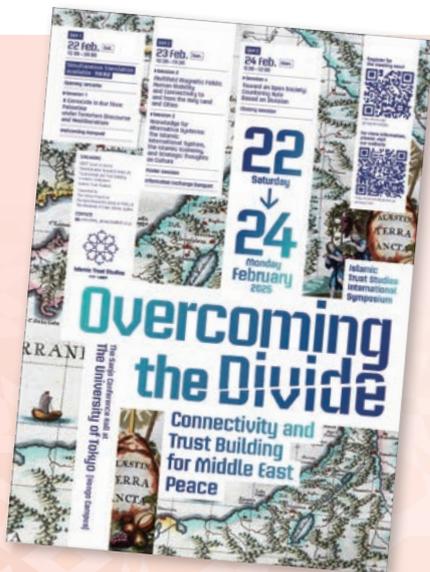
Minao Kukita (Nagoya University)

Discussant: Hiroyuki Tosa (Notre Dame Seishin University)

Discussion

11:30-12:00

-Closing Remarks



基づいた統治に抗する) では、パレスチナやウイグル、レバノン、インドネシアなど幅広い地域をご専門とする国外研究者にご登壇いただく。これらのセッションを通じて、現代のイスラーム世界で様々な分断や対立構造が生じているその要因とメカニズムを検証し、困難な現代的状況を乗り越えるための共生の可能性と、イスラーム世界の戦略的知の様相を提示する。

なお、これらのセッションに加え、2日目 (2月23日) にはポスター発表を企画しており、計17件 (うち公募研究3件) のポスター展示発表を行う予定である。

2024年度イスラーム信賴学全体集会報告

荒井悠太 京都大学

【プログラム】

セッション1 「歴史の隙間に輝く名士たち：デジタル人文学が照らす学者のつながり」

司会：熊倉和歌子（慶應義塾大学）

報告：・新井和広（慶應義塾大学）「デジタル人文学（DH）と伝記集：南アラビア・ハドラマウト地方の例から」
・篠田知曉氏（慶應義塾大学）「求めるべき知識はどこにある？系譜文献の可視化の試み」
・太田（塚田）絵里奈氏（東京大学U-PARL）「15世紀マムルーク朝文民エリートの「弱い」つながりと信頼：知識グラフを用いたネットワーク研究の可能性」

コメンテーター：森山央朗（同志社大学）

セッション2 「信賴学のその先のために」

報告：長岡慎介（京大ASAFAS）・野田仁・黒木英充・近藤信彰（東京外大AA研）・山根聡（大阪大学）・石井正子（立教大学）・熊倉和歌子



会場の様子



各班代表者（第2セッション）

2024年度のイスラーム信賴学全体集会は、2025年1月11日（土）に東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所において開催された。本会議は二つのセッションからなる。第1セッションではC01班によるデジタル人文学に関連する三つの報告が、第2セッションでは各研究班の代表者による、イスラーム信賴学プロジェクトの総括と展望についての議論が行われた。

第1セッションでは学識者（ウラマー）伝記集を用いたデジタル的手法の実践を通じて、デジタル人文学の可能性と課題に関する盛んな議論が行われた。新井和広氏による第1報告では、19世紀ハドラマウトにおける学識者家系の活動を伝える『結婚の冠』とGephiを用いて、同地における学識者のネットワークを可視化した。分析の結果、ハドラマウトにおける学問的知識の伝達にはサイド（預言者の末裔）家系が大きな役割を果たしていたが、サイド家系の勢力には地域差がみられたことが指摘された。

篠田知曉氏による第2報告では、15世紀メクネスにおいて成立したイブン・ガズイーによるファフラサをGephiとPalladioというふたつのツールを用いて分析し、学識者の師弟関係、及び地理的な関係に関しても可視化を試みた。分析を通じて、マグリブ地域では時代が下るごとにエジプト・シリアへの学問的依存が強まる傾向がみられると指摘された。

太田（塚田）絵里奈氏による第3報告では、マム

ルーク朝ウラマー社会における「間接的な」関係として、仲介者を介した名目上の師弟関係が分析された。氏はサハーウィー『輝く光』のデジタルテキストをRDF形式で記述し、さらにクエリ言語を用いてイジャーザ（免状）とウラマーの検索を可能にする試みを行った。分析結果として、師弟関係の構築に多くに寄与した人物が複数特定でき、そのなかには女性の伝承者が複数認められた点、名目上の師弟関係が学問的系譜の維持に貢献していた可能性が指摘された。

最後に森山央朗氏より、大量だが無味乾燥でもある伝記的情報の量的分析からマクロな傾向を見出すデジタル的手法の可能性が評価された。他方で、現状ではその知見がアナログ手法の追認に留まり独自の知見に繋がりにくい点、伝記集という史料の性格に起因する幾つかの留意点等が指摘された。

第2セッションでは、各班代表者より、およそ5年に及ぶプロジェクトの振り返り、今後の課題、刊行中の「イスラーム信賴学叢書」の意義など、多くの点にわたって総括的な議論がなされた。最後に熊倉和歌子氏より、各班研究員の活動の紹介、加えて今後の大型プロジェクトの運営のあり方に関する問題提起がなされた。最後の質疑応答では、「信賴」に関する新たな発見は何か、「信用」と「信賴」の差異、各班の活動内容を架橋する必要性等に関する議論が行われた。

イスラーム経済のモビリティと普遍性



研究代表者

長岡慎介

京都大学

研究分担者

五十嵐大介 早稲田大学

岩崎葉子 アジア経済研究所

亀谷 学 弘前大学

小茄子川歩 京都大学

平野美佐 京都大学

町北朋洋 京都大学

安田 慎 高崎経済大学

研究員

荒井悠太 京都大学

2024年度の活動

A01班では、「イスラーム経済」と呼ばれるイスラームの理念にもとづく経済活動の歴史的実践および現代に再登場したその実践に着目し、そこで見られる特有の経済制度（貨幣・金融、市場、所有制度）の独自性と普遍性を解明することを通じて、イスラーム経済のポスト資本主義的可能性を提起することをめざして研究を行ってきました。

今年度は、本班の主たる研究成果として『イスラームからつなぐ2 貨幣・所有・市場のモビリティ』（東京大学出版会、2024年4月）を刊行しました。そして、この本で展開されているイスラーム経済の独自性と普遍性、そしてポスト資本主義的可能性について、様々なジャンルの人々とダイアログを交わす機会を設けることで、イスラーム信頼学プロジェクト全体の目標である深刻化する世界の不信と分極化・分断化の諸問題を解決するための普遍的な視座を提供する取り組みを行ってきました。

具体的には以下のようなダイアログの機会に班代表の長岡が参加してきました。

◆21世紀の新たなコミュニティづくりを構想する人たちと。

→長岡慎介「金融×コミュニティ：金融の観点からコミュニティを考える」Community Discussion Party：コミュニティビルドの現在 Season 2、口頭講演、2024年5月30日、於：オンライン開催。

◆次世代を担う中高生たちと。

→マナラボ主催ワークショップ「思いやり社会のイスラーム・マレーシア編」2024年12月10日、於：甲南高等学校・中学校。

◆海外のイスラーム経済研究者たちと。

→Shinsuke Nagaoka. "The Role of Malaysia in the History of Islamic Finance: A Case Study of the "Maqasid Turn" and the Rise of Sustainable Finance in the 2010s." Presented at the 2nd International Conference on Islamic and Halal Economic Studies (ICIHES 2024)、口頭発表（英語）、2024年11月4日、於：マレーシア、ジョホールバル、ダブルツリー・ヒルトン・ホテル。

写真1：本班の成果出版一覧



写真2：2nd International Conference on Islamic and Halal Economic Studies (ICIHES 2024)に登壇する班代表（長岡）（2024年11月4日、マレーシア、ジョホールバル）



◆トルコの研究者、実業家たちと。

→Shinsuke Nagaoka. "Opening Islamic Economics to Global Civil Society." Presented at the Istanbul Forum 2024 "Knowledge, Will, Order" Viewpoints: Islamic Economics: Has It Delivered on Its Promises? 招待講演（英語）、2024年12月14日、於：トルコ、イスタンブル、ハリチ大学。

これらの多様な人々のダイアログも踏まえて本班の研究成果を一般向け（特に次世代を担う中高生を读者に想定）にわかりやすく紹介した下記の本を刊行しましたので、本班の研究成果をざっと知りたいという方はぜひご覧ください（この本の紹介をもって今年度の活動の具体的中身の紹介に代えさせていただきます）。

☆長岡慎介『イスラームからお金を考える』筑摩書房、2024年。

また、本班の研究成果を含めた英文研究書として下記モノグラフをBrill社のIslamic Area Studiesシリーズの1冊として刊行しました。

☆Shinsuke Nagaoka. *Islamic Economics and Finance in Action: Inventing a New Universal Paradigm*. Brill, 2025.

以上の成果発信、多様なダイアログの機会を通じて、イスラーム経済が提起するポスト資本主義構想は、世界中の様々な学知や在来知と大いに共鳴・協働しうるものだとすることを痛感しました。イスラーム信頼学プロジェクト終了後も、よりよい未来の地球社会の構築のために、多様な人々と手を携えながら本研究の成果を様々な形で発展させていきたいと考えています。

戦略的普遍知としてのイスラーム経済知の可能性について

長岡慎介

京都大学

A01班は、イスラーム経済の「モビリティ」という言葉をキーワードに、イスラーム世界で見られる様々なイスラーム社会経済制度のモビリティを支える普遍的イスラーム経済知の特徴を説明することをミッションとして研究を進めてきました。モビリティという言葉が社会経済制度に対して用いることに違和感を覚えるかもしれませんが、ここでのモビリティとは、①コネクティビティ…他地域・他時代の制度をどんどん取り込む、②フレキシビリティ…そうして取り込んだ制度をるつぼのように一貫したシステム（つまり、イスラームの理念を担保したシステム）に仕立て上げる、③ユニバーサリティ…そうして作られたシステムが他地域・他文化・他宗教に応用可能な普遍的な特徴を持つ、という3つの制度的特性を総称したものを指しています。

5年間の研究を通じて、そうしたモビリティを支えるイスラーム経済知として明らかになったものの1つは、イスラーム社会経済制度が内包している「利己の利他」という考え方です。この経済知は、信頼学プロジェクトが提起をめざしている不信と分断が深刻化する今日の世界の諸問題を解決するための戦略的普遍知になりうるのでしょうか。以下では、プロジェクトのど真ん中に鎮座する「信頼」概念と接続させながら、今後の研究の見通しを考えてみたいと思います。

近年、「利他」の概念は、不信と分断を乗り越えるための重要コンセプトとして様々な学問分野で大きな注目を集めています。合理的利他主義、効果的利他主義、互惠的利他主義、スミスの利他など、利他にも様々なバリエーションがありますが、こうした利他の様々なあり方とイスラーム経済知が提起する「利己の利他」とは何が違うのでしょうか。1つの大きな違いは、他者

への信頼の関わり方が違うのではと私は考えます。誤解を恐れずにシンプルな論点を提起するならば、従来提起されてきた利他の多くは、ミクロあるいはバイラテラルな関係性への信頼にもとづいて実現する利他であるのに対し、利己の利他は、マクロあるいはホーリスティックなものへの信頼にもとづいて実現する利他である対比できるかもしれません。後者を換言すれば、何らかの規範体系とか構造とかいったもので、イスラームではまさに神を頂点に据える信仰体系に対する信頼です。

こうしたマクロあるいはホーリスティックなものへの信頼にもとづく利他では、信頼の対象をどのように指定するかによって、信頼にもとづく利他が容易に悪用されるリスクがあります。宗教をはじめとするホーリスティックなものに対する警戒が根

強く、昨今も新興宗教による事件が話題となっている日本では、そうしたリスクが利己の利他のもたらすベネフィットを上回ってしまい、利己の利他を内包する制度を実現することはとりわけ難しいかもしれません。しかし、利己と利他の対立が深刻な分断を招いている現代世界の惨状を鑑みるならば、利己と利他が絶妙に同じベクトルを向いている利己の利他という考え方はきわめて魅力的であり、戦略的普遍知として何とかこの考え方を活用したいものです。非イスラーム社会における利己の利他の活用・実現の可能性を探ることが、このA01班の研究のやり残したことであり、A01班がめざしてきたことの人類全体に対する普遍的意義なのではないかと思えます。現時点では、1つの方策として、事例に事欠かないミクロあるいはバイラテラルな関係性への信頼にもとづく利己の実践の経験を、この利己の利他にいかに関与・接続できるかという点が、非イスラーム世界における利己の利他の活用・実現の肝なのではないかと臆気に考えているところですが、それについてはまた別の機会に構想と妄想を膨らませてみたいと思います。



近江商人の拠点の1つである滋賀県東近江市五個荘。非イスラーム社会における利己の利他の事例として、近江商人の「三方よし」の考え方はとても魅力的だ。(2024年10月、筆者撮影)

参考文献

キャサリン・ホーリー『信頼と不信の哲学入門』稲岡大志・杉本俊介監訳、岩波書店、2024年。



研究代表者

野田 仁

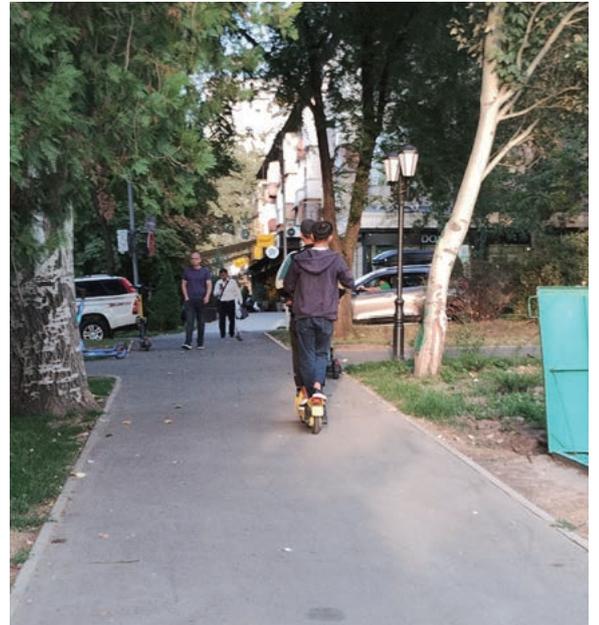
東京外国語大学AA研/
北海道大学スラブ・ユーラシア研(併任)

研究分担者

高野さやか 中央大学
高松洋一 東京外国語大学AA研
坪井祐司 名桜大学
中西竜也 京都大学
濱本真実 大阪公立大学
矢島洋一 奈良女子大学
和田郁子 岡山大学

研究員

小野亮介 東京外国語大学AA研



この街ではレンタル電動キックボードが流行っていて、2人乗りにはお互いの信頼が必要なのではないか、などと考えながら撮りました。何しろすごいスピードで歩道を駆け抜けていくのでブレているのはご容赦ください。

写真2: カザフスタン共和国アルマトゥ市にて(2024年9月、野田撮影)

2024年度の活動

「イスラームからつなぐ」第3巻『翻訳される信頼』刊行以降も、各人はそれぞれのテーマを深化させるべく研究を進めてきた。第3巻の内容を振り返るための書評会を企画していたが諸般の事情により開催が困難となったので、あらためて年度末までに著者が集う会を開催する予定である。第3巻の内容を踏まえて、全体として考えていることは以下の通りである。

一つには、アラビア語から他の言語への翻訳が持つ力があり、知の拡散・伝播というA02班の課題の一つとも密接につながり、かつ「イスラーム」という命題とももともと親和性を持つ点である。

第二に、通訳者への焦点化があり、転換の場および行為としての翻訳と、それに従事する通訳者・通訳者個人とは明確に区別して考えるべきだと考えている。この点は、下記に示す今年度のワークショップにおいても再確認した点である。

第三に、翻訳の作為性の追求である。この点に深入りしすぎると、信頼関係の構築からはむしろ遠ざかってしまうことは承知しながらも、関係構築の円滑化の観点からは、真ではない情報の伝達こそが意味を持つのではないかと考えている。

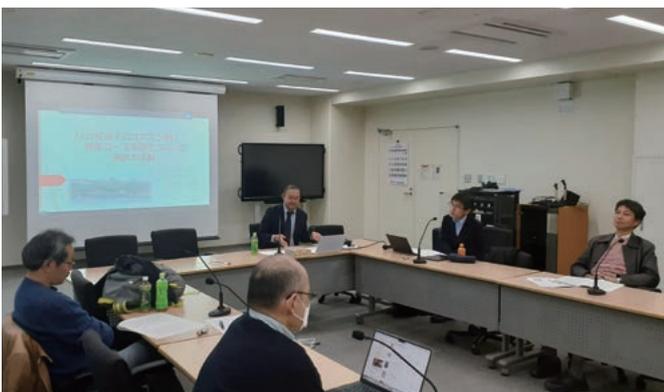


写真1: イスラーム信頼学ワークショップ「帝国における翻訳」の澤井報告(2024年11月24日)

これは、「正しい」訳を追求することのみに翻訳の価値を求めるのではなく、誤謬や偽の情報の伝達による関係構築に意味を持たせるということであり、本班の活動の中で課題として残っている、国際商業の場面における翻訳についても、アプローチが可能なのではないかとと思われる。そのような議論は、Equivocationの語で示される、人類学における翻訳論(ヴィヴェイロス・デ・カストロによる議論を参照)と近くなってくると思われるが、その一方でイスラームからの距離は遠ざかり、依然として大きな課題として我々の前に残っている。ただし、人類学の議論が本来扱っている多義性とは異なる文脈かもしれないけれども、我々が目指す翻訳論も、多様なものの結びつきを一つの目的地としていることは確かであり、ヒントを得られるように思う。今後も検討を重ねていきたいと考えている。

今年度の主催イベントとしては、7月に開催した国際ワークショップ“Translation Deviations in Multilingual Primary Source Documents in the Russian Colonial Archives”がある。米ワシントン大のTalant Mawkanuli博士に、19世紀ロシア帝国の多言語史料における翻訳の問題について報告をお願いした。ここでも気になるのは、統治の言語であるロシア語と、たとえばカザフ語との間で翻訳がなされたときの意識の問題であった。

また11月開催のイスラーム信頼学ワークショップ「帝国における翻訳」では、研究協力者の澤井一彰氏(関西大学)から、「16世紀後半のオスマン朝と神聖ローマ帝国をつないだ通訳の活動」として通訳個人の記録に焦点を当てた報告があったほか、研究員の小野亮介氏が、東アジアにおけるタタール人ディアスポラによる出版物について、調査報告をおこなった。

オンライン時代のコネクティビティとその活用

嘉藤慎作

滋賀大学

私は2021年4月から3年間A02班付研究員として、2024年4月からは研究協力者として本プロジェクトに携わってきました。以下では研究員という立場から感じたこと、その後、研究協力者という立場に転じてから感じたことを、主に本プロジェクトに関わった人たちの中でどのようなコネクティビティが生まれたのかという点から述べたいと思います。

この点について私自身が重要だと考えるのは、やはり本プロジェクトがコロナ禍の最中に始まったということです。そのため、運営のミーティングにせよ、各班が実施する研究会にせよ、まずはすべてがオンラインでスタートしました。このオンラインでの様々な種類の会合の開催というのは、コネクティビティという点において正負の両面をもたらしたのではないかと思います。正の側面については、例えば、急速に一般化したオンラインでのミーティングやチャットを活用し、

各研究拠点にいる研究員同士が定期的かつ密接に交流することができたことがあげられます。このおかげで研究員の各人は自身の所属する班や拠点だけではなく、プロジェクト全体を常に見据えて活動できたのではないかと思います。研究員側から総括班に対して積極的に若手が関与するイベント（国際会議内でのポスターセッションの実施など）を提案させてもらいましたが、これも研究員同士が普段から議論を十分に交わす機会があったからこそではないかと思います。

一方、実際に開催されるイベントを通じて形成されるコネクティビティという点では、オンライン・イベントの弱点も改めて意識する必要があると強く感じました。たしかにオンラインでの研究会の開催により、スケジュールの調整と移動・宿泊費の負担を考慮する必要はかなり減り、個々の参加可能性は大幅に高まりました。距離に関係なく、経済的な負担もなしに、研究会の開催時間のみスケジュールが空いていれば参加ができる。このおかげでこれまでよりも多くの研究会に参加し、様々な話を気軽に聞くことができるようになりました。とりわけ、2024年4月から研究協力者に立場を転じてからはこの点をより強く感じます。上記の点は明らかにオンラインの長所だと思われ

ます。ただし、オンラインでのイベントが持つ長所は転じて短所になり得るのではないかと以前から感じていました。前述の通り、研究会に参加する費用は低下しましたが、その気軽さゆえか出席した研究会それぞれへのコミットメントも低下しているように見える時があります。また、研究報告の合間に初めて会った人に話しかける、誰かを紹介してもらおうという、関係作りの場としての機能は、かなり限定されてしまいます。

もっともオンラインでのイベントが関係作りのために全く活かせないものになってしまったかと言えば、そうではありません。オンラインの場合、発話者に焦点が当たります。少なくとも発言中はその人の顔や名前が表示されるので、報告者でなくとも質問やコメントをおこなえば、他の参加者に覚えてもらう可能性が高まったのではないのでしょうか。もっと言えば、発話をしなくても画面上に文字で名前が表示されるので、同じイベントに参加する機会が重なれば、顔も声もわからなくとも名前は覚えているということがあるでしょう。それ自体では当事者間につながりができたとは言えないでしょうが、対面のイベントで出会った時、話題作りに役にたつでしょう。

以上を踏まえて、月並みではありますが、オンラインと対面、いずれかに極端に依存するのではなくそれぞれの長所・短所を十分に認識した上で、互いに補完し合うようにうまく活用していくことが求められるということを強く感じる4年間でした。



ザファル・マハル
(2025年1月、デリー、筆者撮影)



研究代表者

黒木英充

東京外国語大学AA研

研究分担者

池田昭光 明治学院大学

岡井宏文 京都産業大学

長 有紀枝 立教大学

昔農英明 明治大学

中野祥子 山口大学

子島 進 東洋大学

村上忠良 大阪大学

特任助教

須永恵美子

東京外国語大学AA研

2024年度の活動

移民・難民をめぐる問題の拡大はとどまるところを知りません。とりわけ、パレスチナのガザにおけるイスラエル軍によるジェノサイドは、2023年10月から本格化し、2025年1月の「停戦」を経て、2月には米新政権とイスラエルの共同による全住民の強制移送計画の表明に展開しました。米国内では中南米出身者を中心に不法移民とされる人々の拘束・国外強制移送も始まっています。他方、2024年12月にはシリアのアサド政権が打倒され、内戦で生じたそれぞれ数百万人規模の難民と国内避難民、さらに過去100年余りにわたって世界各地に拡散してきたシリア移民の役割など、問題は目白押しです。日本に目を転じれば、クルド人移民・難民に対する排外主義的運動に代表されるような、反移民の声の高まりが観察されます。

A03班の主要研究成果として2024年3月末に刊行された、「シリーズ・イスラームからつなぐ」の第4巻『移民・難民のコネクティビティ』は、こうした状況下で、移民・難民の主体性をもとに、つながりづくり（コネクティビティ）と信頼構築を問うものでした。

10月4日に鈴木伸隆さん（筑波大学人文社会系教授）をお迎えしてオンラインの書評会を開催しました。そこでは各章にわたり逐一丁寧な評価と質問・課題を提示していただきましたが、多岐にわたる論点を紙幅の関係で大きくまとめると次のようになります。

日本をホスト社会とする移民を扱った第1-3章では、移民の自己組織化の拠点・居場所としてのモスクの位置づけと交流を通じた共感・共苦の場から構築される信頼のあり方が具体的によく描かれている；第4-7章では、世界各地におけるムスリム移民のホスト社会への適応が扱われ、ヨーロッパとアジアでは移民・難民のコネクティビティをめぐる社会的緊張に質的な差異があることがわかり、それはつながりの水平

性を前提としたうえで、国家や権力の垂直性が前景化する局面の問題として捉えうる；第8-9章では難民受け入れ・支援のあり方を帝国と国民国家とで比較してその質的な差異を明らかにする視点が得られ、帝国の正統性をめぐるイスラームとプロパガンダの中に表れる文明観の問題、脆弱な国民国家が難民を受け入れる際の信頼・不信と投資・労働力をめぐる経済的実利の問題との関連性が指摘できる；移民・難民の遠隔地ナショナリズムを論じた第10-11章では、政治的アクターとして立ち現れる移民・難民のコネクティビティの多層性が、アルジュン・アパデュライ（人類学者）のいうグローバル文化経済の複合・重層・乖離的秩序を基礎とする（「想像の共同体」の拡大版としての）「想像の世界」と重ねて考えられる。課題としては、コネクティビティの実相は描かれているが、共存の伝統や戦略知といった対抗的概念の明示が不十分であり、そこでは「定住=正常⇔非定住=逸脱」とするのではなく、空間とのコネクットの仕方の一つと見なす思想を押し出すべきではないか、全体を通じてジェンダーの視点が弱いこと、コネクティビティの多元性をヒト以外とのつながりや移動インフラの重要性を認識することで議論を深められるのではないかと、といった点が指摘されました。このように広い視野から刺激的な論点が多数示された書評会でした。

本書の総論でふれたところの、移民・難民にとっての2023年の二つの危機（英国の移民強制移送法案可決とガザにおける民族浄化）は、イスラモフォビアと影響し合いつつ、2024年にグロテスクな発展を遂げ、ジェノサイドと強制移送を両輪とした人類社会全体への脅威となりつつあります。移民・難民のコネクティビティと信頼構築はますます重要なテーマとなっており、さらに深く追求していかねばなりません。



評者の鈴木伸隆氏（筑波大学）

中野祥子
山口大学

ムスリム難民支援からみえる信頼構築： 信頼と不安の狭間で

この4年間は充実と激動に満ちた時間でした。プロジェクト唯一の心理学者として、ムスリム難民とホスト間の信頼構築の心理的変遷を解明しようと意気込んでいましたが、初年度は出産・育児で研究を中断。その間、アフガニスタンでタリバンが実権を握り、元留学生たちが日本への亡命を希望しました。支援を試みるも、育休中の私は雇用ができず、知人や地域企業に協力を求めました。しかし、「タリバンに追われた人と関わるのは怖い」「ムスリムは危険だ」といった声が上がリ、日本社会に根強いムスリムへの偏見を痛感しました。一方、イスラーム信頼学では緊急セミナーが開かれ、専門家の見解が共有されました。私も影響を受け、生後2ヶ月の息子を抱え支援に奔走しました。世界平和や社会問題の解決でよく使われる「知ることから始めよう」という言葉の重要性を実感する経験となりました。

数名の難民が来日し、調査の機会を得ましたが、心理的配慮から面談開始に躊躇しました。面談が始まっても「母国の家族の安全が確保されるまで公表を控えてほしい」と要望され、計画を変更せざるを得ませんでした。先生方から「受け入れ側の日本人視点の研究にも価値がある」と助言を受け、日本人身元保証人への聞き取りを始めました。しかし、地方ではムスリム難民の受け入れに限られ、私の名前を公表すると彼らの身元が特定される恐れがあり、ここでも中断を余儀なくされました。最終的に調査を全国規模に広げることで、身元特定のリスクを回避しました(詳細は『イスラームからつなぐ(4)』)。何度も挫折しそうになりました。関係者の方々の辛抱強い支援に感謝しています。

聞き取りから、「これまでの関係性」や「命の危機」が「現段階では信じて受け入れる」決断につながっていることがわかりました。生死の危機に直面したムスリム難民の支援では、命の大切さを最優先しつつも、「裏切らないだろう」という覚悟と不安が共存し、彼らが「信頼」を「賭け」と表現していたのが印象的でした。また、彼らはその信頼を他者へとつなぎ、難民たちの日本社会における居場所づくりや関係構築へと寄与していました。鈴木伸隆先生の書評でのお言葉を借りれば、日本の支援側にも、イスラームの「つないで引き受ける(=アンサー)」精神がみられたのです。

2024年度の全体集会で、「信頼」と「信用」の違いについて議論されました。信頼構築のプロセスこそが本質であると理解しつつ、私は心理学の視点から以下のように区別していました。信用は、過去の実績に基づいて相手を信じることで、信頼は、その人の人柄や行動、未来への期待をもとに信じることです。難民支援のようにゴールが不明確な場合、その関与には不確実性が伴い、「賭け」のような側面を持ちます。これまでの関係性における「裏切られなかった経験」に基づいて相手を「信用」し、相手の人柄から「これからも裏切らないだろう」と期待すること

で、「信頼」が築かれていくという過程がみられました。生命の危機が意識される状況では「信じてみよう」という「賭け」が不安を乗り越える手段となるかを今後考察していきたいです。

最後に、このプロジェクトを通じて、多分野の知見を得られたことに感謝しています。ムスリムに関する心理学研究は少なく、苦勞してきましたが、他分野との協働から多くの示唆を得ました。在米ムスリム難民や在日難民に関する研究は継続しており、今後発表予定です。また、山口県でのシビルダイアログの実現を目指し、モスクがない地域での理解促進に取り組んでいきます。プロジェクト終了後も、築いた縁を大切に、活動を続けます。



2024年度の全体集會に
参加した執筆者

イスラーム共同体の理念と国家体系



研究代表者

近藤信彰

東京外国語大学AA研

研究分担者

秋葉 淳 東京大学

太田信宏 東京外国語大学AA研

沖祐太郎 九州大学

長縄宣博 北海道大学

馬場多聞 立命館大学

堀井 優 同志社大学

真下裕之 神戸大学

黛 秋津 東京大学

研究員

守田まどか 東京外国語大学AA研



な商品をめぐる国際的貿易関係やB01班がこれまで扱うことのできていなかったアラビア文字によるマレー語の外交書簡などについて、あらたな知見をえることができた。今後は、3月26日にイギリスの研究者を迎えて、現代ユーラシアの国際関係についてのワークショップを開催予定である。

2024年度の活動

最終年度は、海外から1名を招聘して、国際ワークショップを2回開催し、一つの国際研究集会を共催したほかは、シリーズ「イスラームからつなぐ」第5巻の執筆と刊行に注力した。

まず、4月13日にカナダから招聘したDalhousie大学のColin Mitchell氏とAA研のPeter Good氏を登壇者として、“Chancelleries, Correspondence, and Diplomacy in the Iranian Plateau”をA01班との共催で開催した。Mitchell氏は15世紀後半にイラン高原の覇を求めた白羊朝が、ティムール朝の王子たちと書簡を通じてどのような関係を取り結んだかを明らかにした。Good氏はサファヴィー帝国とイギリス東インド会社が勅令などの文書のやりとりを通じていかに関係を維持したかを論じた。4月17日には“Roundtable: Persianate Studies in Japan”を開催し、若手研究者を中心にそれぞれの研究内容について議論を行った。11月9日には科研費基盤研究(A)「外交の世界史の再構築：15～19世紀ユーラシアにおける交易と政権による保護・統制」（研究代表者：松方冬子）との共催で国際研究集会「砂糖、ワイン、ジャウィ文書：17～19世紀、文化的風景の変容」を開催した。砂糖やワインといった具体的

B01班が主体となった「イスラームからつなぐ」第5巻『権力とネットワーク』は、無事、12月25日に刊行された。水平的なコネクティビティの結果として生まれたネットワークと垂直方向の権力関係がどのような関係にあるのかを、特に権力関係の中心である国家を題材に論じたものである。3部構成となっており、第1部「国家体系とイスラーム共同体」は、「戦争の家」と「イスラームの家」やカリフ制のような古典的概念が、実際の政治のなかでどのように扱われてきたかを論じた。ジハードのような概念は共有されているが、それを誰に対してどのような場面で用いるかは、その国家を取り巻く政治状況によった。また、カリフ制の概念もそれにあわせて国家が作られるのではなく、存在している国家が利益のために利用するものであった。非ムスリム諸国を含めた外交関係は他の世界とかわりなく存在しており、イスラーム法というよりは書簡術によって規定されていたのである。

第2部「オスマンの秩序から近代国家体系へ」は、オスマン帝国とヨーロッパの関係を中心に、その関係を定めたアフドナーメが近代的条約に近づいていく過程、帝国に征服された国々が附庸国となっていく過程、近代的国際法がアラビア語化され認知されていく過程を明らかにした。これらの過程は、もちろん、ヨーロッパで近代的国際法が形成され、主権国家体制が確立する過程と並行して存在し、相互に影響を与えあっていた。それでありながら、オスマン帝国が1856年のパリ条約まで国際社会のメンバーとして認められなかったという事実、ヨーロッパ側の排除の論理を見ることができる。第3部「帝国とコネクティビティ」では、オスマン帝国のイルミエ制度やムガル帝国のマンサブ制度のような垂直方向で編成された諸制度がコネクティビティとどうかかわっていたかを明らかにするとともに、ロシア帝国下でのムスリム社会のコネクティビティと亀裂について論じた。一見垂直的な帝国の諸制度のなかにもコネクティビティの要素を見ることができ、ムスリム社会内にも亀裂や対立が先鋭化する局面があるという発見は、プロジェクト全体にもかかわる重要なものであった。



Roundtable: Persianate Studies in Japan

隣の地域研究から見えたイスラーム信頼学

過去4年半にはっきり見えたもの、それは何よりもAA研の中東・イスラーム研究者のチームスピリットです。巨大事業を成し遂げようとする気概、新たな知識の開拓を楽しむ姿勢、そしてそれが巨大な渦を生み出し多くの研究者を巻き込んでいく運動に私は終始魅了され、圧倒されてきました。しかも、若手研究者が互いに協力し、新鮮なアイデアを提起し、プロジェクトの広報に尽力する姿勢は感動的でした。とりわけ、2024年度地域研究コンソーシアム研究企画賞を受賞した須永さんと熊倉さんの「イスラーム・デジタル人文学の開発」は、プロジェクト最大の成果のひとつでしょう。信頼構築とは、先の見通すことのできない不確定の状況下でリスクを取って前に進むことであるということが事業の期間、しばしば確認されました。イスラーム信頼学自体が、多様な背景を持つ大勢の人びとが希望を見出せる「壮大な賭け」だったわけです。

イスラーム信頼学の研究代表という重責を遂行する間、黒木さん自らAA研と北大スラブ・ユーラシア研究センター（スラ研）をつなぐ信頼構築を実践していたことも特記したいと思います。スラ研は2021年から文部科学省への概算要求のプロジェクトとして、現代世界の危機を「長い20世紀の終焉」として捉えることを構想していました（この見方については、『思想』2024年4月号掲載の拙稿をご笑覧ください）。我々は、ロシアと中東が今後の世界の戦争と平和を左右するという見立てを持って、21年10月から24年3月まで、黒木さんと私がAA研とスラ研で兼務するクロスアポイントメントを実施しました。果たして、22年2月にロシアがウクライナに侵攻しますと、3月には野田さん、佐原徹哉さん、青島陽子さん（スラ研）を加えて、オンラインシンポジウムを開催しました。23年10月にカザ戦争が勃発しますと、黒木さんは札幌でオンラインのセミナーに出演し、12月にはロンドンでUCLのスラブ・東欧研究所との国際ワークショップに参加しました。スラブ・ユーラシアと中東は、「石油に依存する経済」「独裁/権威主義体制」「市民社会」「宗教的少数派」「移民」「思想のグローバルな循環」など、比較と連関の観点で捉えるべき論点に事欠きません。それは将来、斬新な研究テーマを見つける手がかりにもなるでしょう。二つの地域研究の集団が幅広い世代で互いの研究について学び合う機会が今後も増えることを期待しています。

では、信頼学科研で何が見えなかったのでしょうか。信頼学を掲げることで、多様な専門分野の各論について地平が広がったことは明らかです。では、イスラーム的なコネクティビティや信頼構築は、他の文明圏のそれらと何が違って、何が共通しているのでしょうか。また、イスラーム地域研究が世界の他地域に関する研究やディシプリンとつながる仕組みを作っていたのでしょうか。国際的にはどのような反響があったのでしょうか。1月の全体集会でも議論になりましたが、現代世界で深まる不信と分断の元凶とされる「イスラーム」（「ロシア」もそうでしょう）から信頼構築を語ることによって、西洋中心ではない問題解決の視座を提供するという射程はよく理解できます。ただ、欧米の帝国主義が駆動するグローバル化の中で制度化されてきた学問や世界観を、どのように変革できるのかは、日本の地域研究共通の切実な課題として残されています。イスラーム信頼学で培われた人のつながりと切り拓かれた知の地平が、他の地域研究と様々なディシプリンに今後波及していくことを願ってやみません。



研究代表者

山根 聡

大阪大学

研究分担者

青山弘之 東京外国語大学
 飯塚正人 東京外国語大学AA研
 池田一人 大阪大学
 工藤正子 桜美林大学
 後藤絵美 東京外国語大学AA研
 菅原由美 大阪大学
 中溝和弥 京都大学

研究員

藻谷悠介 大阪大学

2024年度の活動

今年度のB02班は、叢書『〈イスラームからつなぐ〉思想と戦略』の出版に注力してきました。同書は12人の共著者による研究成果をまとめたものであり、本班の研究活動の最終成果物として位置づけられるものです。全体の構成は次のようになります。

総論 イスラーム思想の戦略的可変性 (山根聡)

第I部 戦略としての思想、思想の戦略的展開

- 第1章 在外シリア人と受け入れ社会のコンネクティビティ (青山弘之/ジアド・アルアフマド)
- 第2章 インドネシア多数派がめざす「寛容なイスラーム」の変遷 (菅原由美)
- 第3章 パキスタンにおける政治思想と戦略 (山根聡)

第II部 非ムスリムとの関係性を探る

- 第4章 ムハンマド・アリー政権のシリア支配に見える関係構築 (藻谷悠介)
- 第5章 英領期マンマー・ラカイン北部の「移民」ムスリム (池田一人)
- 第6章 インド・ムスリムと民主主義 (中溝和弥)
- 第7章 ムスリム NGO による信頼とコンネクティビティの再構築 (アヌプリヤ・シャルマー/マリー・ラール)

第III部 ジェンダーと戦略

- 第8章 日本に生きる若いムスリム女性たちのアイデンティティ交渉 (工藤正子)
- 第9章 イスラームにおける男女平等論の展開 (後藤絵美)
- 第10章 信頼とムスリム女性の地域移動 (ファイーザ・ムハンマディー)

同書は3部構成となっており、いずれもムスリムが他者と対峙する際の戦略や、方針転換の可能性を検討するものとなっています。具体的には、戦略としての思想もしくは思想の戦略的展開、ムスリムと非ムスリムの関係性をめぐる問題、そしてジェンダーをめぐる戦略性にそれぞれ注目しています。全



写真1: 12月20日開催のワークショップ「緊迫するシリア情勢」

写真2: スリランカ・コロンボ中心部にあるジャーミウ・アルファール・モスク (藻谷悠介撮影)



体の構成から一目瞭然のように、各章の研究対象は西アジアから南アジア、東南アジア、そして日本と広範に及び、異なるディシプリンに基づく研究が展開されています。また、本班の分担者・研究員以外にも、外国から4人の執筆者を迎えており、多様な視座や問題意識に沿った多角的な研究成果となっている点が特長です。今後は同書の書評会も企画されており、本班の成果を基にしたさらなる研究の進展も期待されることです。

叢書の出版の他にも、ムスリムを取り巻く今日的課題についてのイベントを実施してきました。10月23日には、A03班公募研究およびA03班との共催の下、研究会『「故郷」をめぐるインタビュー』を開催し、研究分担者の工藤先生が日本の南アジア移民を研究する立場からコメンテーターを務めました。また、11月2日にはA02班や総括班、TUFiSCoとの共催にて、シビルダイアログ「在日クルド人とホスト社会の受容」を開催しました。詳しい内容は当該記事をご覧ください。複数の班による協力の下で多分野の専門家をお招きしたことで、現状整理に留まらず、問題解決に不可欠な視点や今後の展望をご参加の皆様と共有し、議論する良い機会になったと思います。そして、12月20日にはシリアのアサド政権崩壊を受け、ワークショップ「緊迫するシリア情勢」を、A03班との共催で急遽開催いたしました。シリア政治を専門とする研究分担者の青山先生が、当時点におけるシリアの状況整理と今後の展望を示し、参加者との活発な質疑応答が行なわれました。

藻谷悠介
大阪大学

内側から見たイスラーム信賴学と関係構築

イスラーム信賴学にはB02班「思想と戦略」の研究者として、プロジェクト2年目の2021年9月より参加してきました。大型の科研費プロジェクトに参加するのは初めての経験で、研究者としてイベントの企画・運営にも携わる貴重な機会をいただきました。以下では、プロジェクトの内側にいた立場から、自省も兼ねつつ信賴学の活動を振り返り、見えたものと見えなかったものについて検討してみたいと思います。

まず、私が属していたB02班の活動について考えてみますと、他地域・他分野の研究者が集うことで、ムスリムを取り巻く信賴と関係構築について、多くの知見が提出されました。当班には西アジアから日本まで、様々な地域を対象とする研究者が広く集まり、また国際会議における招聘を機会として、海外からも多くの研究者に加わっていただくことができました。これらを通じて、一つの地域に留まらず、巨視的に信賴や関係構築を論じるための数多くの切り口が見えてきたと思います。また、そうした成果を叢書『思想と戦略』として出版することで、社会に広く共有することもできました。

一方で、分担者全員が一堂に会した機会は、オンラインの場も含めて一度もなく、班内での議論が必ずしも十分に達成できていなかった点は課題として残るでしょう。もちろん、コロナ禍でプロジェクトが開始したことも大きく影響してはいますが、言うなればムスリムを取り巻く関係構築を研究するはずの班内において、十分な関係構築が見られない状況であったと思います。そのため、信賴と関係構築を考える上での思想や戦略の位置づけや重要性について、各分担者の知見を基に班内で議論を深めるには至っていなかったように思われます。本プロジェクトの終了後も分担者で集まって議論する機会を設け、まとまった見解や視座を創出することが引き続き求められると考えています。

次に、プロジェクト全体の活動に目を移すと、信賴学の進展の方向について、様々な可能性が見えてきたと言えるでしょう。研究対象やディシプリンを異にする数多くの研究者が集まり、信賴や関係構築という新しい角度から議論を進め、新しい研究ネットワークを形成してきました。これらの活動を通じて、分断が深刻化する現代社会に必要な、新しい知見が多く提出されました。中でも特筆すべきは、若手研究者の貢献であったかと思います。国際会議や全体集会においてポスター発表やショート・プレゼンテーションの場を設けることで、博士課程の学生を中心とする若手研究者に研究発表の機会を提供してきました。彼らの発表とその後の議論から、信賴や関係構築に関わる様々な知見や視点が提出され、プロジェクト全体の研究蓄積の厚みが大きく増したと考えられます。

他方、研究プロジェクト全体の総括は未だ途上であり、イスラームに注目することでどのような信賴や関係構築が見えてくるのかという、「イスラーム信賴学」のコンセプトに関わる問いについては、あまり明らかにされてこなかったのではないのでしょうか。この点はこれまでの国際会議や全体集会においても少なからず指摘のあった点ではありますが、それよりも本プロジェクトで想定する信賴や関係構築とは何か、という前提の問いの方に話が集中してしまい、十分な議論はなされていなかったと思います。来る最後の国際会議では、この点について議論が深められることが期待されます。また、総括班は既に導入的な位置づけの叢書『イスラーム信賴学へのいざない』を出版していますが、総括的な内容の出版についても検討の余地があるのではないかと考えています。



研究代表者

石井正子

立教大学

研究分担者

小副川琢 日本大学

日下部尚徳 立教大学

熊倉潤 法政大学

佐原徹哉 明治大学

鈴木啓之 東京大学

武内進一 東京外国語大学

飛内悠子 盛岡大学

見市建 早稲田大学

研究員

山本沙希 立教大学

2024年度の活動

今年度のB03班の主な活動は、年度末に刊行予定の「イスラームからつなぐ」第7巻の論文の執筆と編集でした。まず、7月20日～21日に盛岡アイーナを会場として、各執筆者の論文草稿の読み合わせ会を行いました。研究分担者10名と協力者1名の執筆者11名全員が対面またはオンラインで参加し、1名につき30分議論を行いました。

これらの議論により、「信頼」や「コネクティビティ」をキーワードに各地域の武力紛争などを検証したところ、リベラルピースにもとづく平和構築の議論においては、信頼の問題が深く探求されてこなかったことが改めて明らかになりました。一方、信頼についてのまとまった和書については、本科研プロジェクトが開始されてから探しても見つかりにくかったのですが、2024年に永守伸年『信頼と裏切りの哲学』（慶応義塾大学出版会）が出版されていることが、飛内悠子さんから紹介

書評会（押川文子先生によるコメント）



されました。こうした本が最近出版されていることに鑑みても、「信頼」をテーマにしたさらなる学際的研究の必要性を感じます。



シビルダイアログ公開講演会

書評会

加えて、2024年9月19日に山本沙希さん（B03班研究員）が昨年度出版した『すべての指に技法を持つ—手仕事は織りなす現代アルジェリア女性の生活誌』（春風社、2024年）の書評会を立教大学で開催しました（文部科学省科学研究費・若手研究「マグリブ女性零細企業家のインフォーマルな商取引にみる重層的ネットワーク」との共催）。コメンテーターにインドの歴史学、ジェンダー研究をご専門とする押川文子さんをお招きし、議論を行いました。押川さんからは、本書においては「手仕事」による女性の稼得機会の拡大に影響をおよぼした外部からの働きかけが整理されており、参加した女性たちの生活誌がていねいに綴られているという評価をえたとうえで、「手仕事」という仕事の性質に特徴的なことから見える考察についての問題提起がありました。手仕事では「一人で、身体を動かしつつ、同じ場所で、思いをめぐらす長い時間を得る」ことができ、確実に成果が紡ぎ出されるという特徴があります。こうした特徴をもつ手仕事が、他の稼得手段（例えば、オフィスワークやサービス業の従業員）からは得ることができないものがあるとしたら、それは何なのでしょう。熟考と熟練の時間を得る手仕事という性質から「なんとかやる」賢知と狡知を捉え直すと、どのような新たな考察が立てられるのか、という興味深いコメントが寄せられました。

シビルダイアログ公開講演会

2024年11月23日には、認定NPO法人「パレスチナ子どものキャンペーン」とともに、立教大学を会場として、シビルダイアログ公開講演会・音楽の集い「ガザの子どもたちのために」を開催しました（立教大学異文化コミュニケーション学部～学部公開講演会『言語と社会や文化をくつなぐ>：世界と切り結ぶ異文化コミュニケーション』の一環として～との共催）。「パレスチナ子どものキャンペーン」のガザの現地スタッフのビデオメッセージに続き、分担者の鈴木啓之さん、千葉大学・特任教授の酒井啓子さんが、近々のパレスチナ/イスラエル情勢、中東情勢についての解説を行いました。現地パレスチナで行われている大量虐殺やその状況下を生きる人々の生の声を聞くことには、胸の痛みを抑えることはできませんでした。音楽ユニット「ラビィサリ」が奏でる物悲しいメロディーに思いを重ねると同時に、無力感に抗うことの決意を新たにしました。時間でもありました。一般から111人が参加し、パレスチナとの連帯を示すために写真を撮って、「パレスチナ子どものキャンペーン」を通じてその思いをイベント開催報告とともに現地に届けていただくこととしました。

山本沙希
立教大学

分断を生み出す境界的思考を脱する

2021年4月から4年にわたり、B03班の研究者として本科研に携わらせていただきました。様々な紛争影響地域を専門とするメンバーで構成されるB03班は、この間、紛争地の目まぐるしい情勢の変化に見舞われましたが、そのたびに当該地域に詳しい方を班内外からお招きしつつ、知り得ることのない現場の状況を教えていただきました。これらの活動に携わるなかで、地域ないし学問領域の垣根を超えて紛争下の信頼について考える機会をいただき、とても学びの多い4年間でした。

本科研への参加を通じて「見えたもの」、特に再確認するに至ったことは、紛争下で分断や対立が醸成されることは勿論ありつつも、それだけではないという多様な現実です。B03班が共催してきた国際会議ないし研究会では、支配や暴力が蔓延している状況下でも分断に抗おうとする試みや、他者の支配領域のなかで狡猾に振る舞う個人の様相が示されていました。それは、紛争地に対し地域や宗教、民族的境界を越えて連帯を表明する国際的な動きや、特定の国家権力と折り合いをつけ、不利益を被ることのないようにとられる器用な立ち回りとして、提示されていたと思います。



B03班原稿読み合わせ会（盛岡）

私はこれまで、フランスによる長期的な植民地支配に加え、「暗黒の10年」と呼ばれる内戦状態を経験したアルジェリアを主な調査地としてきましたが、こうした支配や暴力を経て強まる分断や、その分断を創り出す私自身の境界的思考には無自覚だったかもしれないと、本科研を通じて自問するようになりました。植民地支配と独立戦争の歴史は様々な場で語られますが、その語りは「支配者のフランスと、犠牲者のアルジェリア」という分断化された構図に収斂しがちです。そうした支配の歴史認識を継承することは重要であり矮小化できない一方で、例えば仏統治下アルジェリアに派遣されてから独立後も同国に居住し続け、

生涯にわたりムスリムとの対話を試みてきたフランス人神父の活動は、このような支配的な構図によって不可視化されてきたのではないかと考えます。また内戦下では、女性の身体の処遇をイスラームに基づき規定する動きが強まり女性の分断が危惧されましたが、そうした分断に抗おうとするフェミニストたちの活動も認められます。本科研を通じて様々な地域の分断と対立、そして信頼構築の位相について理解を深めていくにつれ、こうした分断を生み出してきた境界がどのような文脈で創造されているのかを熟考する機会が得られたのは大きな収穫でした。

他方で、人は他者との関係を築きながら社会生活を営む点はイスラーム世界に限らずどの地域にも見られ、それが当該社会にどのような意味を持って受容されているかを丁寧に見ていくことが重要と考えます。本科研を通じて「見えなかったもの」は、そうしたコネクティビティや信頼を通じて可視化される特性や複合の意味であり、イスラームとの関連もここに含まれるものだと思います。アルジェリアにおいて、人びとは相手への信頼や親しさを強調する言動を日常的に行う一方で、取るに足りない嘘や騙し合いも日々重ねています。そうした矛盾を含みながら生きる人びとの行動に見られる「イスラーム的なる」特徴とは何なのか、世俗的な要素も含めてムスリム社会を支えているコネクティビティの位相を、本科研終了後も考え続けていきたいです。

最後に、毎月のジュニア会議を通じて問題を共有し、相談できる場が用意されていたことはとても恵まれていました。お世話になったすべての方々に、この場を借りてお礼申し上げます。

デジタル・ヒューマニティーズ的手法による コネクティビティ分析



研究代表者

熊倉和歌子

慶應義塾大学

研究分担者

新井和広 慶應義塾大学

石田友梨 岡山大学

伊藤隆郎 神戸大学

後藤 寛 横浜市立大学

篠田知暁 東京外国語大学AA研

永崎研宣 人情報学研究所／慶應義塾大学

MALLETT Alexander 早稲田大学

研究員

長野壮一 慶應義塾大学



新井和広氏 (第1報告)



篠田知暁氏 (第2報告)



太田 (塚田) 絵里奈氏 (第3報告)

2024年度の活動

C01班は、昨今注目されるデジタル人文学の手法を用いて、人と人とのつながりのあり方を研究することを課題としてきました。プロジェクトの最終年度となる今年度、C01班のメンバーは、シリーズ「イスラームからつなぐ」第8巻『デジタル人文学が照らしたコネクティビティ』の刊行に向けた執筆・編集作業に注力してきました。以下がその目次です。

総論——デジタル人文学的手法を用いたコネクティビティ分析 (熊倉和歌子)

第I部 コネクティビティ分析におけるデジタル人文学の意義

第1章 普通の名士に光を当てる——デジタル人文学と伝記学研究の未来に向けて (新井和広)

第2章 グローバルに共有可能なテキストデータの構築に向けて (永崎研宣)

第II部 史料から浮かびあがるコネクティビティ

第3章 網の目のなかのひびとを描く——女性がつなぐマムルーク朝後期の文民ネットワーク (熊倉和歌子)

第4章 15世紀の東地中海・紅海・インド洋におけるムスリム商人たち——デジタルテキスト分析の試み (伊藤隆郎)

第5章 デジタル人文学的ツールの応用による近世ムスリムネットワークの再構築——近世マルタ島におけるムスリム奴隷コミュニティ (マレット・アレクサンデル)

第III部 知識伝達をめぐるコネクティビティ

第6章 15世紀マグリブのウラマーのイスナードを可視化する——デジタル人文学によるファフラサ活用の試み (篠田知暁)

第7章 中東、インド、東南アジアのウラマーによる法学の継承と現地化——法学書『御助けくださる方の勝利』の系譜上にある間テキスト性をどうやって実証するか (塩崎悠輝)

第8章 アラビア半島と東南アジアにおける知識伝達のコネクティビティ——ハドラマウト起源の学識者と血縁・地縁

ネットワーク (新井和広)

第IV部 コネクティビティの性質を問う

第9章 イスラーム改革思想をめぐる師弟関係の信頼性——カッターニー『ファフラサ』のイスナードを例に (石田友梨)

第10章 15世紀ウラマーの名目的師弟関係にみる「弱い紐帯の強さ」——RDFを用いた「データベース」としての人名録分析 (太田 (塚田) 絵里奈)

第11章 日本の中東・イスラーム研究者のコネクティビティを可視化する——謝辞から読み解く研究史 (須永恵美子)

この巻で分析の対象となっているのは、知識人、そして彼らからイジャザをもらった人々、官僚、商人、マルタ島のムスリム奴隷、さらには現代日本におけるイスラーム研究者、と多様な人々です。各章では、デジタル人文学的手法を用いてこれらの人々の関係性を可視化することにより、何が言えるのか、そしてどのような可能性や課題があるのか、それぞれの見地から議論されています。

ブックシリーズに加え、2025年1月に開催された全体集会では第1セッション「歴史の隙間に輝く名士たち：デジタル人文学が照らす学者のつながり」を企画し、知識人のコネクティビティを分析してきた新井さん、篠田さん、太田さんが報告を行い、ハディース学者の知的実践と社会的影響について研究されてきた森山央朗さん (同志社大学) からコメントをいただきました。聴衆にも開かれたディスカッションでは、研究の切り口／問いの立て方を工夫することにより、デジタル人文学的手法を用いた研究の可能性がより大きく拓けてくるのではないかというような議論が交わされたことが印象的でした。

私たちは5年間のプロジェクトを通じてデジタル人文学の手法を試行錯誤しましたが、その間にも様々なアプリケーションが登場しては改良され、その利用可能性が拡大していることを目の当たりにしてきました。現在AI技術が飛躍的な進歩を続けており、知のあり方自体が変化してきています。そのような中で人文学がどのように変化していくのか今後も注視していく必要があるでしょう。C01班の研究成果は、そのような「大転換」の過程において足跡を残すことができたのではないのでしょうか。

信頼学（コネクティビティ）の魅力： キーワードから考える

三浦 徹

お茶の水女子大学名誉教授／東洋文庫

研究代表者の黒木さんから、本研究の評価委員の打診があったのが昨日のこのように思える。ここでは、評価委員ということではなく、ひとりの研究者として、本プロジェクトの魅力について、研究課題名にある「イスラーム的・コネクティビティ・信頼」の3つのキーワードに沿って述べてみたい。

第一に、「コネクティビティ」を、黒木さんは「関係づくり」と表現し、和文叢書（全8巻）のタイトルは「イスラームからつなぐ」と命名されている。ここでは、個々人のレベルから出発する関係づくりと、そこに「信頼trust」という「賭け」が働くことに着目した（ニュースレター第2号、p.29）。7つの研究班は、経済、知、移民、国家、思想、紛争、デジタル情報といった様々な局面における「関係づくり」を論題とした。経済においても、個々人を主体とする関係づくりに焦点をあてている。

第二に「信頼」という目に見えないものを主題とした。黒木さんは、自らのシリアでの体験から、信頼の応酬による関係づくりを示している（『イスラームからつなぐ』第1巻、essay 3）。賭けという側面は、ニカーブ（顔や手先までを覆うベール）を被ることを決心した女性と説教師、フィリピンミンダナオ島の紛争での立場の異なる人々の関係にも見ることができる。他方、デジタル人文学の研究班では、伝記集などの歴史資料から抽出したデジタルデータを、コンピュータ・ソフトを用いて、個を起点とするコネクティビティを可視化するとともに、そこに埋め込まれた信頼の分析を試みている。ビギナーのための実践講習はとても有益で、私も生徒のひとりであった。

第三は、「イスラーム」の扱い方である。知の研究班では、イスラームにおける言語の複数性、用語の異同や翻訳に着目する。全体としてはイスラームに見られる関係づくりの知恵を、「同じものがある」という形で、広い視野から位置づけなおすことを目指した。カメルーンや沖縄で続く「頼母子講」は好例だろう。

第四は、上記の関係づくりの（暗黙の）知を、現代の分断や不信をのりこえる「戦略知」として鍛えあげるといふ、実践の方向を示したことである。2022年2月からのロシアのウクライナ侵攻、2024年10月からのイスラエルのガザ侵攻（およびレバノン侵攻）などの戦争によって、世界中にさまざまな分断が広がっている。本研究では、これらの焦眉の問題に関するセミナーをタイムリーに開催し、多くの人びとが参集した。

第五に、社会にむけた知の発信・貢献として、「シビル・ダイアログ」という対話型の活動を創りだした。とくに、保育園を舞台に、幼児にむけて、つながりをテーマに、（イスラーム世界の）動物や地図を素材に、想像の翼を広げ、さらにそこから自身の研究の可能性や意義を問い直した。このような姿勢は、ニュースレターの編集にも顕れ、「研究の最前線」「教えて、〇〇さん」といったタイトルに、研究のプロセスを共有する姿勢が示されている。

残念だったのは、国際会議（2021－24年度）の参加者（国内、国外）が少なかったことである。オンライン併用であったので海外にむけて上記のコンセプトを発信し、その反応を期待していた。

2024年12月、黒木さんや私が研究のフィールドにしているシリアで、アサド政権があっけなく崩壊した。新政権の行方は誰も予想できないが、長く培われた人びとの関係（コネクティビティ）は潜在している。

プロジェクト発足からの時間を速いと感じたのは、私が活動を傍観していたからだろう。ひとつひとつの集会や刊行物には、準備から報告まで舞台裏で膨大な労力と時間が費やされる。「コネクティビティ/信頼学」という看板を掲げ、新たなコネクティビティをつくりだしたプロジェクトが解散するわけだが、培われた関係が分断をのりこえる知として発展することを願う。



家族連れで賑わう金曜日のウマイヤ・モスク（2010年、ダマスカス、シリア、筆者撮影）



ソニーや三菱のネオンサイン（2010年、ダマスカス、筆者撮影）

イエズス会シリア宣教団のコネクティビティ

藻谷悠介

大阪大学

1830年代に活動を開始したイエズス会シリア宣教団は、当地で驚くほど幅広い関係構築を積極的に進めていた。キリスト教信仰に拠って立つ宣教団のシリアにおけるコネクティビティについて考えてみたい。

筆者は19世紀前半の歴史的シリア地域（以下、シリア）における政治・社会変容について研究している。『〈イスラームからつなぐ〉思想と戦略』では、エジプトのムハンマド・アリー政権によるシリア支配（1832–1840）について、政権と在地有力者との間の関係構築に注目して分析した。この記事では、政権支配下のシリアにおいて見られた多様な関係構築を別の角度から検討するべく、イエズス会のシリア宣教団に注目する。

イエズス会という組織そのものについて、説明は不要だろう。18世紀後半以降のヨーロッパにおける弾圧を経て、1814年に活動を再開したイエズス会は、1829年から対外宣教活動を本格化させた。そして、この活動の先駆けとして、オスマン朝支配下のシリアに宣教団を派遣した。このシリア宣教団は、1831年11月に海路で港町ベイルートに到着したが、折しも同月にはムハンマド・アリー政権配下のエジプト軍がシリア

に侵攻を開始しており、同年中にベイルートを含む同地域の大部分を軍事占領した。宣教団はシリアに到着した直後に支配権力の交代を経験し、その下で活動計画を一から組み直すことを余儀なくされたのである。

シリア宣教団は当初3名のイエズス会士から構成され、キリスト教徒の多いレバノン山地を中心に活動を開始した。活動の対象は主に在地のキリスト教徒たちであり、正教諸派の信徒をカトリックに帰一させること、そしてカトリック諸派の信徒に宗教教育を行なうことを活動の柱としていた。宣教団は当初、ローマ教皇庁と緊密な関係にあった在地のギリシア・カトリック司教マズルームを頼っていたものの、彼が宣教活動に消極的な姿勢を示すと、すぐに彼に依存しない活動体制を模索し始めた。宣教団はカトリックのマロン派を奉じるレバノン山地大首長バシールから宣教活動の認可と活動拠点の提供を受け、また他のマロン派首長からも別の拠点を提供されていた。

こうしてシリア宣教団は在地のカト

リック勢力を頼って宣教・教育活動を開始したが、同時に活動の継続と拡大のため、カトリック以外の勢力とも積極的な関係構築を図っていた。彼らはまず、シリアの新たな支配者となったムハンマド・アリー政権と接触し、レバノン山地以外の地域における活動の許可を求めた。同政権はイエズス会を含む諸宣教団の活動に寛容であり、宣教団は許可を得てシリア全域に活動を拡大することに成功した。また、日々の食事を切り詰めるほどの財政難に陥っていた宣教団は、ムスリムを含む諸宗派の在地有力者とも交流を持ち、医療の提供の見返りに金品の提供を受けていた。さらに、各地に駐屯するエジプト軍（軍人は基本的にムスリム）にも酒類などを提供することで、活動の便宜を得ていたようである。

宣教団のシリアにおける関係構築を支えたのは、まず何よりもカトリックのネットワークであった。政権との接触に際しても、政権に高官として登用されていたカトリックの在地有力者の執り成しがあつたとされる。加えて、流動的な政治状況が追い風となり、サービスや物品の提供を通じて、カトリック以外の勢力とも広く関係を構築することに成功していた。ここで見逃してはならないのが、宣教師たちがアラビア語に通じていた点である。彼らはシリアに派遣される前からアラビア語習得に努めており、シリアではアラビア語で宣教・教育を行なっていた。彼らの積極的な関係構築の土台には、アラビア語を通じたコミュニケーションがあつたと理解できよう。

以上のようなシリア宣教団の活動からは、キリスト教信仰に拠って立つ彼らの幅広いコネクティビティと、それを可能にした1830年代シリアにおける諸派・諸勢力間の動的な関係性を見取ることができる。



レバノン山地・ビクファイヤーのイエズス会活動拠点。本稿で扱う1830年代から60年ほど経過した1894年に撮影された。
出典：Habeeb.com (<https://www.habeeb.com/lebanon.photos.63.html>)

1. 総括班事務局より

●総括班事務局の体制

事務局運営：太田信宏、野田仁、熊倉和歌子

事務局員：村瀬智子、細田和江

事務局所在地：〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所6階(605室)

事務局連絡先：connectivity_jimukyoku@tufs.ac.jp

●広告媒体

ウェブサイト：<https://connectivity.aa-ken.jp/>

X(旧Twitter):Thiqa project / イスラーム信頼学 (@ThiqaProject)

メーリングリストを通じてワークショップなどのイベント情報を発信しました。

●特任助教及び研究員着任のお知らせ

2024年度、イスラーム信頼学は新たに須永恵美子さんを総括班特任助教として、小野亮介さんをA02班研究員としてむかえました。



須永恵美子 (東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所・特任助教)

南アジア地域、特にパキスタンにおける言語教育や出版文化、イスラーム思想に関する研究を行っています。ウルドゥー語を中心とした多言語社会の文化的ダイナミズムに惹かれ、パキスタンに通い始めてちょうど20年。コロナ禍をきっかけに、バーチャルな世界に広がるウルドゥー語の展開にも興味を抱くようになりました。最近ではフィールドワークで得た知見をデータとして蓄積・可視化するため、地域研究とデジタル人文学の手法のかけあわせにも取り組んでいます。



小野亮介 (東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所・研究機関研究員)

ロシア革命などの20世紀前半における政治的変動により亡命者や移民として中央ユーラシア諸地域から流出したテュルク系ムスリムに関心を抱いており、これまでトルコやヨーロッパへ逃れた反ソビエト的民族運動指導者について取り組んできました。近年では日本や満洲でコミュニティを築いたタタール人というロシア出身のテュルク系民族にも注目しており、これまで培った研究能力を用いてテュルクの人びとを日本の同時代史と結びつけることを目指しています。

2. 2024年度に開催した研究集会など

全体集会

◆2025/1/11

2024年度全体集会 **総括班**, C01

開会・趣旨説明：野田仁

セッション1「歴史の隙間に輝く名士たち：デジタル人文学が照らす学者のつながり」

司会：熊倉和歌子

報告：

新井和広「南アラビア・ハドラマウト地方内外における知識伝達関係の「偏り」：内陸部ワーディーの学識者家系の活動範囲をもとに」

篠田知暁「求めるべき知識はどこにある？

系譜文献の可視化分析の試み」

太田（塚田）絵里奈「15世紀マムルーク朝文民エリートの「弱い」つながりと信頼：知識グラフを用いたネットワーク研究の可能性」

コメント：森山央朗（同志社大学）

セッション2「信頼学のその先のために」

司会：太田信宏

報告：長岡慎介・野田仁・黒木英充・近藤信彰・山根聡・石井正子・熊倉和歌子

閉会の挨拶：黒木英充

シンポジウム・国際会議

◆2024/5/13

イスラーム信頼学シンポジウム

「人類学者ガッサン・ハージと

イスラエル／パレスチナ問題を

めぐる言論・学問の自由——

「反ユダヤ主義」言説を問い直す」

総括班 ほか

塩原良和（慶應義塾大学）「批判的言論の危機と連帯——「ガッサン・ハージさん」を支持する日本の研究者・市民からの声明」の経緯とその後」

前川真裕子（京都産業大学）「ガッサン・ハージを知るためのごく短い序説」

小森謙一郎（武蔵大学）「反一反ユダヤ主義としてのナショナリズム——ドイツの場合」

黒木英充「テロと文明の認知戦——なぜ私たちは容易くひねられるのか？」

司会：野田仁

◆2025/2/22-24

第4回イスラーム信頼学国際会議
“Overcoming the Divide:
Connectivity and Trust Building for
Middle East Peace” **総括班**

Day 1 (February 22)

Moderator: Wakako Kumakura

Opening remarks: Hidemitsu Kuroki

Session 1. A Genocide in Our Time:
Palestine under Terrorism Discourse and
Neoliberalism

Chair: Masako Kudo

Keynote Speeches:

Ghassan Hage (The University of Melbourne) “On post-Genocidal futures: The bearable and the unbearable, the forgivable and the unforgivable”

James Renton (Edge Hill University)

“The Liberal Democratic State and the Sovereignty of Antisemitism”

Discussants: Hiroyuki Suzuki, Mouin Rabbani (Jadaliyya)

Day 2 (February 23)

Moderator: Wakako Kumakura

Session 2. Multifold Magnetic Fields:
Human Mobility and Connectivity to and
from the Holy Land and Cities

Chair: Mami Hamamoto

Eileen Kane (Connecticut College) “Russia and the Making of the Modern Middle East”

Ilham Khuri-Makdisi (Northeastern

University) “Doctors beyond Borders:

Health practitioners in and from Palestine in the late 19th and early 20th centuries”

David Brophy (University of Sydney)

“Exiles or Intermediaries? Xinjiang Muslims in the Inter-War Middle East”
Discussant: Jin Noda

Session 3. Knowledge for Alternative
Systems: The Islamic International
System, the Islamic Economy, and
Strategic Thoughts on Culture

Chair: Sayaka Takano

Layla Saleh (Demos-Tunisia Democratic Sustainability Forum) “Navigating Post-Assad Syria: Islamism and Local Democratic Knowledge”

Shinsuke Nagaoka “Connecting Islamic

Economy to Post-Capitalism: The

Universal Potential of Its Economic

Knowledge and New Practices”

Maya Mikdashi (Rutgers University)

“Sextarianism: Rethinking Religious

Difference and the State in Lebanon”

Discussant: Tetsuya Sahara

Poster session

Day 3 (February 24)

Moderator: Jin Noda

Session 4. Toward an Open Society:
Countering Rule Based on Division

Chair: Yuko Tobinai

Sumanto Al Qurtuby (Satya Wacana Christian University) “Building Peace for the Middle East Conflict: Perspectives from Indonesia”

Kumiko Makino (IDE-JETRO) “South Africa’s Public Discourse on the Palestine/Israel Conflict: Apartheid, Genocide, and Settler Colonialism”

Minao Kukita (Nagoya University) “How Automated Profiling Can Influence Our Perception of Others”

Discussant: Hiroyuki Tosa (Notre Dame Seishin University)

Closing session

研究会・ワークショップ・セミナー他

◆2024/4/13

International Workshop “Chancelleries, Correspondence, and Diplomacy in the Iranian Plateau” **B01**, **A01**

Introduction: Nobuaki Kondo
Colin Mitchell (Dalhousie University)
“Belletristic Presentations of Princely
Governance during the 1469-70 Timurid
Succession Crisis”
Peter Good (JSPS Fellow/ILCAA) “Stability
by Contract?: The East India Company in
Persia 1600-1747”
Discussion

◆2024/4/17

International Workshop “Roundtable: Persianate Studies in Japan” **B01** ほか

Introduction: Nobuaki Kondo
Ryo Mizukami (JSPS/ILCAA) “Spread of
Imamophilia and Various Confessional
Boundaries: A Study of Sunni and Shi'i
Fadā'il Works in the Premodern Islamic
Lands”
Kaori Otsuya (NIHU/ILCAA) “Circulation,
Translation, and Reception of Arabic
Manuscripts on the History of Mecca and
Medina in the Early Modern Persianate
World”
Haruya Shishido (Meiji University) “Power
Map of Qizilbāsh during the Reign of
Shāh Ismā'il II (1576-77)”
Yui Kanda (ILCAA) “Legacy of Shāh
'Abbās's Book Endowments: A
Preliminary Study of Kufic Qur'āns
with Alleged Twelver Imām Signatures
Endowed to Mashhad”
Norifumi Daito (The Historiographical
Institute, the University of Tokyo)
“The Dutch East India Company and
Local Intermediaries in Post-Safavid Iran”
Naofumi Abe (Ochanomizu University)
“The Safavid Shrine after the Safavids:
How We Delineate the Agency of a
Muslim Shrine in the Age of Decline?”
Discussant: Colin Mitchell (Dalhousie
University)

◆2024/6/6

ILCAA Forum “Gaza War Impact on the Neighboring Countries: Focus on Lebanon Refugee Crisis” **A03** ほか Rawia Altaweel (ILCAA) “Gaza War Impact on the Neighboring Countries: Focus on Lebanon Refugee Crisis” Chair: Hidemitsu Kuroki

◆2024/6/14

International Workshop “Islamic Shi'i Jurisprudence and Western Style Constitutionalism in Iran” **B01** Introduction: Nobuaki Kondo Mateo Mohammad Farzaneh (Northeastern Illinois University) “Islamic Shi'i Jurisprudence and Western Style Constitutionalism in Iran” Discussant: Yasuyuki Matsunaga (TUFS)

◆2024/7/1

International Workshop “Translation Deviations in Multilingual Primary Source Documents in the Russian Colonial Archives” **A02** Talent Mawkanuli (University of Washington) “Translation Deviations in Multilingual Primary Source Documents in the Russian Colonial Archives”

◆2024/7/20-21

原稿読み合わせ会 (クローズド) **B03** 1 日目発表者: 武内進一、小副川琢、熊 倉潤、富樫耕介、飛内悠子、日下部尚徳、 石井正子 2 日目発表者: 見市建、佐原徹哉、山本 沙希、鈴木啓之 全体討論

◆2024/7/20, 25, 8/2

「有事と食糧」研究会・オンライン 連続ワークショップ **公募研究**, **総括班** 7月20日(土) 2024年度 第1回 ワーク ショップ 開会の辞: 黒木英充 報告者: 清水学 (ユーラシア・コンサル タント代表取締役) 「イスラエルの対外政 策と農業技術—ハイテク化とトランスナ ショナル資本主義の展開—」 ディスカッサント: 立山良司 (防衛大学校 名誉教授)

7月25日(木) 第2回ワークショップ (英語
開催)

報告者: ラーウィア・アッタウィール (東
外大AA研/元国連児童基金) 「イエメン
の現状と紅海でのホーシー派の介入につ
いて」

ディスカッサント: 佐藤寛 (開発社会学舎)

8月2日(金) 第3回ワークショップ

報告者: 清田明宏 (国連パレスチナ難民救
済事業機関 (UNRWA))

「長期化するガザ戦争と人道危機—現場か
らの報告—」

ディスカッサント: 錦田愛子 (慶応義塾大学)

◆2024/8/29

ワークショップ「エジプト混合裁判所 における法の適用」 **A02**, **総括班**

報告者: 出川英里 (千葉大学)

「エジプト混合裁判所における法の適用:
19世紀後半の土地訴訟を事例として」

コメンテーター: 野田仁

◆2024/9/19

B03班研究会『すべての指に技法を持つ』（書評会）**B03** ほか

報告者：山本沙希

コメンテーター：押川文子（京都大学名誉教授）

◆2024/10/4

シリーズ「イスラームからつなぐ」
第4巻『移民・難民のコネクティビティ』
書評会 **A03**

評者：鈴木信隆（筑波大学）

司会：黒木英充

◆2024/10/12

シビルダイアログ「クロスステッチとおしゃべり：刺繍で繋がるパレスチナ」
総括班 ほか

司会：村瀬智子

登壇者：並木麻衣（特定非営利活動法人日本ボランティアセンター元職員）、山本真希（パレスチナ刺繍帯プロジェクト）、山本沙希

◆2024/10/15

緊急ワークショップ「中東戦争の新展開：ガザからレバノン、イランへ(?)」**総括班** ほか

司会：酒井啓子（千葉大学）

報告1：黒木英充「いつまで「戦争」、いつまで二重基準？」

報告2：松永泰行（東京外国語大学）「抵抗戦線の終焉？」

報告3：保井啓志（同志社大学）「レバノン大規模攻撃前後の世論調査から見るイスラエル世論の変遷」

◆2024/10/29-2025/1/10

シビルダイアログ「ボードゲームの世界へようこそ：遊びに映された時代と社会」ワークショップ&ギャラリー展示 **総括班** ほか

ワークショップ：10月29日・30日・31日
展示：「遊びと表現展」12月16日～1月10日

◆2024/10/31

公募研究「日本・満洲・朝鮮半島生まれタタール移民のコネクティビティを巡る語りの研究」
研究会 **A03**, **B02**, 公募研究

報告者：沼田彩誉子（日本学術振興会/東京外国語大学）

「故郷」をめぐるインタビュー：東アジア生まれタタール移民と場所の記憶」

コメンテーター：工藤正子

◆2024/11/2

シビルダイアログ
「在日クルド人とホスト社会の受容」
総括班, **A02**, **B02** ほか

趣旨説明：小野亮介

報告者：小野亮介「日本語書籍・雑誌はどのように在日クルド人を報じてきたか」

Sohrab Ahmadian（東京外国語大学/千葉大学）「在日クルド人とホスト社会の受容：歴史的背景と現状の課題」

コメンテーター：明戸隆浩（大阪公立大学）、馬場裕子（大阪大学）

◆2024/11/9

国際研究集会「砂糖、ワイン、ジャウィ文書：17～19世紀、文化的風景の変容」**B01班** ほか

Part I: Sugar

書評会：Norifumi Daito, *Sugar and the Indian Ocean World: Trade and Consumption in the Eighteenth-Century Persian Gulf*

趣旨説明：松方冬子（東京大学史料編纂所）

内容紹介：大東敬典（東京大学史料編纂所）

書評：安平弦司（京都大学）、松井洋子（東京大学史料編纂所）、近藤信彰

リプライ：大東敬典

Part II: Wine and Jawi Documents

Introduction: Norifumi Daito
Ariel Lopez (University of the Philippines Diliman) "Malay Diplomatic Correspondences at the National Archives of the Philippines, c. 1750-1900: Connections and Comparisons"

Discussant: Hiroshi Kawaguchi (Aichi University)

Peter Good (Tokyo University of Foreign Studies) "Persianate Luxury: The Tangible and Intangible Legacy of the Indian Ocean Wine Trade"

Discussant: Joji Nozawa (Waseda University)

◆2024/11/16

シビルダイアログ
「日本への留学から社会での活動へ」
総括班 ほか（限定公開）

黒木英充「イスラエルの攻撃にさらされるレバノンとシリア」

松原康介（筑波大学）「ハマールにおける復興まちづくり活動の報告」

アルマンスール・アフマド（慶応義塾大学）「シリア北部の教育状況」

長沢栄治（東京大学名誉教授）「閉会の言葉：「人間性と理性」をめぐる」

◆2024/11/23

シビルダイアログ「講演と音楽の集い
「ガザの子どもたちのために」

B03班 ほか

講演：鈴木啓之「パレスチナ問題の現在」
酒井啓子（千葉大学）「パレスチナと2024
年の世界」

音楽：音楽ユニット「ラビィサリ」常味裕
司、和田啓、松本泰子

◆2024/11/24

ワークショップ「帝国における翻訳」

A02, A03

報告者：澤井一彰（関西大学）「16世紀後
半のオスマン朝と神聖ローマ帝国をつな
いだ通訳の活動」

小野亮介「鶏鳴・寄付・詩作：在京ター
ル人出版物に関する2024年アメリカ調査
報告」

司会：野田仁

◆2024/12/20

ワークショップ「緊迫する

シリア情勢：政局、治安、難民と
周辺国の関係性」 **B02, A03**

報告者：青山弘之（東京外国語大学）

◆2024/12/21

International Workshop
“Transnational Education of
Rohingya Communities in Exile” **C01**

ほか

Nasir Uddin (University of Chittagong)
“Scopes and Existing Education System
in the Rohingya Refugee Camp in
Bangladesh”

Michiko Ono (Toyo University)

“Educational constraints and
opportunities for stateless Rohingya
communities in Karachi, Pakistan”

Discussant: Yuki Shiozaki (University of
Shizuoka)

◆2025/2/17

ワークショップ「日本における
イスラーム運動の今」 **B02, 総括班**

報告者：ムイーヌッディーン・アキール
（カラチー大学名誉教授）「日本におけ
るイスラーム運動の今」

◆2025/2/28

International Workshop “Challenges
to the Political and Cultural Spaces
of the Modern Levant” **A02, A03**

Maya Mikdashi (Rutgers University)
“Lebanon, Palestine and Israel: A History
of War and Occupation”

Ilham Khuri-Makdisi (Northeastern
University) “Imagined Environments and
the First Modern Arabic Encyclopedia,
Da‘irat al Ma‘arif (1870s-1900s)”

Chair: Hidemitsu Kuroki

◆2025/3/8

International Workshop “Visible
Translators: The History of Quran
Translation in the Colonial and
Postcolonial Periods” **B02, A02,**

総括班

Introduction: Goto Emi
Johanna Pink (University of Freiburg)

“Visible translators: Colonial and
postcolonial histories of Qur’an
translation”

◆2025/3/17

ワークショップ「イスラームから
つなぐ」第3巻『翻訳される信頼』

書評会 **A02**

評者：長谷部圭彦（東洋大学）

司会：野田仁

◆2025/3/17

ブックローンチ「イスラームから
つなぐ」第5巻『権力とネットワーク』

B01 ほか

紹介：近藤信彰

◆2025/3/26

International workshop “Iran and the
International North-South Transport
Corridor” **B01, A02**

Seyed Ali Alavi (SOAS)

“Iran and the International North-South
Transport Corridor in the Turmoil of
Eurasian Security Landscape”

Discussant: Tomohiko Uyama (SRC,
Hokkaido University/ILCAA)

(2025年3月10日現在)

イスラーム信頼学事務局より

編集後記の場所を借りて、信頼学プロジェクトに参画してくださった
すべての方々にお礼を申し上げます。とくに本誌に原稿を寄せてくだ
さった著者のみなさまには、貴重な情報・思考の共有に感謝申し上げ
ます。プロジェクト終了後もウェブ上でバックナンバーの閲覧がで
きるようにしたいと考えています。どうもありがとうございました。

秋葉淳 (あきは じゅん)

1970年生/東京大学/オスマン帝国史

主要業績: 共編著『近代・イスラームの教育社会史: オスマン帝国からの展望』(昭和堂、2014年)

- **ひとこと:** 近代史の研究者と見られることが多いですが、最近では18世紀(近世の後期)がメインになっています。この頃はオスマン帝国で作成された法廷文書を読んで、ジェンダーの問題を考えています。

AHMADIAN, Sohrab

(アフマディヤーン, ソホラブ)

1986年生/東京外国語大学、千葉大学/クルド人ディアスポラ研究、移民・難民研究、多文化共生

主要業績: *Kurdish Diaspora in Japan: Navigating Kurdish Identity and Activism on Social Media* (Lara Momesso, Polina Ivanova (eds.), *Refugees and Asylum Seekers in East Asia*, Palgrave Macmillan, 2024.)

- **ひとこと:** イラン出身のクルド人研究者です。日本のクルド人ディアスポラを社会的に分析し、博士号を取得しました。現在、多文化共生の課題に取り組み、創造的な研究成果を目指しています。

新井和広 (あらい かずひろ)

1968年生/慶應義塾大学商学部/地域研究・歴史

主要業績: 「海を渡る聖者の「記憶」: ハドラマウトとインドネシアにおけるハウル(聖者記念祭)を通じて」(堀内正樹、西尾哲夫編『<断>と<続>の中東: 非境界的世界を遊ぶ』、悠書館、2015年)

- **ひとこと:** 最近ではもっぱら国内で活動していますが、行動が制限されてもこの分野でできることがまだまだあるのを実感しています。まずは今まで集めた史料を使って何ができるのかを考えます。

荒井悠太 (あらい ゆうた)

1990年生/京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科研究員/アラブ・イスラーム史

主要業績: 『或る中世写本の旅路: イブン・ハルドゥーン『イバールの書』の伝播』(風響社、2021年)

- **ひとこと:** アラビア語圏におけるマクロな歴史意識と、ローカル/プライベートな歴史叙述や社会的実践がいかに結びついているのかを最近考えています。

石井正子 (いしい まさこ)

立教大学異文化コミュニケーション学部/フィリピン地域研究

主要業績: 『紛争地域における信頼のゆくえ』(編著、東京大学出版会、2025年)

- **ひとこと:** 2022年までの12年間ほど、人道支援団体に関わってきたのですが、人権の観点からの人道主義批判の文献を読み始めて、うなっております。チャレンジしたいことは、般若の能面をつけて、すり足で歩くこと。能や地唄舞のようにミニマムで普遍的な表現に憧れます。

太田(塚田) 絵里奈

(おおた(つかだ) えりな)

東京大学附属図書館アジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門/前近代アラブ・イスラーム史、地中海史

主要業績: 「「イステイドゥアーによるイジャーザ」に基づく15世紀ウラマーの名目的関係構築」(『西南アジア研究』第97号、1-22頁、2024年)

- **ひとこと:** 「イスラーム信頼学」には特任助教、公募研究代表者、研究協力者として参加させていただき、これまで考えもなかったような研究の可能性に触れるとともに、様々な方々との貴重な出会いを得ることができました。この場をお借りして心より感謝申し上げます。

小野亮介 (おの りょうすけ)

1984年生/東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所研究機関研究員/トルコ近現代史

主要業績: 『近代日本と中東・イスラーム圏』(海野典子との共編著、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2022年)

- **ひとこと:** 両大戦間期のトルコの歴史や同じ時期に極東各地でコミュニティを築いたタタール人に関心を持っています。このような研究に取り組む際、テュルク系諸民族と同時代の日本史をつなぐことを意識しています。

嘉藤慎作 (かとう しんさく)

1990年生/滋賀大学/インド洋海域史、南アジア史、グローバル経済史

主要業績: 'The Dutch East India Company in the Port City of Surat on the West Coast of India in the Eighteenth Century', *Acta Asiatica: Bulletin of the Institute of Eastern Culture* no. 122 (2022): 19-31.

- **ひとこと:** 計画性を持ってコツコツと仕事を進めたいと思います。

亀谷学 (かめや まなぶ)

1977年生/弘前大学人文社会学部/中世中東史

主要業績: 「七世紀中葉におけるアラブ・サーサーン銀貨の発行: アラブ戦士に対する俸給との関係から」(『史學雑誌』第115編第9号、1-37(1505-1541)頁、2006年)

- **ひとこと:** 歴史学の立場から、大学や学会などのいわゆるアカデミアではない場においてどういふことができるだろうかと考えながらも、とりあえず一般書で面白いこと書くためのネタを収集しています。

熊倉潤 (くまくら じゅん)

1986年生/法政大学/中国政治

主要業績: 『新疆ウイグル自治区: 中国共産党支配の70年』(中央公論新社、2022年)

- **ひとこと:** これから取り組みたいと思っていることは、博士論文の問題意識を發展させて、ソ連と中国の少数民族エリート全体の像がとらえられる一般向けの本を書くことです

黒田賢治 (くろだ けんじ)

1982年生/国立民族学博物館グローバル現象研究部/中東地域研究

主要業績: 『大学生・社会人のためのイスラーム講座』(ナカニシヤ出版、2018年)

- **ひとこと:** 現代イランの国家体制について臨地研究をする傍ら、日本と中東・イスラーム世界との関係史の研究にも携わっています。政情不安を背景に、イランでの臨地調査は困難となっていますが、日本の歴史におけるイスラームの展開をテキストをフィールドに研究しています。

小茄子川歩 (こなすかわ あゆむ)

1981年生/京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科/比較考古学

主要業績: 『インダス文明の社会構造と都市の原理』(同成社、2016年)

- **ひとこと:** 衝突する文明ではなく、衝突しない「文明」を人類史の中に再発見し、その多様なあり方を新書や学術書、そして一般向けの単著としてまとめているところです。公刊されましたら、ぜひ買ってください(笑)。

佐原徹哉 (さはら てつや)

1963年生/明治大学/東欧史・中東史

主要業績: 『極右インターナショナルイズムの時代: 世界の右傾化の正体』(有志舎、近刊)

- **ひとこと:** これまではテロと極右思想の関

係を研究してきましたが、今後は、軍事の民営化と極右団体の関係を調べようと考えています。

菅原由美 (すがはら ゆみ)

1969年生／大阪大学人文学研究科／東南アジア・イスラーム史、インドネシア史

主要業績:『オランダ植民地体制下ジャワにおける宗教運動:写本に見る19世紀インドネシア・イスラームの潮流』(大阪大学出版会、2013年)

●**ひとこと:** 海域東南アジアのイスラーム化の歴史にこだわりつけて、だいぶ時間が経過してしまいました。これまでの成果物を出版しつつ、次は世界史的な視点で議論ができないかを模索してみたいと思っています。

須永恵美子 (すなが えみこ)

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所／南アジアの出版文化、デジタル人文学

主要業績:『イスラーム・デジタル人文学』(熊倉和歌子との共編著、人文書院、2024年)

●**ひとこと:** これまで読んできた文献資料やフィールドでの経験を誰かとわかちあい、後世に残すため、デジタルアーカイブや機械が読み取れる形に整理していくことに興味があります。

昔農英明 (せきのう ひであき)

1980年生／明治大学／社会学

主要業績:『移民国家ドイツ』の難民庇護政策』(慶応義塾大学出版会、2014年)

●**ひとこと:** これからは、ホロコーストの反省をふまえて確立されたドイツの「想起の文化」という国民文化のもとで、トルコ系やムスリム移民の差別や排除、共生の問題がどのように議論され、移民がどのように関わっているのかを明らかにしようと思っています。

長岡慎介 (ながおか しんすけ)

1979年生／京都大学／イスラーム経済論・ポスト資本主義論

主要業績:『イスラームからお金を考える』(筑摩書房、2024年)

●**ひとこと:** イスラーム信頼学プロジェクトを通じて明らかになったイスラーム経済の普遍知の非ムスリム社会での実装について構想しています。その手がかりとして、日本各地に残る伝統的経済知の歴史と現状について調べています。

長縄宣博 (ながなわ のりひろ)

1977年生／北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター／中央ユーラシア近現代史

主要業績:『イスラームのロシア:帝国・宗教・公共圏1905-1917』(名古屋大学出版会、2017年)

●**ひとこと:** ロシアに行けないという地域研究の危機の間、どのように探究の地平を開けるか模索しています。

中野祥子 (なかの さちこ)

1988年生／山口大学留学生センター／異文化間心理学、日本語教育

主要業績:「他者を受け入れる:ムスリム移民との信頼構築に対する異文化間心理学の視点」(黒木英充編『イスラームからつなぐ4移民・難民のコネクティビティ』、東京大学出版会、2024年)

●**ひとこと:** 本プロジェクトではムスリム移民・難民と受け入れホストとの信頼関係構築を心理学的にみてきました。今後も、宗教や文化の違いが対人関係や信頼の築かれ方にいかに影響するのかを探求していきたいです。

沼田彩誉子 (ぬまた さよこ)

1986年生／日本学術振興会特別研究員-PD、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所／移民研究、オーラルヒストリー

主要業績:「タートル移民第2世代のコネクティビティ:トルコ移住の語りと日本人調査者の立場性」(黒木英充編『イスラームからつなぐ4移民・難民のコネクティビティ』、東京大学出版会、2024年)

●**ひとこと:** インタビューにおいてトルコ語、日本語、英語を行き来する語り手の豊かな言語世界と、それらをどう解釈し、翻訳し、伝えるかという問題のはざまでもがいています。

見市建 (みいち けん)

1973年生／早稲田大学大学院アジア太平洋研究科／東南アジア政治・社会運動研究

主要業績:『新興大国インドネシアの宗教市場と政治』(NTT出版、2014年)

●**ひとこと:** 色んなことに興味があり、つつい手を広げてきました。しかし研究人生も折り返し地点を過ぎました。焦点を定めて、そろそろもう少しマシなものを書いておきたい、などと考えています。

三浦徹 (みうら とおる)

1953年生／お茶の水女子大学名誉教授・(公財)東洋文庫／アラブ・イスラーム史

主要業績:『イスラームの都市世界』(山川出版社、1997)

●**ひとこと:** デジタル人文学の手法を身につけ、*Dynamism in the Urban Society of Damascus* (2016) の日本語&アラビア語版、『イスラーム世界の歴史的展開』(2011) の改定版を出版したい。

村瀬智子 (むらせ ともこ)

1982年生／東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教務補佐／翻訳、刺繍、地唄舞

主要業績:“Peace-building and Connectivity through Classical Japanese Dance: Jutamai Dance Performance Tied with Palestinian Embroidery” (第3回信頼学国際会議における発表・公演)

●**ひとこと:** 10年以上研究から離れていましたが、アルジェリア戦争という修士時代のテーマから信頼学にご縁をいただき、様々な形で活動に関われたこと、感謝してもしきれません。今後は、国内外の女性の「芸」の継承に関する研究や翻訳、企画等に携わりたいです。

藻谷悠介 (もたに ゆうすけ)

1992年生／大阪大学大学院人文学研究科特任研究員／シリア・エジプト近代史

主要業績:「1830年代エジプト統治下シリアの財務行政」『日本中東学会年報』第38巻第2号、31-61頁、2023年)

●**ひとこと:** これまで1830年代のムハンマド・アリー政権支配下のシリアについて研究してきました。今後はエジプトに視点を移し、19世紀前半のムハンマド・アリー朝による支配を俯瞰することを目指しています。

山本沙希 (やまもと さき)

立教大学異文化コミュニケーション学部ポスドクトラル・フェロー／北アフリカ・マグリブ地域研究、ジェンダー

主要業績:『すべての指に技法を持つ:手仕事織りなす現代アルジェリア女性の生活誌』(春風社、2024年)

●**ひとこと:** イスラーム主義が台頭していた1990年代に、アルジェリア女性ジャーナリストらによって発刊された女性誌の読み込みを亀の歩みで進めています。また最近では、ムスリム社会内部のマイノリティと、マイノリティとして生きるムスリムにも関心を抱いています。

Islamic Trust Studies News Letter

イスラーム信頼学 News Letter No. 05

2025年3月20日発行

文部科学省科学研究費・学術変革領域研究 (A)
「イスラーム的コネクティビティにみる信頼構築：
世界の分断をのりこえる戦略知の創造」
(イスラーム信頼学) 総括班事務局
<https://connectivity.aa-ken.jp/>

[デザイン]
株式会社 デザインコンビピア

[発行]
東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1
電話 042-330-5600 FAX 042-330-5610
<http://www.aa.tufs.ac.jp/>

* 本誌の無断転載、複製、複写の一切を禁ず。

表紙解説

表題：信頼する空間

撮影場所：カザフスタン共和国アスタナ市中央モスク (2024年9月)

撮影者：野田 仁

カザフスタン共和国の首都アスタナに2022年に開かれた新しい中央モスクです。日曜日だったためか、おそらくは地方から出てきた多くの人たちがお祈りに来ていました。中央の広間では、イマームがカザフ語で講話をし、人々は耳を傾けているのか、一休みしているのか。写真からは切れていますが、走り回っている子供もいたり。その中に異質な自分がいても何となく調和がとれているような不思議な空間になっていました。

野田 仁



東京外国語大学
アジア・アフリカ言語文化研究所
Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa
Tokyo University of Foreign Studies

